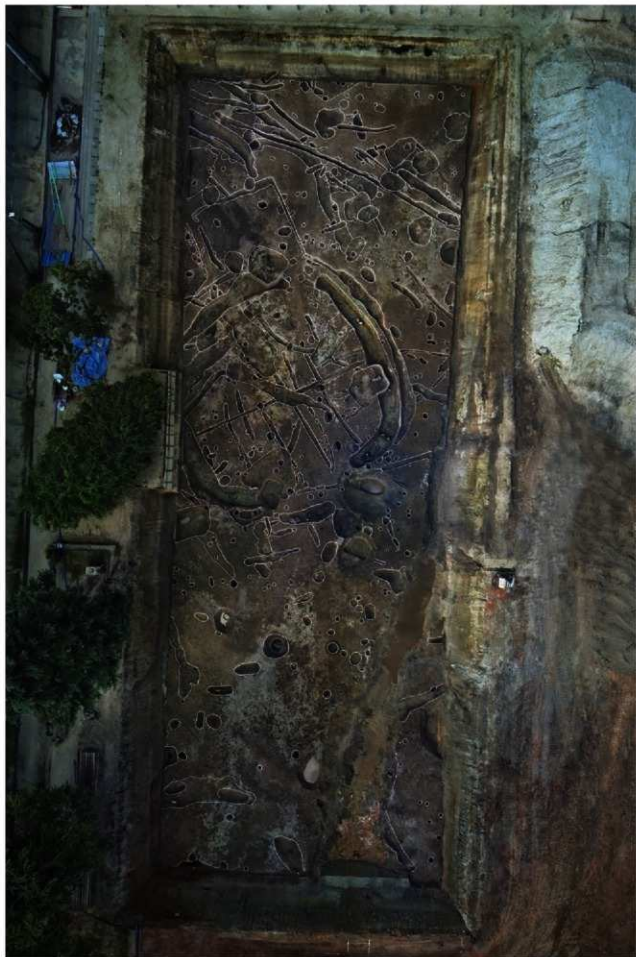


豊中市

服 部 遺 跡

豊中市立第四中学校校舎建替工事に伴う発掘調査報告書



第2面 全景（弥生時代～古墳時代の遺構群）

序 文

豊中市は大阪府の北西部に位置し、北部の千里丘陵と南部の猪名川などの沖積作用によって形成された沖積平野が広がる自然環境に恵まれた地域であります。また古来より旧山陽道（西国街道）や能勢街道などの幹線道路が延び交通の要衝として栄えてきました。近代になると阪急電鉄宝塚線の前身となる箕面有馬電気軌道が開通したことにより大阪市へ移動の利便性は高まり、早くから絶好の住宅地となりました。それに伴い人口は急激に増え、市街地も大きく広がり変貌を遂げていきました。

さて、今回報告いたします服部遺跡は弥生時代から中世にわたる複合遺跡です。これまでの調査では弥生時代終末期を中心とした集落とともに、前方後円形の周溝墓が検出されており、注目されてきました。

今回の豊中市立第四中学校校舎建替工事に伴う発掘調査では弥生時代中期から古墳時代初頭の集落を検出しました。とりわけ弥生時代末から古墳時代初頭にかけては竪穴建物や掘立柱建物をはじめとして多くの遺構が密集しており、これまでの調査成果と合わせると、規模の大きな集落が展開していたことが判明し、弥生時代から古墳時代への躍動期の地域社会を解き明かすうえで新たな知見を得ることができました。

このような調査成果も多くの方々のご理解・ご協力があってはじめて得られるものであります。豊中市教育委員会をはじめとする関係機関の方々には多大なご協力を賜り、また大阪府教育委員会、豊中市立第四中学校の皆様には調査の実施にあたりご指導とご配慮をいただきました。深く感謝申し上げますとともに、今後とも文化財の保護に一層の理解を賜りますよう、お願いいたします。

平成 28 年 3 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府豊中市服部本町4丁目44他21筆に所在する服部（はっとり）遺跡第7次発掘調査報告書である。
2. 調査は、豊中市教育委員会の委託を受け、豊中市教育委員会の指導・監理のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査および報告書作成にかかわる受託契約と契約期間は以下のとおりである。

委託事業契約名 服部遺跡第7次発掘調査

委託契約期間 平成27年5月22日から平成28年3月31日

現地調査を平成27年7月21日に開始し、平成27年11月19日に終了した。整理作業は平成27年11月2日から平成28年1月29日まで行い、平成28年3月31日に本書の刊行をもって事業を完了した。

3. 本調査の実施体制は以下の通りである。

豊中市教育委員会事務局 生涯学習課

課長 玉富香代、主幹 服部聡志、主任学芸員 清水 篤、文化財保護係長 津川雅義、
主査 橋田正徳、主査 陣内高志

公益財団法人 大阪府文化財センター

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、
調査課長補佐 金光正裕、主査 後藤信義、技師 福佐美智子、専門員 片山彰一（写真室）、
山口誠治（保存室）

4. 遺物写真撮影は、中部調査事務所写真室が行い、木製品の保存処理・樹種同定は同保存室が行った。
5. 調査の実施にあたっては、以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

大阪府教育委員会、豊中市立第四中学校、豊中市資産活用部施設整備課、
豊中市教育委員会教育総務課学校施設管理係

6. 本書の執筆・編集は、福佐が担当した。
7. 出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は、豊中市教育委員会で保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構および断面図の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする表示である。数値はすべてメートル単位である。
2. 調査ならびに本書における使用測地系は、世界測地系（測地成果 2000）に基づく平面直角座標系第VI系である。座標数値はすべてメートル単位であるが、図中では単位を省略している。
3. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位はすべて座標北を示す。
4. 発掘調査及び整理作業の実施に際しては、当センター制定の『遺跡調査基本マニュアル』（2010年12月）に準拠した。遺物取り上げなどに使用した地区割りは、第I区画はJ5、第II区画は1である。
5. 地層および土器の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。
6. 本書に用いる遺構名称は調査区・遺構面・遺構種類にかかわらず通し番号を付けた。遺構名称は番号の後に遺構種類を表記した。また竪穴建物など複数の遺構が集合した遺構に関しては遺構種類名称の後に番号を用いた。この番号は通し番号とは異なる竪穴建物など遺構ごとの番号となる。
7. 各挿図の縮尺はそれぞれの図にスケールバーを付している。遺物挿図の縮尺は、土器は4分の1とした。
8. 遺構図における断面位置は、平面図に「L→」を記し、その位置を明示した。遺物実測図は調整が変化する境を1点破線で、稜線を2点破線で表した。
9. 遺物番号は本文・挿図・図版全てに一致する通し番号である。
10. 遺構・遺物の記述に関しては、以下の文献を参考にした。

寺沢 薫・森岡秀人 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』

寺沢 薫・森岡秀人 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』

(財)大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』

橋本 久和 1991 「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和63年・平成元年度』高槻市教育委員会

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

橋本 久和 2009 『中世考古学と地域・流通』真陽社

目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 調査の方法	3
第3章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 既往の調査	8
第4章 調査の成果	
第1節 層序	10
第2節 第2面（弥生時代中期～古墳時代初頭）	14
第3節 第1面（平安時代末～鎌倉時代）	75
第5章 総括	81
報告書抄録	

挿 図 目 次

図1 調査位置図	1
図2 地区割りの方法	3
図3 調査区地区割り図	4
図4 服部遺跡と周辺の遺跡	7
図5 今回の調査区と既往の調査区位置図	8
図6 北壁断面図	11
図7 東壁断面図（1）	12
図8 東壁断面図（2）	13
図9 第2面 竪穴建物1・21溝 平・断面図	14
図10 第2面 全体図	15～16
図11 第2面 竪穴建物2 平面図、5溝 平・断面図	17
図12 第2面 竪穴建物2 平・断面図	18
図13 第2面 5溝 出土遺物実測図	19
図14 第2面 竪穴建物3・90溝 平・断面図	20
図15 第2面 竪穴建物3 48・49・51・55ピット 断面図	21
図16 第2面 90溝 出土遺物実測図	21

図 17	第 2 面	掘立柱建物 1、39・40・134 ~ 136 溝	平面図	22
図 18	第 2 面	掘立柱建物 1	平・断面図	23
図 19	第 2 面	掘立柱建物 1	163 柱穴 出土遺物実測図	24
図 20	第 2 面	39・40・134 ~ 136 溝	断面図	24
図 21	第 2 面	39 溝	土器出土状況図	25
図 22	第 2 面	39 溝	出土遺物実測図 (1)	27
図 23	第 2 面	39 溝	出土遺物実測図 (2)	28
図 24	第 2 面	40 溝	出土遺物実測図	29
図 25	第 2 面	134 溝	出土遺物実測図	30
図 26	第 2 面	135 溝	出土遺物実測図	31
図 27	第 2 面	136 溝	土器出土状況図	32
図 28	第 2 面	136 溝	出土遺物実測図	33
図 29	第 2 面	19・70 井戸	平・断面図	34
図 30	第 2 面	19・70 井戸	出土遺物実測図	35
図 31	第 2 面	2・3・4・8・11 土坑	平・断面図	36
図 32	第 2 面	4・8 土坑	出土遺物実測図	37
図 33	第 2 面	16・17 土坑	平・断面図	38
図 34	第 2 面	16・17・18・29 土坑	出土遺物実測図	39
図 35	第 2 面	18・20・26・29 土坑	平・断面図	40
図 36	第 2 面	32・33・37・38 土坑	平・断面図	42
図 37	第 2 面	32・37・38 土坑	出土遺物実測図	43
図 38	第 2 面	42・44・52・59 土坑	平・断面図	44
図 39	第 2 面	42・44・59 土坑	出土遺物実測図	45
図 40	第 2 面	60・63・64・66・67 土坑	平・断面図	46
図 41	第 2 面	63 土坑	出土遺物実測図	47
図 42	第 2 面	68・69・76 土坑	平・断面図	48
図 43	第 2 面	68・76 土坑	出土遺物実測図	49
図 44	第 2 面	80・86・87・89・104 土坑	平・断面図	50
図 45	第 2 面	86・87・89 土坑	出土遺物実測図	51
図 46	第 2 面	107・110・116・118 土坑	平・断面図	52
図 47	第 2 面	118 土坑	出土遺物実測図	53
図 48	第 2 面	130 土坑	平・断面図	54
図 49	第 2 面	130・131 土坑	出土遺物実測図	55
図 50	第 2 面	131・132・133・146・149 土坑	平・断面図	56
図 51	第 2 面	150・197・212 土坑	平・断面図	57
図 52	第 2 面	150・197・212 土坑	出土遺物実測図	58
図 53	第 2 面	230 ピット	出土遺物実測図	58

図54	第2面	6・7・9・10・14・15・22・23・24・35・36・41・58・81	溝	平面図	60
図55	第2面	6・7・9・10・14・15・22・23・24・35・36・41・58・81	溝	断面図	62
図56	第2面	15・24	溝	出土遺物実測図	63
図57	第2面	61・62・71	溝	平・断面図	64
図58	第2面	61・62	溝	出土遺物実測図	65
図59	第2面	72・73・140	溝	平・断面図	66
図60	第2面	72	溝	出土遺物実測図	66
図61	第2面	91～95・97～99・111・122・123・125・128・129・137・139・144・ 145	溝	平面図	67
図62	第2面	91～95・97～99・111・122・123・125・128・129・137・139・144・ 145	溝	断面図	68
図63	第2面	111・123・139	溝	出土遺物実測図	69
図64	第2面	151・152・153	溝	平・断面図	70
図65	第2面	152・153	溝	出土遺物実測図	71
図66	第2面	204	溝	平・断面図	72
図67	第2面	204	溝	出土遺物実測図	72
図68	第6層			出土遺物実測図	73
図69	第1面			全体図	74
図70	第1面	13	井戸	平・立・断面図	75
図71	第1面	13	井戸	出土遺物実測図	76
図72	第1面	45	井戸	平・立・断面図	76
図73	第1面	12	水溜	平・断面図	77
図74	第1面	30	水溜	平・断面図	78
図75	第1面	12・30	水溜	出土遺物実測図	79
図76	第1面	1	流路	断面図	80
図77	第1面	1	流路	出土遺物実測図	80
図78	第2面			時期別全体図	82
図79				今回の調査区と既往調査全体図	83

写真目次

写真1	機械掘削	2
写真2	遺構図面の作成	2
写真3	豊中市立第四中学校見学会	2
写真4	現地公開	2

写真図版目次

- 図版 1 調査地周辺航空写真
- 図版 2 第 2 面 全体図
- 図版 3 遺構 1. 第 2 面 全景 (南から)
2. 第 2 面 北半全景 (南東から)
- 図版 4 遺構 1. 第 2 面 南半全景 (南から)
2. 第 2 面 竪穴建物 1・21 溝 全景 (北東から)
- 図版 5 遺構 1. 第 2 面 竪穴建物 2・5 溝 全景 (南東から)
2. 第 2 面 竪穴建物 2 全景 (南東から)
- 図版 6 遺構 1. 第 2 面 竪穴建物 1 28 ピット 断面 (南から)
2. 第 2 面 竪穴建物 1 46・47 ピット 断面 (南から)
3. 第 2 面 竪穴建物 1 21 溝 断面 (南東から)
4. 第 2 面 竪穴建物 2 炉 断面 (南から)
5. 第 2 面 竪穴建物 2 112 柱穴 断面 (北から)
6. 第 2 面 竪穴建物 2 114 柱穴 断面 (東から)
7. 第 2 面 竪穴建物 2 北側壁溝 断面 (西から)
8. 第 2 面 竪穴建物 2 5 溝 断面 (南から)
- 図版 7 遺構 1. 第 2 面 竪穴建物 3 全景 (南西から)
2. 第 2 面 竪穴建物 3 断面 (東から)
3. 第 2 面 竪穴建物 3 51 ピット 断面 (南東から)
4. 第 2 面 竪穴建物 3 55 ピット 断面 (南から)
5. 第 2 面 90 溝 土器出土状況 (北東から)
- 図版 8 遺構 1. 第 2 面 掘立柱建物 1、39・40・134・135・136 溝 全景 (南東から)
2. 第 2 面 掘立柱建物 1 全景 (南から)
- 図版 9 遺構 1. 第 2 面 掘立柱建物 1 158 柱穴 断面 (東から)
2. 第 2 面 掘立柱建物 1 159 柱穴 断面 (東から)
3. 第 2 面 掘立柱建物 1 163 柱穴 断面 (西から)
4. 第 2 面 掘立柱建物 1 164 柱穴 断面 (西から)
5. 第 2 面 掘立柱建物 1 165 柱穴 断面 (西から)
6. 第 2 面 掘立柱建物 1 175 柱穴 断面 (東から)
7. 第 2 面 40 溝 断面 (南から)
8. 第 2 面 136 溝 断面 (東から)
- 図版 10 遺構 1. 第 2 面 39 溝 断面 (南から)
2. 第 2 面 134 溝 断面 (南東から)
3. 第 2 面 135 溝 断面 (南西から)
- 図版 11 遺構 1. 第 2 面 39 溝 土器出土状況 (南から)
2. 第 2 面 39 溝 土器出土状況 (南東から)

		3. 第2面	136 溝	土器出土状況 (東から)
図版 12	遺構	1. 第2面	19 井戸	断面 (西から)
		2. 第2面	70 井戸	全景 (東から)
		3. 第2面	70 井戸	断面 (南から)
図版 13	遺構	1. 第2面	11 土坑	断面 (南から)
		2. 第2面	16 土坑	土器出土状況 (南から)
		3. 第2面	16 土坑	断面 (南から)
図版 14	遺構	1. 第2面	17 土坑	土器出土状況 (南から)
		2. 第2面	17 土坑	断面 (南から)
		3. 第2面	18 土坑	断面 (南西から)
図版 15	遺構	1. 第2面	29 土坑	土器出土状況 (南東から)
		2. 第2面	29 土坑	断面 (南東から)
		3. 第2面	32 土坑	断面 (南から)
図版 16	遺構	1. 第2面	37 土坑	土器出土状況 (南西から)
		2. 第2面	37 土坑	断面 (南西から)
		3. 第2面	38 土坑	断面 (南西から)
図版 17	遺構	1. 第2面	59 土坑	断面 (南から)
		2. 第2面	60 土坑	断面 (南西から)
		3. 第2面	64 土坑	断面 (東から)
図版 18	遺構	1. 第2面	66 土坑	断面 (南東から)
		2. 第2面	67 土坑	断面 (南から)
		3. 第2面	68 土坑	土器出土状況 (南から)
図版 19	遺構	1. 第2面	68 土坑	断面 (東から)
		2. 第2面	69 土坑	断面 (西から)
		3. 第2面	76 土坑	断面 (北から)
図版 20	遺構	1. 第2面	107 土坑	断面 (東から)
		2. 第2面	110 土坑	断面 (西から)
		3. 第2面	118 土坑	断面 (西から)
図版 21	遺構	1. 第2面	131 土坑	断面 (南から)
		2. 第2面	133 土坑	断面 (南東から)
		3. 第2面	197 土坑	断面 (南西から)
図版 22	遺構	1. 第2面	6・9・10・14・15・22 溝	全景 (北西から)
		2. 第2面	6 溝	断面 (東から)
		3. 第2面	9 溝	断面 (南東から)
		4. 第2面	14 溝	断面 (西から)
		5. 第2面	15 溝	断面 (西から)
図版 23	遺構	1. 第2面	6・24 溝	全景 (南東から)
		2. 第2面	22 溝	全景 (南東から)

3. 第2面 61・62 溝 全景（北東から）
- 図版 24 遺構 1. 第2面 91・93～95・97・99 溝 全景（南東から）
 2. 第2面 22 溝 断面（西から）
 3. 第2面 24 溝 断面（南東から）
 4. 第2面 61 溝 土器出土状況（東から）
 5. 第2面 62 溝 断面（北西から）
- 図版 25 遺構 1. 第2面 72 溝 断面（東から）
 2. 第2面 81 溝 断面（北東から）
 3. 第2面 111 溝 断面（南東から）
 4. 第2面 122 溝 断面（北東から）
 5. 第2面 140 溝 断面（南から）
 6. 第2面 144 溝 断面（北東から）
 7. 第2面 145 溝 断面（南東から）
 8. 第2面 152 溝 断面（西から）
- 図版 26 遺構 1. 第1面 13 井戸 上層断面（北から）
 2. 第1面 13 井戸 下層断面（北から）
 3. 第1面 13 井戸 井戸枠検出状況（北から）
- 図版 27 遺構 1. 第1面 13 井戸 井戸枠曲物検出状況（北から）
 2. 第1面 45 井戸 井戸枠検出状況（南から）
 3. 第1面 45 井戸 断面（南から）
- 図版 28 遺構 1. 第1面 1 流路 全景（北東から）
 2. 第1面 1 流路 断面（1）（北から）
 3. 第1面 1 流路 断面（2）（南西から）
- 図版 29 地層断面
 1. 北壁断面（南から）
 2. 東壁断面（西から）
 3. 東壁断面（西から）
- 図版 30 遺物
 図版 31 遺物
 図版 32 遺物
 図版 33 遺物
 図版 34 遺物
 図版 35 遺物
 図版 36 遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

今回の調査(図1、図版1)は、豊中市立第四中学校校舎建替工事に先立ち実施した。この工事対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である服部遺跡にあたる。遺跡は弥生時代から中世の複合遺跡で、これまでに6地点で調査が行われ、弥生時代中期後半・弥生時代後期後半から古墳時代初頭・古墳時代後期・鎌倉時代から室町時代の多くの遺構や遺物が検出されている。

そのため平成26(2014)年9月10日に豊中市教育委員会により工事箇所の確認調査が実施され、遺構や遺物が確認された。これにより、工事による遺跡の損壊が避けられないため、記録保存のための発掘調査が必要であると判断された。発掘調査実施について同年12月に豊中市教育委員会は、大阪府教育委員会に「服部遺跡第7次発掘調査について」協力依頼文(平成26年12月8日付豊教地第659号)を出した。これに対し、大阪府教育委員会から豊中市教育委員会に公益財団法人大阪府文化財センター(以下「当センター」とする)が協力する旨を明記した回答(同日付け教委文第2762号)があり、豊中市教育委員会と当センターが協議を進めることとなった。その後、双方協議を進め、平成27年4月20日に服部遺跡第7次発掘調査にかかる協定書を締結した。

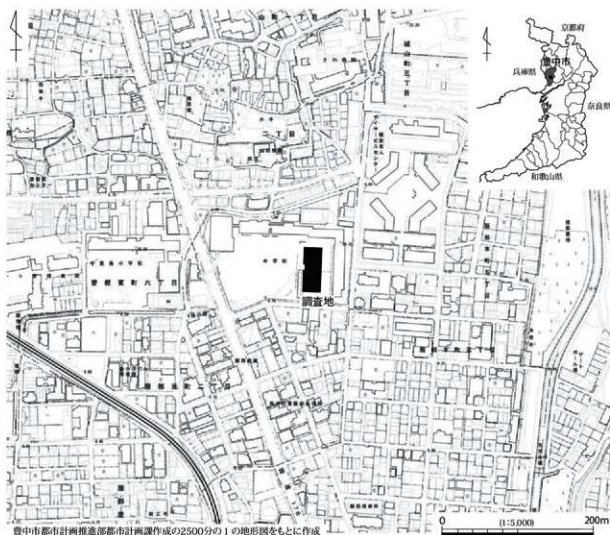


図1 調査位置図

同協定書第8条により、平成27(2015)年5月22日に服部遺跡第7次発掘調査の委託契約を豊中市教育委員会と当センターとの間で締結した。契約期間は平成27年5月22日から平成28年3月31日である。

現地調査は平成27年7月21日から平成24年11月19日まで実施した。調査は、平成27年8月6日より盛土および近現代から中世の作土層をバックホウによって除去し(写真1)、それ以下から人力により地層の掘削及び遺構検出を行った。各遺構面から検出された遺構は、遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した(写真2)。合わせて写真による記録も行った。写真撮影は35ミリカメラ(白黒・カラーリバーサル)、デジタルカメラで行い、必要に応じて6×7カメラ(白黒・カラーリバーサル)を用いた。遺構面においては写真測量を実施し、50分の1縮尺の平面図を作成した。出土遺物は順次洗浄作業、注記作業を行った後に台帳を作成した。10月6日にクレーンによる写真測量及び高所作業車による写真撮影を行い、10月8日に豊中市教育委員会の立会を受けた。

10月9日には豊中市立第四中学校の生徒を対象とした見学会、10月10日には一般市民を対象とした現地公開を実施し、検出された遺構・遺物を公開した(写真3・4)。現地公開には176人の参加者があり、特に地元の方々にも多く来場していただき、盛況のうち終えることができた。

現地での調査を引き続き行い、10月15日に豊中市教育委員会による遺構調査終了立会を受けた。その後埋戻し作業を行い、10月29日に埋戻し終了立会を受け、11月19日にすべての作業を終了した。

現地調査終了後、平成27年11月2日から整理作業を開始した。整理作業は、出土した遺物を台帳登録し、接合・復元の後に実測可能な遺物を全て抽出し遺物実測を行った。実測遺物の中から写真図版に掲載する遺物を選別し、写真撮影を行った。現地調査で撮影した写真は台帳を作成した。遺構図は図面整理作業を行った。その後遺構・遺物挿図、写真図版を作成し、原稿執筆作業を行い、これらを本報告書に掲載した。平成28年1月31日に作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。



写真1 機械掘削



写真2 遺構図面の作成



写真3 豊中市立第四中学校見学会



写真4 現地公開

第2章 調査の方法

発掘調査は『遺跡調査基本マニュアル』（公益財団法人 大阪府文化財センター 2010）に基づいて実施した。

地区割 世界測地系（測地成果 2000）の平面直角座標系第VI系に則り地区割を行った。区画の設定は図2に示したように行った。第I区画は「J5」、第II区画は「1」、第III区画は「20A」、第IV区画は第III区画を10m単位に区画し、1aという表示になる。遺物の取り上げはこの第IV区画を基準として行った（図2・3）。

遺構番号 遺構番号は調査区、遺構面にかかわらず通し番号を付しており、「40溝」のように番号の後に遺構種類名称を用いた。また竪穴建物など複数の遺構が集合した遺構に関しては遺構種類名称の後に番号を用いた。この番号は通し番号とは異なる竪穴建物など遺構ごとの番号となる。

掘削 現代盛り土・近現代から中世作土層をバックホウによって除去し、その下から地層の掘削及び遺構検出を人力により行った。

図面作成 遺構面においては写真測量を実施し、50分の1縮尺の平面図を作成した。遺構は遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。

写真撮影 35ミリカメラ（白黒・カラーリバーサル）、デジタルカメラで行い、必要に応じて6×7カメラ（白黒・カラーリバーサル）を用いた。

整理作業 遺構は現地で作成した実測図や写真測量図から調査区壁断面図、遺構全体図、個別の遺構

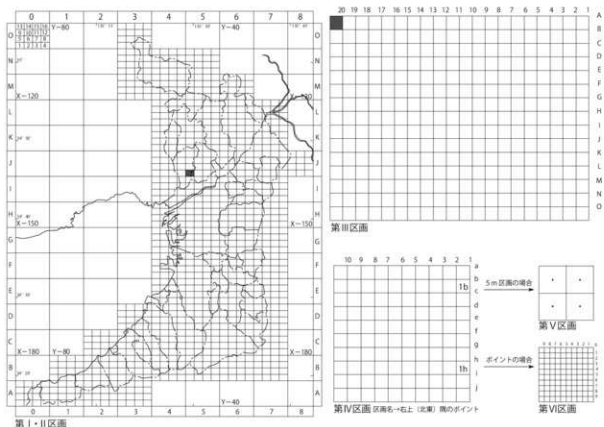


図2 地区割りの方法

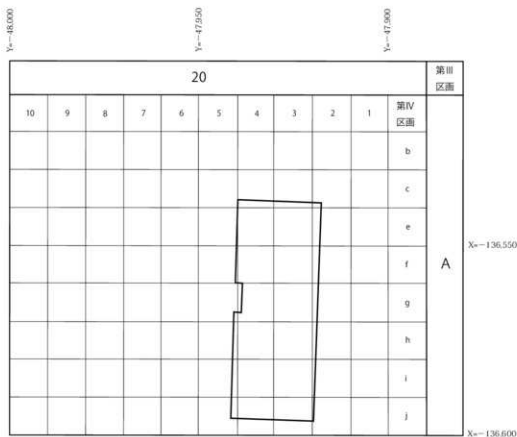


図3 調査区地区割り図

の平・断面図のレイアウト及びトレースを adobe 社製の Illustrator を用いて行った。

遺物は洗浄・注記・接合を行った後、実測可能な遺物の抽出を行い、図化のため実測を行った。遺物挿図は実測した遺物をトレースし作成した。

実測遺物の中から写真図版に掲載する遺物を選別し、横方向からの撮影、俯瞰撮影を行った。

遺構写真図版は遺構面の全景や個別の遺構断面写真などを選別し作成した。遺物写真図版は撮影した遺物をレイアウトし作成した。遺物は掲載遺物と未掲載遺物に分けて収納した。

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

服部遺跡は大阪府北西部、豊中市城山町2丁目、曾根東町5・6丁目、服部本町4・5丁目、服部元町2丁目に位置し、南北約200m、東西約500mにひろがる弥生時代から中世の集落遺跡である（図4、図版1）。今回の調査地は遺跡の中央部にあたる服部本町4丁目の豊中市立第四中学校内である。西側には国道176号が南北に縦断し、周辺は住宅地となっている。最寄駅の阪急宝塚線服部天神駅からは北東に約500mである。

遺跡の所在する豊中市は大阪府北西部に位置し、南は神崎川を隔て大阪市、東は吹田市、西は兵庫県尼崎市・伊丹市、北は池田市・箕面市に接する。地形をみると、市域北部は標高が高く、南部へと低くなり、丘陵台地部と低地部に分かれる。標高が高い市域北部は千里丘陵・待兼山丘陵にあたり、中央部はその千里丘陵から派生する段丘が豊中台地と呼ばれ、市街地の中心になっている。南・西部は低地部で、千里川や猪名川・天竺川等の河川の沖積作用によって形成された沖積平野になる。服部遺跡は豊中台地南側直下の沖積平野にあり、東には天竺川が南流し、標高は4～6mに立地する。

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器時代

市域北西部の待兼山・刀根山丘陵周辺の蛭池北遺跡や蛭池西遺跡、柴原遺跡から後期旧石器時代の石器が出土している。蛭池西遺跡では包含層から国府型ナイフ形石器などがまとめて出土している。

(2) 縄文時代

前期では服部遺跡で前期中葉の土器や石錐などの石器が出土している。豊中市内において前期の遺物が出土しているのは本遺跡のみである。中期になると市域北部の千里川の河岸段丘上の野畑春日町遺跡・野畑遺跡などで集落が形成される。この野畑遺跡は後期前葉まで続く市内最大の当該期の遺跡である。晩期後半になると野畑春日町遺跡・柴原遺跡・新免遺跡・古曾根遺跡・山ノ上遺跡から凸帯文土器が出土している。

市域南部の服部遺跡から南に位置する穂積遺跡では、河内湾から河内潟の変遷が明らかになっている。前期から晩期にかけて遺跡周辺は水没し海となるが、中期には汀線が遺跡付近まで後退し、縄文時代晩期末には陸地化していく。海成層からは中期の土器や石錐が出土しており、付近での集落の存在も想定されている。

(3) 弥生時代

前期は千里川左岸の低位段丘上に山ノ上遺跡、その右岸の微高地上に勝部遺跡、天竺川沿いの沖積地に小曾根遺跡が立地する。そのうち小曾根遺跡からは柱穴や土坑が検出されている。

中期には前期から続く勝部遺跡など前述した遺跡に加えて、新たに台地上に待兼山遺跡・蛭池北（宮の前）遺跡や低位段丘上の新免遺跡が立地する。前述した小曾根遺跡は集落や方形周溝墓の墓域が検出されており、南東部における中核的な遺跡になる。この遺跡から北西の服部遺跡でも竪穴建物が検出されており集落域の広がりと考えられる。

後期になるとそれまで北西部を中心とした地域から南西部の猪名川下流域に利倉遺跡・利倉西遺跡・上津島遺跡などが出現する。この中でも利倉西遺跡は多くの遺構や遺物が出土しており、後期後半から末にかけてこの地域の中核的な遺跡と見られる。利倉遺跡・利倉南遺跡では銅鐸片が、利倉南遺跡では小型仿製鏡が出土している。

弥生時代末から古墳時代初頭には前述の猪名川下流域の利倉遺跡・利倉西遺跡・上津島遺跡などと共に市域南部中央に穂積遺跡をはじめとして、豊島北遺跡・服部遺跡・小曾根遺跡など多くの遺跡が立地するようになる。これらの中でも穂積遺跡では連鑄式銅鑿の未成品が出土しており、青銅器生産が行われていたと考えられ、拠点集落であったと見られる。また服部遺跡では前方後円形の周溝墓、豊島北遺跡でも円形周溝墓が見つかる。

そして服部遺跡からは吉備系、穂積遺跡からは山陰・阿波・吉備・近江系、上津島遺跡では近江・吉備系の土器が出土しており、他地域との活発な交流がうかがえる。

(4) 古墳時代

前期は弥生時代後期後半から継続する遺跡が多く、特に猪名川下流域の利倉西遺跡・上津島遺跡・島田遺跡は古墳時代を通して中核をなす遺跡群である。前期古墳は丘陵上および台地縁辺部に待兼山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳などの前方後円墳が築かれる。

中期になると市域北西部では蛭池東遺跡において須恵器出現直前の大型掘立柱建物（倉庫）群が検出されている。この倉庫群は短期間で廃絶し、初期須恵器段階の集落へと転換する。

南部では、沖積地中央部の穂積遺跡や小曾根遺跡・服部遺跡は縮小していくようで、猪名川下流域の上津島遺跡・利倉西遺跡に中心が移っていく。上津島遺跡では流路から多量の木製品や未成品が出土しており、木製品の加工・製作が行われていたと考えられる。また韓式系土器や瓦質土器といった朝鮮半島との関係を示す遺物が出土しており、大陸との交流がうかがえ、水運拠点としての性格を持っていたと見られる。

中期古墳は市中央部の大石塚古墳・小石塚古墳に継続する桜塚古墳群に集約される。中期後半から後期にかけては、蛭池北古墳群・穂積古墳・利倉南古墳群などが小地域ごとに分散し築かれる。穂積古墳は墳丘は中世までに削平され残存しないが、直径30mの円墳である。低地部には、このような後世の削平により墳丘が失われた古墳が存在する可能性が高い。

後期には桜井谷窯跡群での須恵器生産の本格化に伴い、千里川流域に多くの遺跡が立地するようになる。その生産者集団の中心的な集落が内田遺跡であり、その他に中位・低位段丘上に柴原遺跡・本町遺跡・新免遺跡などが立地する。

(5) 飛鳥～平安時代

市域北西部の低位段丘上では、蛭池北遺跡が古代になり拡大していく。千里川流域の中位段丘には金寺山鹿寺が成立し、その西の本町遺跡が主導的な遺跡となる。9世紀から10世紀になるとそれまで中位段丘上に見られた遺跡が減少し、南端の大型建物を含む掘立柱建物群が検出されている曾根遺跡が中心となっていく。

南部では古墳時代後期から引き続き、猪名川下流域の上津島南遺跡・上津島遺跡・利倉西遺跡・島田遺跡などが中心となる。8世紀に上津島遺跡では大型建物と倉庫が建てられる。ここからは多量の瓦や埴が出土しており、寺院あるいは官衙施設が存在した可能性が指摘されている。さらに島田遺跡でも大型倉庫が検出されている。このような状況から古墳時代からの水運拠点をさらに公的な港とした可能

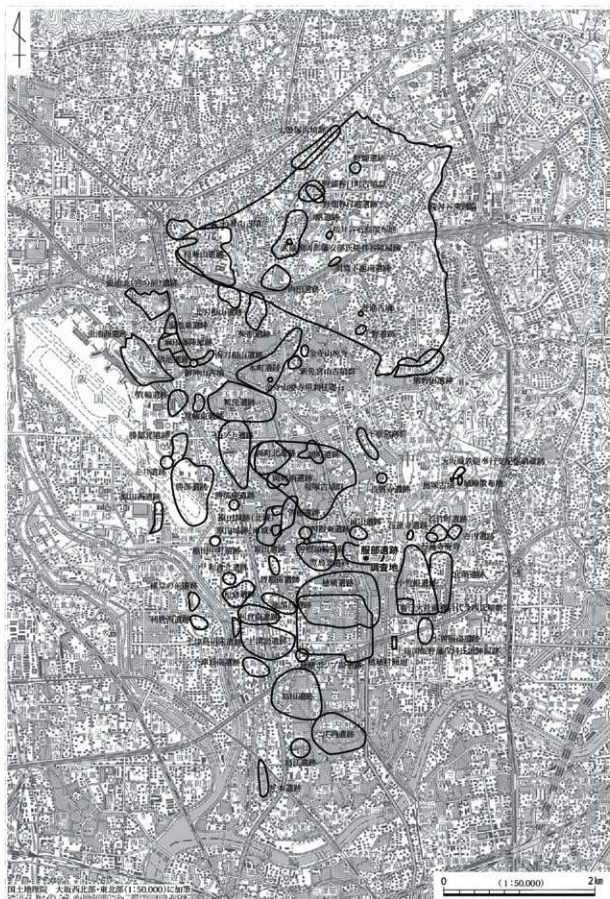


図4 服部遺跡と周辺の道路

性が考えられる。

(6) 中世

中世には沖積地の開発が活発となり、小曾根遺跡・豊島遺跡・服部遺跡・穂積遺跡・津島遺跡・利倉遺跡など市域南部の低地部の集落が増加する。小曾根遺跡・穂積遺跡・利倉遺跡では環濠と考えられる溝が検出されており、環濠で集落を囲む集村的な景観が広く見られるようである。また豊島北遺跡では鎌倉時代の摂津国豊島郡の北条と南条の里境畦畔や、坪境の区画溝を含む条里型水田が検出されており、当該期には条里制が成立していたことが判明している。

第3節 既往の調査

服部遺跡は、弥生時代中期後半から中世にいたる集落遺跡で、これまでに豊中市教育委員会を主とし6次にわたる調査が行われている(図5)。

第1次調査(昭和60年調査)は、今回の調査地である豊中市立第四中学校の体育館建替工事に伴い行われた。調査以前は遺跡として周知されていなかったが、南側に隣接して服部遺跡が存在したため、豊中市教育委員会により試掘調査が実施された。その結果、中世および弥生時代後期の遺物包含層・遺構面を検出し、服部遺跡が従来の知見よりも更に北側に広がることを判明し調査に至った。調査面積は約140㎡である。調査では弥生時代末の土坑が検出され、壺・高杯・甕などの土器が多く出土した。平安時代から中世にかけては10世紀代の土坑、13世紀末から14世紀初頭の井戸や流路が検出されている。井戸は曲物を4段積み、その上に方形の板枠を据えるものであった。この井戸からは、土師器皿・瓦器碗などが出土している。

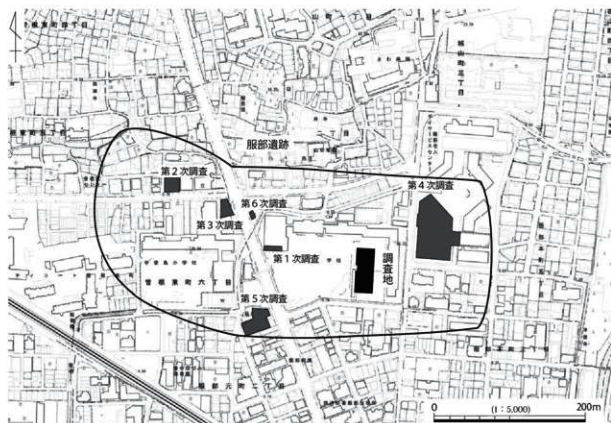


図5 今回の調査区と既往の調査区位置図

第2次調査（平成5年調査）は、共同住宅建設に伴い行われ、調査面積は247㎡である。古墳時代後期の掘立柱建物や溝が検出され、当該期の集落の存在が確認された。また包含層から縄文時代前期中葉の土器や石器が出土した。前述したように豊中市内では前期の遺跡は本遺跡のみで注目される。

第3次調査（平成5年調査）は、共同住宅建設に伴い行われ、調査面積は210㎡である。調査では弥生時代末の流路、古墳時代後期の流路、中世の土坑・掘立柱建物が出された。このうち24基が密集して検出された土坑群は粘土採掘坑と見られる。それらの平面形状は規格的であることから、ある程度專業化された集団の存在が指摘されている。

第4次調査（平成6年調査）は、調査地から北東50mの府営・公団住宅建替工事に伴い行われた。調査面積は3850㎡である。調査では弥生時代末の前方後円形周溝墓をはじめとして竪穴建物・掘立柱建物・井戸・土坑・溝などの多くの遺構が検出された。前方後円形周溝墓の規模は全長約18m、後円部直径15.5mで、主体部は削平を受け確認されていない。遺構の重複関係から、この周溝墓がつくられた後に集落域になることが想定されている。

第5次調査（平成7年調査）は、共同住宅建設に伴って行われ、調査面積は630㎡である。調査では弥生時代から古墳時代、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物が出された。弥生時代中期後半では竪穴建物・土坑・溝が検出され、当該期に集落が営まれ始めることが明らかになった。弥生時代後期後半から古墳時代初頭では竪穴建物・掘立柱建物・井戸・土坑・溝の集落域が検出され、近江系や東海系の外来系土器も出土している。その後、古墳時代後期には水田域になるが氾濫堆積層により埋没する。平安時代から鎌倉時代には掘立柱建物や井戸・溝が検出されている。

第6次調査（平成24年調査）は自治会館建設に伴い行われた。調査面積は88㎡である。調査では弥生時代後期から末にかけての土坑・溝が検出された。溝は竪穴建物の周囲に巡らされた溝と考えられる。

以上の既往調査の成果を踏まえて、今回の調査では弥生時代中期後半や弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落が存在することが考えられた。

第4章 調査の成果

第1節 層序

堆積層は近現代耕作土を第1層、人力掘削を開始した層を第6層とし、今回の調査の基盤層となる第7層の水成堆積層まで7層に分けられた(図6～8、図版29)。

遺構面は計2面の調査を行い、第5層下面を第1面、第6層下面を第2面とした。

第1層 灰オリーブ色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。層厚は0.08～0.22 mである。近代に形成された耕作土層と考えられる。

第2層 2層に分けることができる。第2-1層は北半がオリーブ黄色粗砂から礫混じり極細砂、南半は暗灰黄色から明黄褐色極粗砂混じり細砂から中砂である。層全体に斑鉄が沈着する。近世に形成された耕作土層と考えられる。層厚は0.14～0.28 mである。

第2-2層はオリーブ黄色から灰色の極細砂や粗砂から礫混じり極細砂から細砂の水成層である。

第3層 4層に分けることができる。第3-1層から第3-3層は中世に形成された耕作土層と見られる。第3-1層は、北半が灰黄褐色からオリーブ黄色粗砂から極粗砂混じり極細砂、南半は灰色粗砂混じりシルト質細砂である。層中にマンガンが沈着する。層厚は0.08～0.26 mである。第3-2層は灰黄色からにぶい黄褐色礫や粗砂が混じる極細砂である。層厚は0.08～0.2 mである。第3-3層はにぶい黄色粗砂混じり極細砂である。層全体にマンガンが沈着する。

第3-4層はにぶい黄色極細砂の水成層である。層厚は0.06～0.1 mである。

第4層 4層に分けることができる。第4-1層はオリーブ黄色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂の耕作土層である。層全体に斑鉄が沈着する。層厚は0.08～0.1 mである。第4-2層はオリーブ黄色極細砂から細砂の水成層である。層厚は0.07～0.24 mである。

第4-3層は灰オリーブ色中砂から礫混じりシルト質細砂の耕作土層である。層全体に鉄斑が沈着する。層厚は0.04～0.18 mである。第4-4層はにぶい黄色から灰オリーブ色中砂から礫や、灰オリーブ色礫混じり細砂から中砂層で上方に粗粒化する水成層である。層厚は最大0.55 mである。

第5層 2層に分けることができる。第5-1層は黄褐色から灰色中砂から粗砂混じり細砂質シルトの耕作土層である。層厚は0.04～0.12 mである。第5-2層は、北半が暗灰黄色粗砂から礫混じりシルト質細砂、南半が灰色極粗砂から礫混じりシルト質細砂の耕作土層である。層厚は0.05～0.12 mである。この第5-2層下面を第1面として調査を行った。

第6層 2層に分けることができる。第6-1層は黒褐色からオリーブ黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。下位の第6-2層との層境は明瞭である。層厚は0.09～0.24 mである。

第6-2層は、北半より砂質が強い黄灰色粗砂から礫混じりシルト質細砂の古土壌である。下位の第7層との層境は漸移的である。調査区北側では第6-1層の削平により第6-2層は残存しなかった。層厚は最大0.32 mである。この第6-2層下面を第2面として調査を行った。層中からは弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土し、当該期の竪穴建物や土坑などの多くの遺構を検出した。

第7層 灰オリーブ色を主とした粗砂混じり粘土質シルトから礫の水成層で、層厚は0.3 m以上である。

第2節 第2面（弥生時代中期～古墳時代初頭）

第6-1・2層を掘削除去し検出した面を第2面として調査した。調査区北端を除き、第6-2層が残存していたが、第6-2層上面では遺構の平面確認が困難であったため、第6-2層を除去した第6-2層下面で遺構を検出した。遺構は弥生時代中期から古墳時代初頭の竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、井戸2基、土坑・溝・ピットを多数検出した（図10、巻頭図版、図版2～4）。

竪穴建物1（図9・10、図版4・6）

北端中央、X=-136542・Y=-47928付近において建物南西隅を検出し、さらに調査区北側にひろがる。建物から南西側に建物周囲に掘削された外周溝の可能性が考えられる21溝を検出した。

建物 重複する遺構の新旧関係は52土坑より後出である。平面形は方形と推定される。南西辺の方位はN-34°-Wである。検出した規模は南東辺2.4m、南西辺1.9m、床面までの深さ0.04mである。

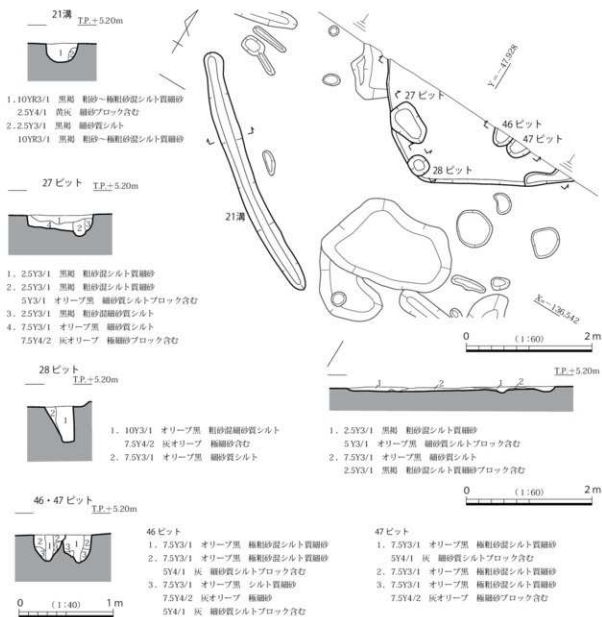


図9 第2面 竪穴建物1・21溝 平・断面図

南東辺で壁溝を検出し、規模は幅 0.20 m、深さ 0.04 m である。

ピットは 4 基を検出し、そのうち 46・47 柱穴が主柱穴にあたる可能性が高い。46・47 柱穴は重複しており、造り替えと考えられる。

建物埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は黒褐色粗砂混じりシルト質細砂ブロックが混じるオリーブ黒色細砂質シルト、第 1 層はオリーブ黒色細砂質シルトブロックが混じる黒褐色粗砂混じりシルト質細砂である。

出土物は建物埋土から壺・器種不明小片、46・47 ピットから器種不明小片が出土したが、いずれも小片のため図示し得なかった。

外周溝 建物から 2.4 m 南西側に 21 溝を検出した。規模は、幅 0.3～0.4 m、深さ 0.2 m である。

埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は黒褐色細砂質シルトに 1 層の粗砂から極粗砂混じり黒褐色シルト質細砂が混じる。第 1 層は黄灰色細砂ブロックが混じる黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・甕・器種不明小片が出土したが、いずれも小片のため図示し得なかった。

竪穴建物 2 (図 10～13、図版 5・6)

北西側、X=-136550・Y=-47935 付近において検出した。建物から北東側には外周溝と考えられる 5 溝を検出した。

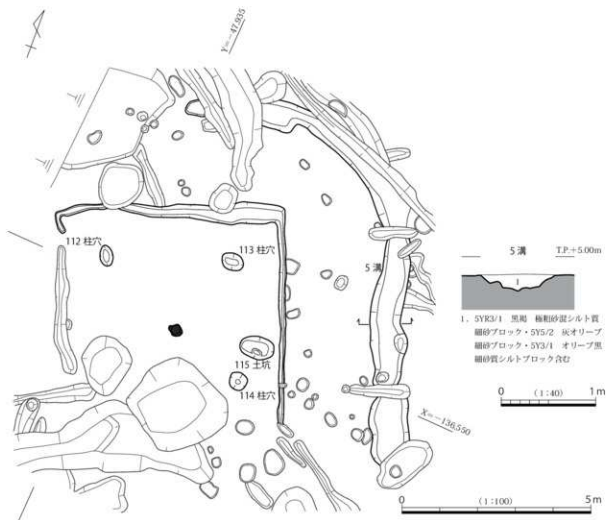


図 11 第 2 面 竪穴建物 2 平面図、5 溝 平・断面図

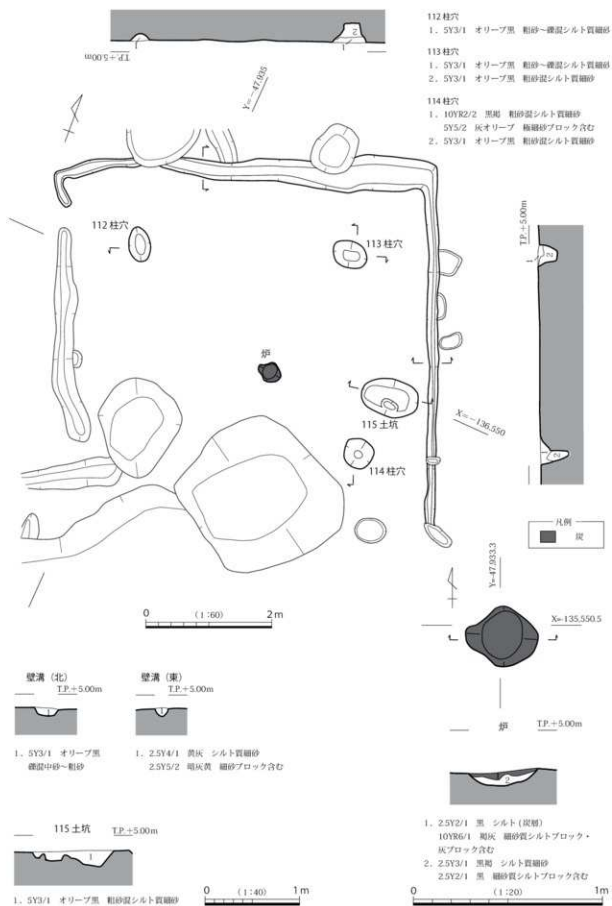


図12 第2面 竪穴建物2 平・断面図

建物 重複関係から 33・38 土坑に先行し、35・36・204 溝より後出する遺構である。建物の掘りこみは検出できず、柱穴・炉・土坑・壁溝のみを検出した。

平面形は方形である。東壁溝の方位は $N-24^{\circ}-W$ である。検出した規模は東西 6.0 m、南北 5.7 m である。壁溝は北辺から東辺にかけて検出した。規模は幅 0.15～0.55 m、深さ 0.04～0.09 m である。

床面からは 3 基の主柱穴を検出した。柱芯間隔は 112・113 柱穴間が 3.34 m、113・114 柱穴間が 3.06 m である。柱穴は主としてオリブ黒色粗砂混じりシルト質細砂により埋められていた。遺物は 112～114 柱穴それぞれから器種不明小片が出土した。

建物中央に炉を検出した。平面形は不整形な円形で、断面形は浅い皿状である。規模は長軸 0.38 m、短軸 0.32 m、深さ 0.08 m である。埋土は 2 層に分かれ、第 2 層は黒色細砂質シルトブロックを含む黒褐色シルト質細砂である。第 1 層は炭層で灰や細砂質シルトブロックを含む。

外周溝 建物から 2.5 m 北東側において L 字形に曲がる 5 溝を検出した。重複する 8・60 土坑、6・9・10 溝に先行し、104 土坑、7・22 溝より後出する。規模は幅 0.4～1.0 m、深さ 0.1～0.18 m である。

埋土は黒褐色極粗砂混じりシルト質細砂ブロックと基盤層の第 7 層に由来する灰オリブ色細砂ブロックやオリブ黒色細砂質シルトブロックが混じり合う層である。

遺物は壺・高杯・有孔鉢・甕片が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 13)。1 は有孔鉢である。外面はタタキ、内面は板ナデ調整である。

時期は出土遺物が少量のため特定できないが、重複関係から弥生時代後期後半と考えられる。

竪穴建物 3 (図 10・14～16、図版 7・30)

北西端、 $X=-136553$ ・ $Y=-47937$ 付近において建物南東隅を検出し、さらに調査区西側にひろがる。建物の南側に外周溝と考えられる 90 溝を検出した。

建物 重複関係から 81 溝に後出する。平面形は方形と推定される。南北辺の方位は $N-23^{\circ}-W$ である。検出した規模は東西 2.76 m、南北 3.8 m、深さ 0.18 m である。

床面を掘り下げた段階で 4 基のピットを検出した。そのうち 51 ピットが主柱穴にあたる可能性がある。壁際に多数の小穴を検出した。いずれも直径 0.1 m 前後、深さ 0.05～0.1 m である。壁の崩落を防ぐための杭跡と考えられる。

埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は基盤層を由来とする灰色中砂から粗砂に灰オリブ色極細砂ブロックと黒褐色粗砂混じりシルト質細砂ブロックを含む整地層であり、この第 2 層上面が床面と考えられる。第 1 層は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂にふい黄褐色細砂が混じる。

遺物は甕片・器種不明細片が出土したが、図示し得なかった。

外周溝 建物から 3.3 m 南側で 90 溝を検出した。規模は、幅 0.6～1.4 m、深さ 0.2～0.35 m である。

埋土は 3 層に分けられ、第 3 層はオリブ黒色粗砂混じりシルト質細砂、第 2 層は灰色中砂から粗砂である。第 1 層は黒褐色極粗砂から礫混じりシルト質細砂で、この層中に多くの土器が投棄されていた。

遺物は壺・高杯・器台・鉢・甕片の多くの土器が出土し、そのうち 17 点を図示し得た (図 16)。

2 は細頸壺である。口縁部は僅かに外反する。調整は、外面の口縁部付近に横方向のヘラミガキ、口縁部から頸部は縦方向のヘラミガキを細かく施す。内面は口縁部はヨコナデ、口縁部から頸部は、粘土接合痕が残る粗いナデである。

3・4 は高杯である。3 は有稜高杯である。調整は、杯部から脚部外面に縦方向のヘラミガキを施し、



図 13 第 2 面 5 溝
出土遺物実測図

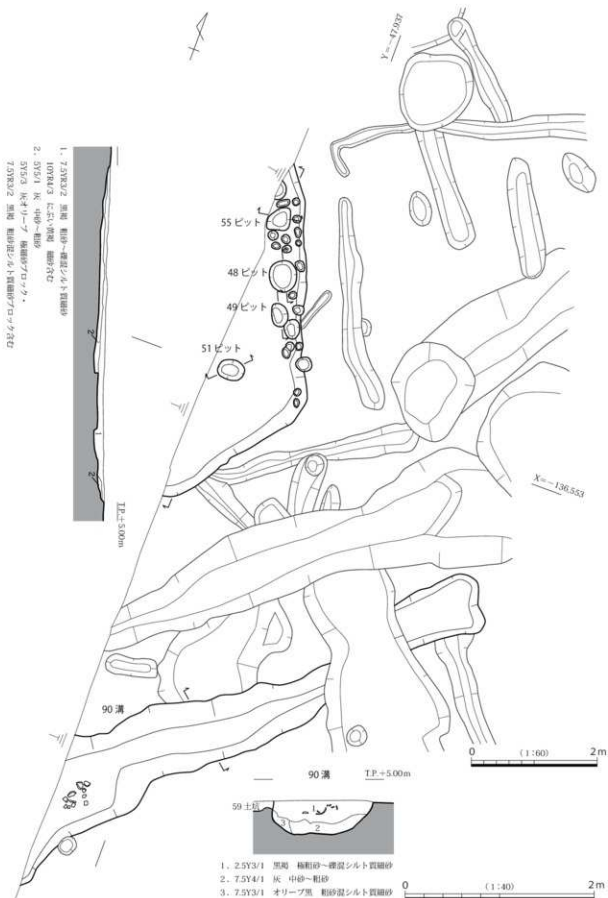


図14 第2面 竪穴建物3・90溝 平・断面図

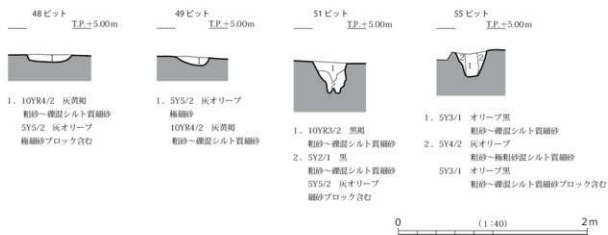


図15 第2面 竪穴建物3 48・49・51・55ビット 断面図

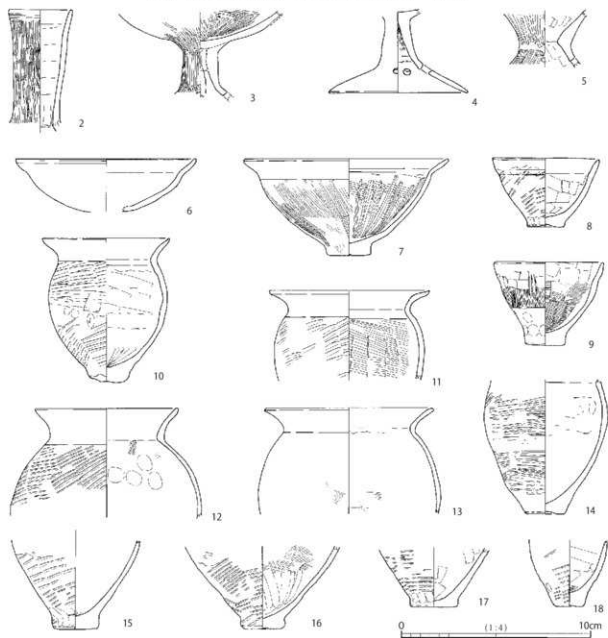


図16 第2面 90溝 出土遺物実測図

杯部内面はハケ後にヘラミガキを施す。4は柱状部から屈曲し裾部へと広がる脚部である。3・4共に脚部は中空で、四方に円孔を穿つ。

5は器台である。調整は外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面は板ナデである。四方に円孔を穿つ。

6～9は鉢である。6は口縁部が内湾し、体部高が低い浅い鉢である。内外面共に磨滅のため調整不明である。7は口縁部が体部から外側に屈曲する鉢で、口縁端部はまるくおさめる。調整は、内外面をハケ後に口縁部をヨコナデし、体部内面は縦方向のヘラミガキを施す。8・9は小型の鉢である。口縁部はわずかに内湾し、口縁部と体部の境をややくびれさせ口縁部と体部を区別する。口縁端部は丸くおさめる。8は口縁部から体部外面をタタキ整形後、口縁部内外面をヨコナデする。内面は板ナデである。底部は上げ底である。9は内外面をハケ調整後に口縁部内外面と体部下半にナデを施す。

10～18は甕である。口縁端部は、10・11はややとがりぎみにつまみあげ、12・13は端部をまるくおさめる。体部外面のタタキは10～12・14～18が右上がりもしくは水平方向である。13は磨滅のため不明瞭であるが左上がりと思われる。10・15・16はタタキ整形後体部中位の接合部付近にナデ

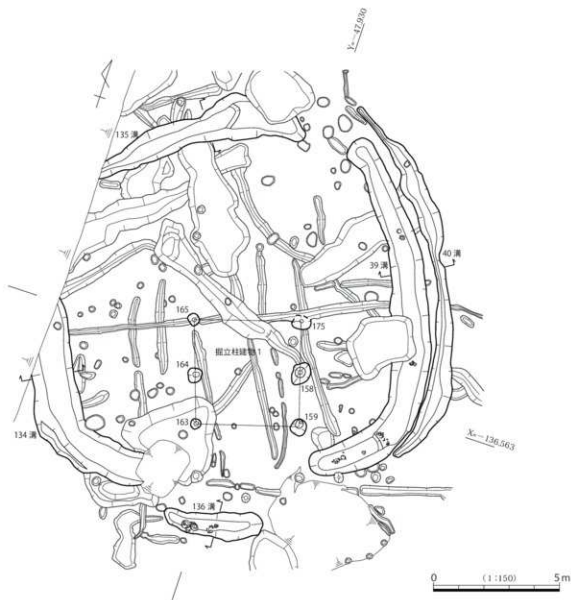


図17 第2面 掘立柱建物1、39・40・134～136溝 平面図

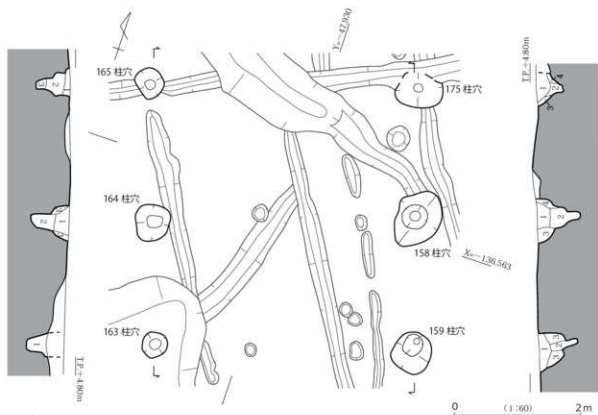
を施す。煤は、13は口縁部外面、14は体部外面、16は体部内外面に付着する。18は小型の糞である。

時期は弥生時代後期後半から末と考えられる。

掘立柱建物 1 (図 10・17・18、図版 8・9)

中央、X=-136563・Y=-47930 付近で検出した。重複する遺構の新旧関係は 130 土坑、91・95・99・145 溝より後出である。

規模は桁行 2 間、梁行 1 間、柱穴芯々で東・西・南辺ともに 4.2 m、北辺 4.3 m である。面積は 17.85 m² である。棟は南北方向で、主軸は N-18°-W である。柱芯間隔は 163・164 柱穴間が 1.94 m、164・165 柱穴間が 2.2 m、159・158 柱穴間が 2.0 m、158・175 柱穴間が 2.0 m である。



165 柱穴

1. 10YR3/1 黒褐 極粗砂～微細シルト質細砂
2. 5Y4/2 暗灰黄 中砂～粗砂含む
2. 5Y3/1 オリーブ黒 中砂～極粗砂
3. 5Y3/1 オリーブ黒 シルト質細砂中砂～極粗砂

164 柱穴

1. 5Y3/1 オリーブ黒 極粗砂～微細シルト質細砂
2. 5Y3/1 オリーブ黒 中砂～極粗砂
3. 2.5Y3/1 黒褐 微細中砂～粗粗砂

163 柱穴

1. 2.5Y3/1 黒褐 極粗砂～粗砂質シルト質細砂

159 柱穴

1. 5Y3/1 オリーブ黒 極粗砂～微細シルト質細砂
- 5Y4/2 灰オリーブ 中砂～粗砂ブロック含む
2. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 極粗砂～微細シルト質細砂ブロック含む
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 中砂～粗砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 シルト質細砂ブロック含む

175 柱穴

1. 7.5YR3/1 黒褐 粗砂質シルト質細砂
2. 2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂～中砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 中砂～粗砂ブロック含む
3. 2.5Y3/2 黒褐 細砂～中砂
- 2.5Y5/4 黄褐 細砂～中砂ブロック含む
4. 2.5Y5/4 黄褐 細砂～中砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 細砂～中砂ブロック含む

158 柱穴

1. 2.5Y3/1 黒 極粗砂～微細シルト質細砂 炭化物粒含む
- 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～中砂ブロック含む
2. 2.5Y3/1 黒褐 微細シルト質細砂
3. 2.5Y3/2 黒褐 細砂～中砂
- 2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂含む
4. 2.5Y3/2 黒褐 細砂～中砂
- 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～中砂ブロック含む

図 18 第 2 面 掘立柱建物 1 平・断面図



図19 第2面 掘立柱建物1
163柱穴 出土遺物実測図

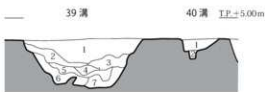
(図19)。19は裏底部である。内外面に板ナデ調整である。

この掘立柱建物1の周囲を39・40・134～136溝が取り囲むように掘られており、建物に関連する遺構と考えここで報告する。

39溝 (図10・17・20～23、図版8・10・11・30・31・34)

中央東側で検出し、掘立柱建物1東側を南北方向にのび南端で屈曲する。東側にはこの溝に沿うように40溝が巡る。重複する遺構の新旧関係は86土坑に先行し、146土坑、91・122溝より後出する。

規模は幅0.85～1.4m、深さ0.37～0.54mである。埋土は7層に分けられた(図20)。第7層は黒色シルト質細砂ブロックが混じる灰オリーブ色中砂から極粗砂、第6層は黒色シルト質細砂が混じる灰オリーブ中砂から粗砂、第5層は灰オリーブ色中砂から粗砂ブロックが混じる黒色シルト質細砂、第4層は黒褐色粗砂混じりシルト質細砂、第3層は炭化物粒を含む黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。第2層は灰オリーブ色細砂から中砂ブロックが混じる黒褐色シルト質細砂で、層上部の一



39溝

1. 10YR3/1 黒黒 粗砂～礫混シルト質細砂
2.5Y4/2 暗灰黄 中砂～粗砂ブロック含む
2. 10YR3/1 黒黒 シルト質細砂
5Y5/2 灰オリーブ 中砂～粗砂
10YR3/1 黒黒 細砂～中砂・
5Y5/2 灰オリーブ 細砂～中砂ブロック含む
3. 2.5Y2/1 黒 粗砂～礫混シルト質細砂
4. 2.5Y3/1 黒黒 粗砂混シルト質細砂
5. 2.5Y2/1 黒 シルト質細砂
5Y5/2 灰オリーブ 中砂～粗砂ブロック含む
6. 5Y5/2 灰オリーブ 中砂～粗砂
2.5Y2/1 黒 シルト質細砂含む
7. 5Y4/2 灰オリーブ 中砂～極粗砂
2.5Y2/1 黒 シルト質細砂ブロック含む

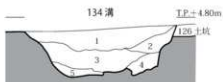
40溝

1. 10YR3/2 黒黒 粗砂～極粗砂混シルト質細砂
5Y5/2 灰オリーブ 極細砂ブロック含む
2. 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂
10YR3/2 黒黒 粗砂～極粗砂混シルト質細砂ブロック含む

136溝 TP.+4.80m



1. 2.5Y4/1 黄灰 極粗砂～中砂混細砂
2. 2.5Y3/1 黒黒 中砂混シルト
3. 2.5Y5/4 黄灰 細砂質シルト混極細砂



1. 5Y3/1 オリーブ黒 極粗砂～礫混中砂～粗砂
10YR4/4 褐色 粗砂含む
2. 10YR3/1 黒黒 中砂～粗砂
2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂ブロック含む
3. 7.5Y2/1 黒 極粗砂～礫混シルト質細砂
2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～中砂ブロック・
2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～中砂含む
4. 7.5Y2/1 黒 極粗砂～礫混シルト質細砂
5. 10Y3/1 黒黒 中～粗砂
7.5Y2/1 黒 極粗砂～礫混シルト質細砂含む

135溝 TP.+5.00m



1. 2.5Y3/1 黒黒 粗砂～礫混シルト質細砂
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混細砂質シルト
3. 7.5Y4/2 灰オリーブ 中砂～礫
4. 7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト質細砂
5. 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質細砂
7.5Y4/2 灰オリーブ 粗砂～極粗砂含む

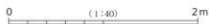


図20 第2面 39・40・134～136溝 断面図

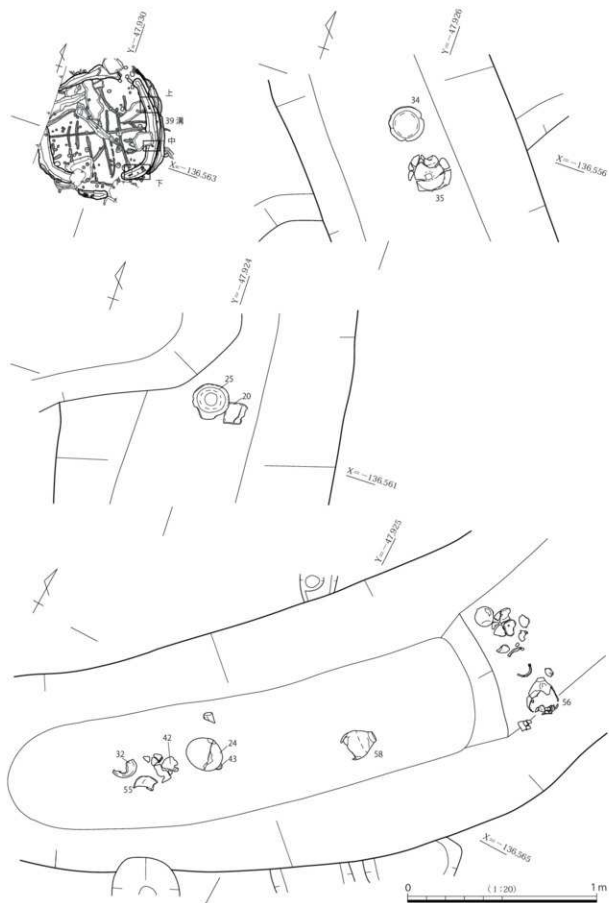


图21 第2面 39溝 土器出土状况图

部に灰オリーブ中砂から粗砂の薄層が帯状に堆積する。第1層は暗灰黄色中砂から粗砂ブロックが混じる黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。第7層から第2層にかけて自然に埋没していき、第1層により人為的に埋め戻されたと見られる。下層の第2～7層から多くの土器が出土した。その中には完形ではないが、器形を留めた状態で横転したり、つぶれた状態で出土したのが見られた。溝が埋没していく過程で土器が投棄されたものと考えられる。

遺物は壺・高杯・鉢・有孔鉢・甕・製塩土器が出土し、そのうち45点を図示し得た(図22・23)。

第1層から57、第2～5層から20・24・25・32・34・42・43・55・58、第2～7層から21～23・26～30・33・35～41・44・46・47・50～54・59・61～65が出土した。

20～31は壺である。20・21は細頸壺である。20は縦方向のヘラミガキ後、口縁上部にナメ方向、さらに端部は横方向のヘラミガキを施す。内面は板ナデやハケ調整後、上部を縦方向のヘラミガキを施す。21は剥離のため調整不明瞭であるが、外面はヘラミガキを施す。

22～24は広口壺である。22は口縁端部を上下に拡張し、端面は剥離により不明瞭であるが、4条の櫛描波状文を施し、四方向に2個一対の竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。23・24は頸部が短く、口縁部へ大きく外反する。23は肩部に櫛状工具による列点文を巡らす。内面は口縁部から頸部に横方向のヘラミガキを施す。24は口縁部端部に5条以上の櫛描波状文を巡らし、2個一対の竹管文を押捺する。頸部から体部全体にヘラミガキを施す。

25・26は二重口縁壺である。頸部はほぼ直立し、口縁部は大きく外反し、さらに斜め上方にのびる。25は口縁部端部に8条の櫛描波状文を巡らし、三方向に2個一対の竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。頸部外面は上半がヨコナデ、下半は板ナデ後ユビナデ調整、内面は口縁部がヨコナデ後横方向のヘラミガキ、頸部は板ナデである。26は口縁部端部に4条の擬凹線を施す。

27～29は底部である。27・29は上げ底である。27は外面を縦方向のヘラミガキ、内面はハケ調整である。28は外面をタタキ後ナデ調整を行い、縦方向のヘラミガキを施す。

30はミニチュア壺である。外面は口縁部から肩部をヨコナデし、体部はナデ調整である。内面はユビオサエ後、口縁部から体部上半をヨコナデ調整する。

31は粗製の小型丸底壺である。全体に磨滅しており調整が不明瞭であるが、口縁部から頸部をヨコナデし、口縁部に1条の波状文が非常に細い線で巡らされている。体部は板ナデによる面が残る。内面は体部下半をユビオサエ整形後、板ナデで全体に粗雑なつくりである。

32～40は高杯である。32は椀形高杯である。内外面共に磨滅のため調整不明である。33～36は有稜高杯である。いずれも杯体部から口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。34は体部が浅く、全体的に扁平である。内外面の最終調整はヘラミガキが主体となる。33は口縁部がヨコナデであるが、34～36は外面全体にヘラミガキを施す。ヘラミガキは33・34・36が縦方向に施し、35は口縁部外面は横方向、体部は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向後放射状に施す。36は四方に円孔を穿つ。37～40は脚部である。柱状部は38・39は中実である。円孔は37・38・40は四方に穿つ。38の円孔のうち1箇所は穿ちなおしたのか、内面に粘土の継ぎ足し痕が残る。39は円孔が6箇所残存しており、8箇所に穿たれていたと見られる。

41～47は鉢である。41は口径32cmの大型の鉢である。口縁部は垂直に面をもち、やや上方につまみ上げる。体部外面はタタキ後ナデ調整し、上半は横方向、下半は縦方向のヘラミガキを施す。内面はハケ調整後に口縁部と体部上半は外面と同じく横方向、下半は縦方向のヘラミガキを施す。

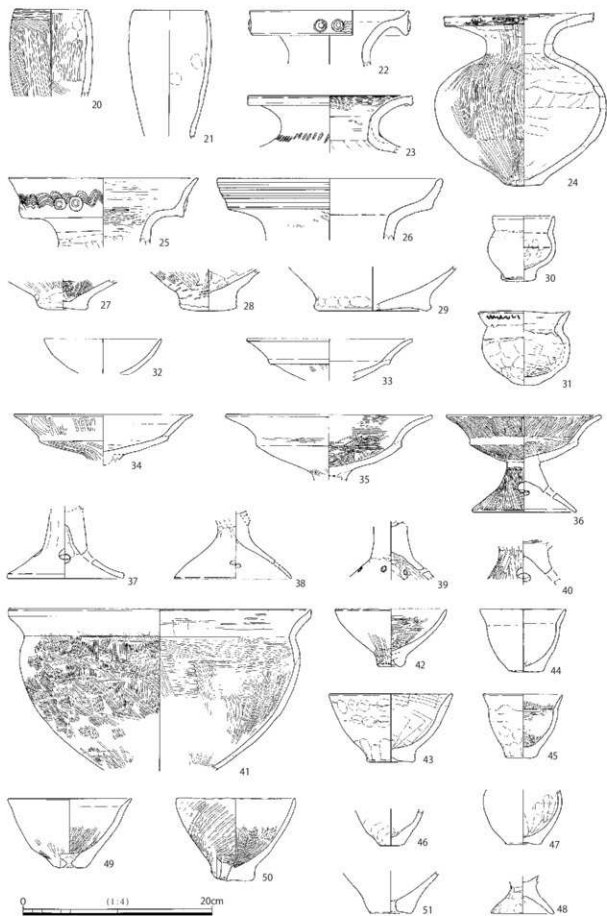


图 22 第 2 面 39 沟 出土物实测图 (1)

42～47は小型鉢である。椀形の42・43、口縁部をもつ44・45がある。42・43の底部は中央にくぼみをもつ。42は内外面にヘラミガキを施す。43・45はユビオサエ後ナデ調整であるが粘土接合痕が残り、全体に雑な調整である。

48は台付鉢である。外面はユビオサエのちナデ調整である。

49～51は有孔鉢である。49は内外面共に磨滅のため不明な箇所が多いが、縦方向のヘラミガキが施される。50は外面がタタキ整形後ナデ、内面はハケ調整である。

52～65は甕である。52・53は小型の甕である。口縁端部の形状は52・56が面をもち、53・54・57が丸く、55は受け口状につまみ上げている。いずれも体部中位に最大径をもつ。外面はすべて右上がりまたは水平なタタキ整形である。タタキ後体部接合部などをナデ調整する。さらに55・56は縦方向のハケ調整を行う。内面は52・53・55・56・59・60はハケ、57は板ナデ調整である。58は上半はユビオサエ、下半はハケ後板ナデ調整である。53は口縁部から体部外面、59は体部外面に煤が付着する。56・57・62・64の底部は中央にくぼみをもつ。60は底部外面に木葉痕が残る。

66は製塩土器である。体部と脚部接合部に粘土帯を握りながら貼り付ける。

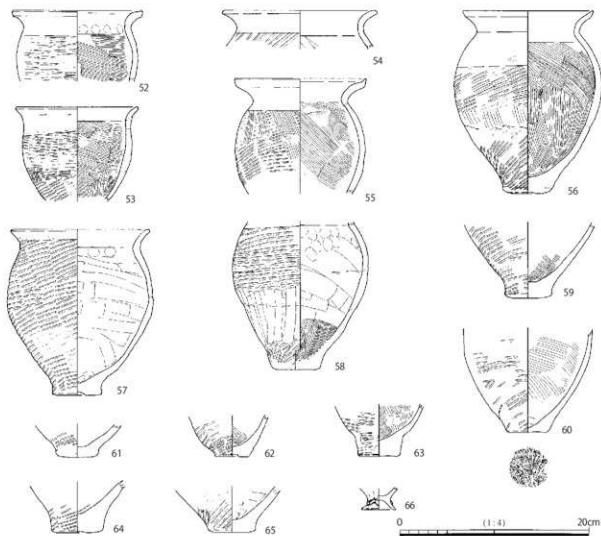


図23 第2面 39溝 出土遺物実測図(2)

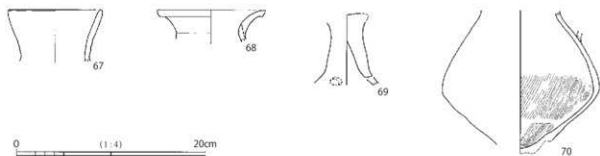


図24 第2面 40溝 出土遺物実測図

40溝 (図10・17・20・24、図版8・9・31)

中央東側で検出し、39溝の東肩に沿って南北方向にのびる。重複する遺構の新旧関係は212土坑、92・122・123溝より後出する。規模は幅0.15～0.91m、深さ0.09～0.32mである。

埋土は2層に分けられ(図20)、第2層は黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂ブロックを含む灰オリブ極細砂である。第1層は39溝第1層と同層の灰オリブ極細砂ブロックが混じる黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂である。この40溝は39溝と重複していないが、南端は39溝と0.15m程に近接している。溝掘削時の地表面はすでに削平されていることを勘案すると、2条の溝が重複していた可能性は十分考えられるが、40溝は39溝と同層の第1層により埋め戻されていることを考えると、同時併存していた時期があると見られる。

遺物は壺・高杯・水差し土器・甕が出土し、そのうち4点を図示し得た(図24)。

67・68は壺である。67は直口壺、68は広口壺である。68は頸部は短く外反し、口縁端部は面をもつ。

69は高杯である。脚部は中空で、三方に円孔を穿つ。

70は台付水差し土器である。外面は磨滅のため不明である。内面は上半が磨滅のため不明であるが、下半はハケ調整である。

134溝 (図10・17・20・25、図版8・10・32)

中央西側で検出し、掘立柱建物1の西から南側にかけて屈曲する。重複する遺構の新旧関係は130・150土坑、93・129・144溝より後出である。規模は幅1.5～1.65m、深さ0.39～0.47mである。

埋土は5層に分けられた(図20)。第5層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂が混じる黒褐色中砂から粗砂、第4層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂である。3層は暗灰黄色細砂から中砂のブロックが混じる黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂である。層中に暗灰黄色細砂から中砂の薄層が帯状に見られる。これらの第3～5層から図25-71～73・75～86の多くの土器が出土した。第2層は暗灰黄色中砂ブロックが混じる黒褐色中砂から粗砂、第1層は褐色粗砂ブロックが混じるオリブ黒色極粗砂から礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・高杯・鉢・有孔鉢・甕が出土し、そのうち16点を図示し得た(図25)。

71～75は壺である。71は直口壺である。72～74は広口壺である。72は頸部は短く直立し、口縁部へ外反する。口縁端部はまるくおさめる。外面は口縁部から頸部をハケ後、口縁部をナデ、端部付近をヨコナデし、肩部は縦方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部から頸部へハケ調整後横方向のヘラミガキを施す。73は頸部が短く外反し、口縁部端面に沈線を巡らす。74は頸部は直立し、口縁部は水平に広がる。口縁端部は上方に拡張し受け口状である。端面に沈線を巡らせ、竹管文を押捺した円形浮文と竹管文を交互に施文する。胎土は生駒山西麓産である。

75は二重口縁壺である。擬口縁端面に9条の櫛描波状文を巡らし、2個一對の竹管文を押捺した円形浮文を等間隔に12ヶ所貼り付ける。肩部にはキザミを巡らす。

76～79は高杯である。76～78は椀形高杯である。いずれも脚部は中実である。76は外面と杯部内面にヘラミガキを行う。円孔は76・77は四方に円孔を穿つ。78は2ヶ所に開けられているが、1ヶ所は円形に整えていない。79は有稜高杯である。杯部は深く、口縁部は大きく外反し端部を丸くおさめる。脚部は中空で、四方に円孔を穿つ。

80は鉢である。口縁部は外反し、端部を丸く収める。全体に剥離が激しく調整は不明瞭であるが、外面は口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラミガキである。

81は有孔鉢である。外面はタタキ整形、内面はナデ調整である。

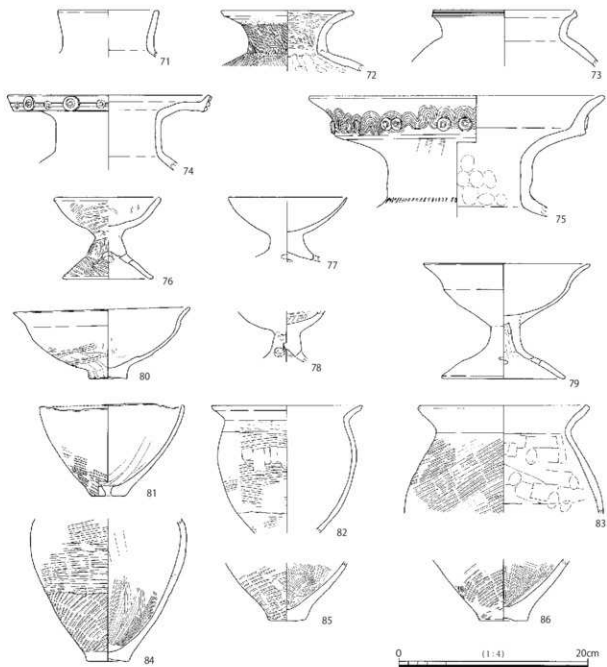


図25 第2面 134溝 出土遺物実測図

82～86は甕である。いずれも右上がりもしくは水平なタタキ整形の甕である。82・83は口縁端部に面をもち、84・86は底部中央がくぼむ。煤は83が体部中位、84は体部上半、86は体部下半に付着する。

135溝 (図10・17・20・26、図版8・10)

中央西側で検出し、39溝北端から西へ1.8m離れて、掘立柱建物1北側を巡る。重複する遺構の新旧関係は37土坑に先行し、59土坑・111溝より後出する。規模は0.6～1.9m、深さは0.26～0.36mである。埋土は5層に分けられる(図20)。第5層は灰オリーブ色粗砂から極粗砂が混じるオリーブ黒色シルト質細砂、第4層はオリーブ黒色シルト質細砂、3層はオリーブ黒色中砂から礫の崩落土で、この層が堆積した後に再掘削が行われている。第3～5層からは図26-88・90・94・96・98などの多くの土器が出土した。第2層はオリーブ黒色粗砂から極粗砂混じり細砂質シルト、第1層は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂で39溝の第1層と似通っている。第1・2層から図26-87・89が出土した。

遺物は壺・高杯・鉢・甕が出土し、そのうち12点を図示した(図26)。

87～89は壺である。87・88は広口壺である。いずれも頸部から口縁部に外反し、87は口縁端部を上下に肥厚する。87は口縁部直下に1ヶ所穿孔し、肩部にはキザミを施す。89は底部外面に木葉痕が残る。

90～92は高杯である。90・91は共に脚柱状部は中実である。外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面にはシボリ痕が残る。92は低脚の高杯である。杯部内面・脚部外面は縦方向のヘラミガキ、脚部内面はハケ調整である。

93は小型鉢である。外面はユビオサエ後ナデ調整である。底部は外面中央にくぼみをもち、内面に

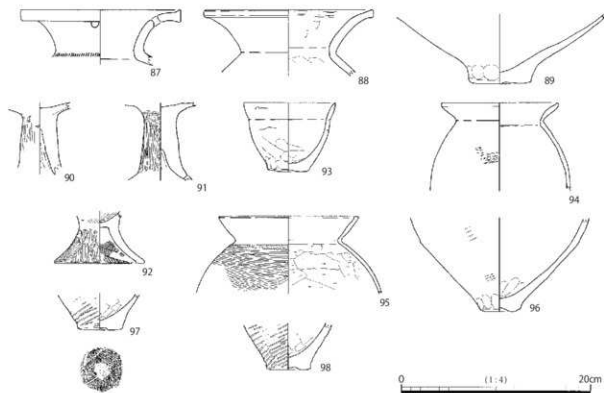


図26 第2面 135溝 出土遺物実測図

煤が付着する。

94～98は甕である。94・96～98は右上がりのタタキ整形の甕である。94は口縁端部をややつまみあげている。底部外面は、96は中央に円形のくぼみをもち、98は周囲をへらで整え中央のみ不整な方形にくぼむ。97は底部に木葉痕が残る。95は布留形甕である。口縁部は内弯し、端部は肥厚する。外面は縦方向後横方向のハケ調整、内面はケズリである。外面に煤が付着する。胎土は生駒山西麓産である。混入品と見られる。

136溝 (図10・17・20・27・28、図版8・9・11・32)

中央で検出し、39・134溝から南に1m突出して東西方向に掘削されている。規模は幅0.6～1.05m、深さ0.09～0.38mである。埋土は3層に分けられ(図20)、第3層は黄灰色細砂質シルト混じり極細砂、第2層は黒褐色中砂混じりシルトである。この層から図28-99・101・104・106が出土した。第1層は黄灰色中砂～極粗砂混じり細砂である。この層から図28-100・103・105が出土し、100の壺は据え置かれた状態であった。

遺物は壺・高杯・鉢・甕が出土し、そのうち8点を図示し得た(図28)。

99・100は広口壺である。99は頸部が直立し口縁部へ大きく開く。口縁部端面には擬凹線を巡らし、竹管文を押捺した円形浮文と竹管文を交互に加飾する。頸部には半裁竹管文を押捺し、肩部に焼成後穿孔がされる。胎土は生駒山西麓産である。100は肩部が大きく張り、体部は扁平である。肩部と頸部の境界に突帯の剥離した痕跡があり、ハケ調整が残る。その下に櫛描波状文を巡らす。体部上半は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向のヘラミガキ調整である。内面は下半がハケ、上半はナデ調整である。

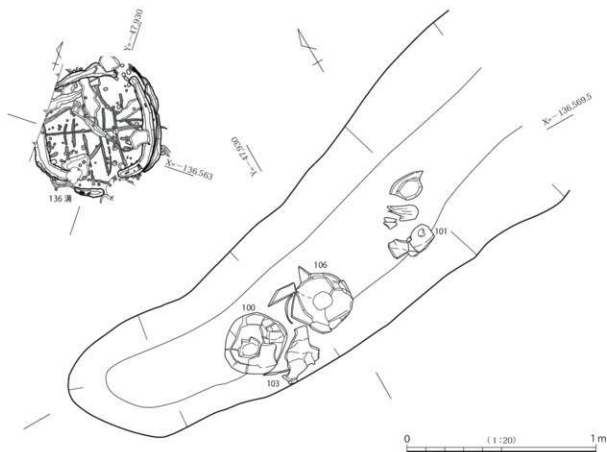


図27 第2面 136溝 土器出土状況図

101・102は高杯である。101は有稜高杯である。杯体部は浅く、口縁部は大きく外反する。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部が斜方向、体部が横方向のヘラミガキを施す。102は脚部である。内外面共に板ナデ調整、裾端部にキザミを巡らす。五方に円孔を穿つ。

103・104は鉢である。103は逆円錐形鉢である。外面は磨滅のため調整不明であるが、内面はハケ後ナデ調整である。104は口縁部が外反する鉢で、底部は輪台状である。外面はタタキ整形後に板ナデ調整、内面はナデ後放射状のヘラミガキを施す。

105・106は甕である。いずれも右上がりのタタキ整形の甕である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。106は体部が球胴化している。

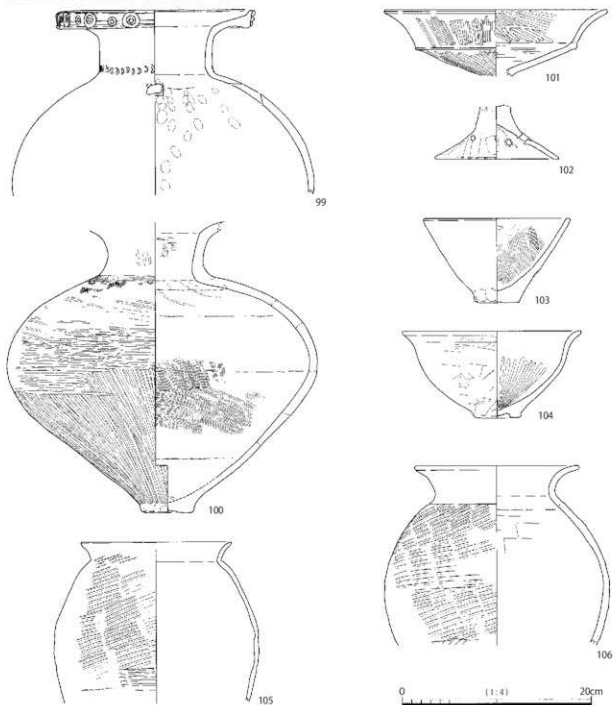


図28 第2面 136溝 出土遺物実測図

39・40・134～136 溝は周溝墓の可能性も考えられるが、東側は 39・40 溝によって二重に巡っていることから、掘立柱建物 1 の周囲を区画する溝と考えられる。これらの時期は 135 溝から布留形甕が出土しているものの、他の出土遺物から古墳時代初頭（庄内式併行期古段階）と考えられる。

19 井戸（図 10・29・30、図版 12・33）

北側東端、 $X = -136552$ ・ $Y = -47920$ で検出し、調査区東側に続く。平面形は円形、断面形は逆台形である。検出した規模は直径 1.74 m、深さ 1.0 m である。

埋土は 4 層に分けられた。第 4 層は灰色中砂から礫層で、層中に細砂の薄層をささむ滞水状態で堆積した層である。第 3 層はオリーブ黒色中砂から粗砂に黒色シルト質細砂ブロックを含む。この第 3 層堆

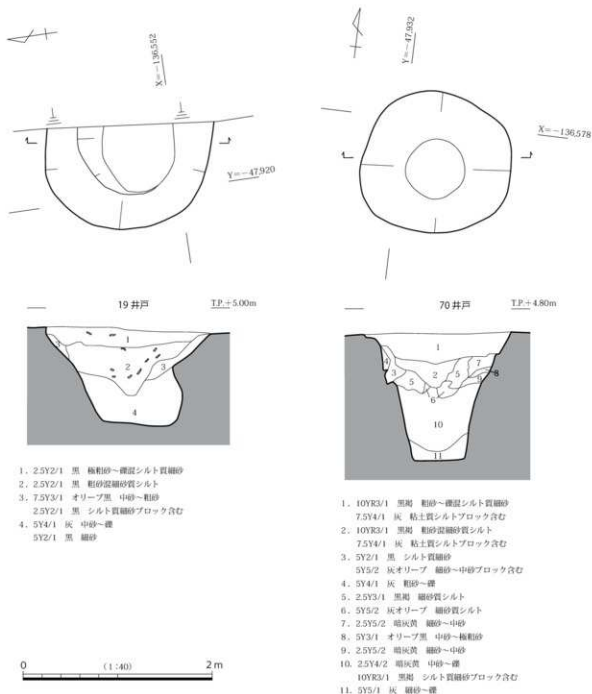


図 29 第 2 面 19・70 井戸 平・断面図

積後に掘り直され、第1・2層は再掘削後の堆積層である。第2層は黒色粗砂混じり細砂質シルト、第1層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂の埋戻し土である。遺物のほとんどが第1・2層から出土した。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明片が出土し、そのうち4点を図示し得た(図30)。

107は直口壺である。口縁端部付近を2段に強いヨコナデにより、凹線のように仕上げ、端部以下は縦方向のヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラミガキである。

108は鉢である。外面はヘラミガキを施し、内面はヘラケズリ調整である。

109は高杯である。脚柱部は中実で、外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。円孔は一方向のみ残存した。

110は小型の甕である。口縁部は緩やかに屈曲し、やや内湾する。口縁部から体部全体をタタキ整形後、口縁部から体部上半にナデ調整をする。内面はハケ調整である。

時期は古墳時代初頭(庄内式併行期古段階)と考えられる。

70井戸(図10・29・30、図版12・33)

南側中央、X=-136578・Y=-47932で検出した。平面形は円形、断面形は逆台形である。規模は直径1.55m、深さ1.33mである。

埋土は11層に分けられる。第11層は灰色細砂から礫、第10層は黒褐色シルト質細砂ブロックを含む暗灰黄色中砂から礫である。いずれの層もラミナが観察でき、滞水状態で堆積した機能時堆積層である。第9層は基盤層に由来する暗灰黄色細砂から粗砂の崩落土である。第8層はオリブ黒色中砂から極粗砂の水成層である。第7層は第9層と同様の基盤層に由来する暗灰黄色細砂から中砂の崩落土である。この層が堆積した後に再掘削され第6層が堆積する。第6層は灰オリブ色細砂質シルト、第5層は黒褐色細砂質シルトで第6層よりシルトが強い。第4層は基盤層に由来する灰色粗砂から礫の崩落土である。第3層は黒色シルト質細砂に灰オリブ色細砂から中砂ブロックを含み、この層が堆積した後再び掘削されている。第2層は黒褐色粗砂混じり細砂質シルトに基盤層の下層に堆積する灰色粘土質シルト層のブロックを含む。第1層は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂に第2層と同じく灰色粘土質シルトブロックを含む。これら第1・2層により埋戻しされている。

遺物は壺・高杯・器台・鉢・甕・器種不明片が出土し、そのうち3点を図示し得た(図30)。

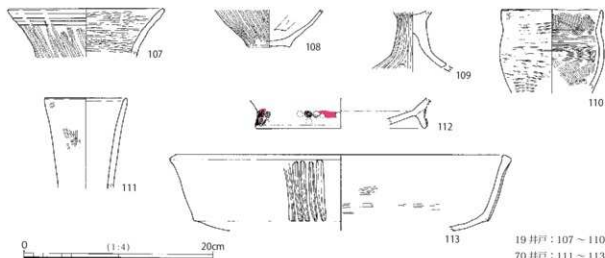
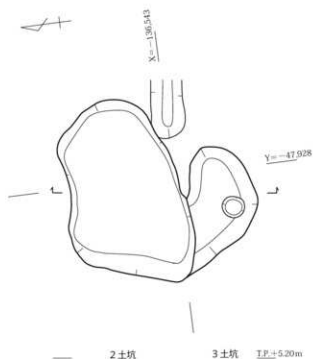


図30 第2面 19・70井戸 出土遺物実測図



2土坑

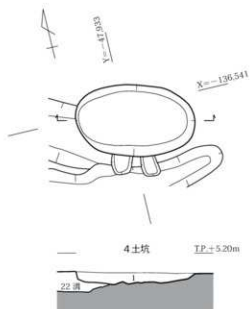
1. 5Y3/1 オリーブ黒 極粗砂混シルト質細砂

5Y4/1 灰 細砂質シルトブロック含む

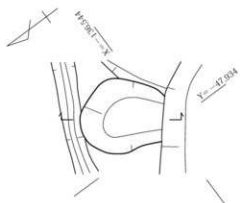
3土坑

1. 5Y3/1 オリーブ黒 極粗砂混シルト質細砂

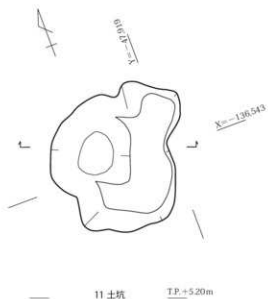
5Y4/1 灰 細砂質シルトブロック含む



1. 5Y4/1 灰 礫混中砂～粗砂



1. 5Y4/1 灰 礫混中砂～粗砂



1. 7.5Y2/1 黒 極粗砂～礫混シルト質細砂

0 2m
(1:40)

図31 第2面 2・3・4・8・11土坑 平・断面図

111は長頸壺である。112は器台である。口縁部は斜上方にのび、下端に大きく垂下する。口縁部はヨコナデ後、端面下部に竹管文を押捺する円形浮文を2段に貼り付ける。文様の単位は剥離のため不明瞭であるが、4個または5個1単位であると見られる。垂下した端面および端面内側には赤彩を施す。頸部はハケ調整である。

113は鉢である。口縁部には5条の棒状浮文を貼り付ける。

時期は弥生時代後期初頭と考えられる。

2土坑 (図10・31)

北端、 $X=-136543 \cdot Y=-47928$ で検出し、3土坑より後出する。平面形は不整な長方形である。規模は長軸1.85m、短軸1.15m、深さ0.08mである。埋土はオリーブ黒色極粗砂混じりシルト質細砂に灰色細砂質シルトブロックを含む。

遺物は広口壺片・甕片・器種不明小片が出土したが、図示し得なかった。

3土坑 (図10・31)

北端、 $X=-136543 \cdot Y=-47928$ で検出し、2土坑に先行する。平面形は楕円形と推定される。検出した規模は南北0.75m、東西1.05m、深さ0.1mである。

埋土はオリーブ黒色極粗砂混じりシルト質細砂に灰色細砂質シルトブロックを多く含む。

遺物は出土しなかった。

4土坑 (図10・31・32、図版33)

北西端、 $X=-136541 \cdot Y=-47933$ で検出し、22溝より後出する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.25m、短軸0.75m、深さ0.1mである。

埋土は灰色礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・高杯・鉢・甕片が出土し、そのうち2点を図示し得た(図32)。

114は鉢である。外面はユビオサエ後口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整である。体部には縦方向のヘラ描き沈線を施す。

115は高杯である。脚柱部は中実で、外面に縦方向のヘラミガキを施す。

時期は、出土した遺物は僅少ではあるが、弥生時代後期末と考えられる。

8土坑 (図10・31・32)

北西側、 $X=-136544 \cdot Y=-47934$ で検出した。重複する遺構の新旧関係は9溝に先行し、104土坑、5・6溝より後出する。平面形は不整な楕円形と推定される。検出した規模は長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.17mである。埋土は灰色礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・甕・器種不明小片が出土し、1点を図示し得た(図32)。

116は壺底部である。外面に縦方向のヘラミガキを施す。

11土坑 (図10・31、図版13)

北東隅、 $X=-136543 \cdot Y=-47919$ において検出した。平面形は不整な方形である。規模は長軸1.55m、短軸1.3m、深さ0.22mである。

埋土は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は高杯・甕・器種不明片が出土しているが細片のた

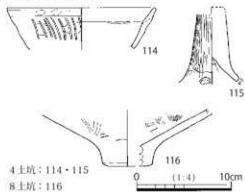


図32 第2面 4・8土坑 出土遺物実測図

め、図示し得なかった。

16 土坑 (図 10・33・34、図版 13)

北東、 $X = -136545 \cdot Y = -47922$ において検出した。平面形は隅丸方形である。規模は長軸 1.5 m、短軸 1.45 m、深さ 0.27 m である。

埋土は 2 層に分けることができ、第 2 層は灰色細砂から極粗砂に第 1 層の黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂ブロックが混じる。第 1 層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂で、この層中に図 34 - 117・118 などの土器が廃棄されていた。

遺物は鉢・甕片が出土し、そのうち 5 点を図示し得た (図 34)。

117 ~ 120 は甕である。いずれもタタキ整形の甕である。117 は口縁端部は丸くおさめ、体部内面はハケ調整である。118 ~ 120 は底部である。120 は小型甕で底部は上げ底である。

121 は有孔鉢である。体部外面は右上がりのタタキ整形、内面は板ナデ調整である。

時期は弥生時代後期末 ~ 古墳時代初頭と見られる。

17 土坑 (図 10・33・34、図版 14・33)

北東側、 $X = -136547 \cdot Y = -47924$ で検出し、80 土坑、6・24 溝より後出する。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.74 m、短軸 1.1 m、深さ 0.2 m で底面は凹凸が著しい。

埋土は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂に灰オリブ色細砂ブロックを含む。層中からは廃棄されたと見られる土器がまとも出土した。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明小片が出土し、そのうち 4 点を図示し得た (図 34)。

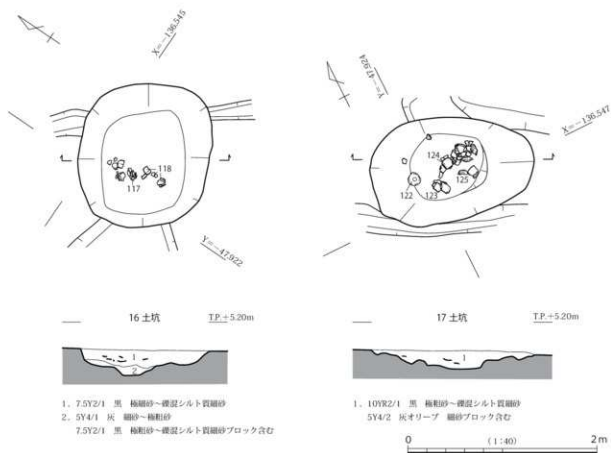


図 33 第 2 面 16・17 土坑 平・断面図

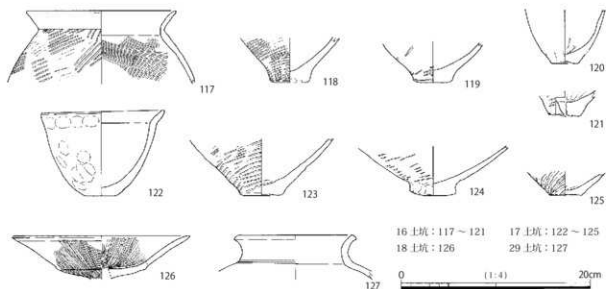


図34 第2面 16・17・18・29土坑 出土遺物実測図

122は小型鉢である。口縁部は短く屈曲し、底部はやや丸みをおびる。調整はユビオサエ後内外面共にナデ調整である。123～125は甕底部である。いずれも外面右上がりのタタキ整形である。124はタタキ後ナデ調整を行う。

時期は古墳時代初頭（庄内式併行期古段階）と見られる。

18土坑（図10・34・35、図版14）

北東側、X＝－136550・Y＝－47922で検出した。平面形は不整な楕円形である。規模は長軸2.0 m、短軸1.5 m、深さ0.25 mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は灰オリーブ色中砂から粗砂と黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂が混じる。第1層は黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。この第1層から土器片が多く出土した。

遺物は甕、高杯等が出土したが細片が多く、1点のみ図示し得た（図34）。

126は有稜高杯である。口縁部は直線的に開き、内外面共に縦方向のヘラミガキを施す。

時期は古墳時代初頭（庄内式併行期古段階）と考えられる。

20土坑（図10・35）

北側中央、X＝－136549・Y＝－47925で検出し、32土坑・31溝より後出する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.4 m、短軸0.95 m、深さ0.12 mである。

埋土は黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂に基盤層に由来するにぶい黄色シルトブロックを含む。

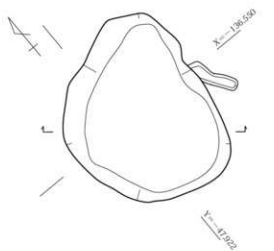
遺物は甕・高杯・器種不明小片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

時期は遺物からは特定できないが、遺構の重複関係から弥生時代後期後半から末と考えられる32土坑より後出である。

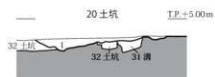
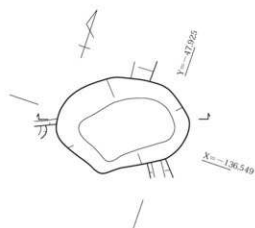
26土坑（図10・35）

北東側、X＝－136545・Y＝－47925で検出し、238溝に先行する。平面形は方形と推定される。検出した規模は一辺0.65 m、深さ0.24 mである。

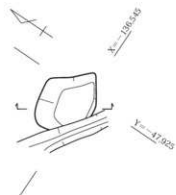
埋土は4層に分けられ、第4層は黒褐色シルト質細砂、第3層は暗灰黄色シルト質細砂に灰オリーブ色極細砂ブロック含む。第2層は暗オリーブ褐色細砂質シルト、第1層は黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂である。



1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～微泥シルト質細砂
2. 7.5Y5/2 灰オリーブ 中砂～粗砂と
2.5Y2/1 黒 粗砂～微泥シルト質細砂が混じる



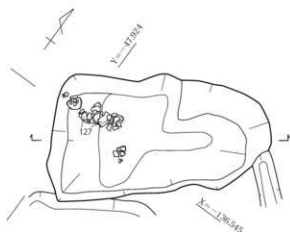
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～微泥シルト質細砂
- 2.5Y6/3 に近い黄 シルトブロック含む



26土坑 TP+5.20m



1. 2.5Y3/1 黒則 粗砂～極粗砂混シルト質細砂
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ黒 細砂質シルト
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質細砂
5Y4/2 灰オリーブ 極粗砂ブロック含む
4. 2.5Y3/1 黒則 シルト質細砂



1. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～極細砂混シルト質細砂
2. 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂～中砂
5Y3/1 オリーブ黒 シルト質細砂ブロック含む



図35 第2面 18・20・26・29土坑 平・断面図

遺物は壺・器種不明小片が出土したが、図示し得なかった。

29 土坑 (図 10・34・35、図版 15)

北東側、X=-136545・Y=-47924 で検出し、80 土坑より後出する。平面形は不整な長方形である。規模は長軸 2.3 m、短軸 1.28 m、深さ 0.14 m である。

埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は灰オリーブ色細砂から中砂にオリーブ黒色シルト質細砂ブロックを含む。第 1 層はオリーブ黒色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂である。第 1 層中からは廃棄されたと見られる土器片が出土した。

遺物は壺・鉢・甕・器種不明片が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 34)。

127 は壺である。口頸部は短く立ち上がり口縁端部で外反し、端部は面取り風に角張る。調整は口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面に 3 条の櫛描直線文を施す。

時期は弥生時代後期後半から末と考えられる。

32 土坑 (図 10・36・37、図版 15)

北側中央、X=-136548・Y=-47926 で検出し、20 土坑に北東端を掘りこまれている。平面形は長方形である。規模は長軸 1.85 m、短軸 1.35 m、深さ 0.13 m である。

埋土は 3 層に分けられ、第 3 層は灰オリーブ極細砂に黒色粗砂混じりシルト質細砂ブロックを含む。第 2 層はオリーブ黒色細砂質シルト、第 1 層は黒色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・甕・高杯・器種不明片が出土し、1 点を図示し得た (図 37)。

128 は椀形高杯脚部である。脚柱部から裾部へと屈曲し、裾部は大きく開く。円孔は 1 箇所残存するが全体は不明である。

時期は出土した遺物が僅少であるが、弥生時代後期後半から末と考えられる。

33 土坑 (図 10・36)

北西側、X=-136548・Y=-47936 で検出し。平面形は不整な方形である。規模は一辺 1.25 m、深さ 0.1 m である。底面は凹凸が著しい。

埋土は黒褐色礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

37 土坑 (図 10・36・37、図版 16・33)

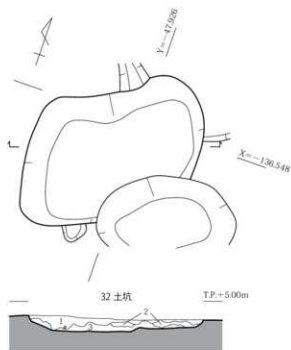
北西側、X=-136552・Y=-47932 で検出し、135 溝より後出する。平面形は長方形である。規模は長軸 2.3 m、短軸 2.1 m、深さ 0.35 m である。

埋土は 4 層に分けられ、第 4 層は黒褐色細砂から粗砂、第 3 層は黄灰色細砂から粗砂に黒褐色中砂から粗砂が混じる。第 2 層は炭化物が混じる黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。この層から図 37-130~134 など多くの土器が出土した。第 1 層は黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂で 2 層より礫が多く混じる。この層から図 37-135 が出土した。

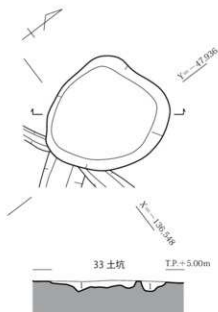
遺物は壺・高杯・鉢・甕片が出土し、そのうち 7 点を図示し得た (図 37)。

129 は壺である。体部外面は板ナデ調整である。130・131 は高杯である。130 は有稜高杯である。杯部は口縁部が大きく外反し、端部は丸くおさめる。脚柱部は中実で、柱部から裾部はやや屈曲し、円孔を三方に穿つ。131 は小型椀形高杯である。柱状部外面は縦方向のヘラミガキを施し、裾部はハケのちナデ調整と見られるが磨滅のため不明瞭である。内面はハケのちナデ調整である。

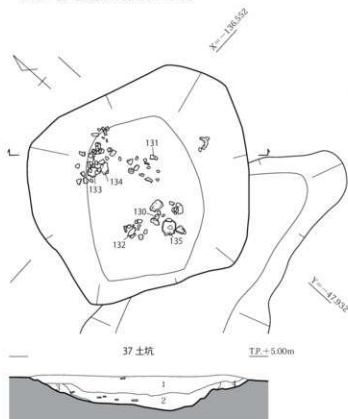
132 は鉢である。底部は上げ底である。体部内外面ともに調整は縦方向のヘラミガキである。



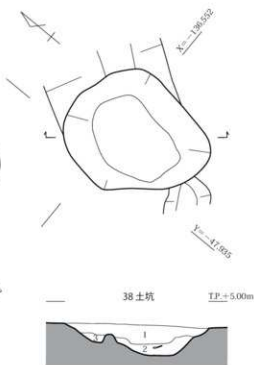
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂混シルト質細砂
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒 細砂質シルト
3. 7.5Y5/2 灰オリーブ極細砂
- 2.5Y2/1 黒 粗砂混シルト質細砂ブロック含む



1. 2.5Y3/1 黒濁 礫混中砂～粗砂



1. 10YR2/1 黒 粗砂～礫混シルト質細砂
2. 2.5Y2/1 黒 粗砂～礫混シルト質細砂
3. 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂
- 2.5Y3/1 黒濁 中砂～粗砂含む
4. 2.5Y3/1 黒濁 細砂～粗砂



1. 10YR3/1 黒濁 粗砂～礫混シルト質細砂
2. 2.5Y3/1 黒濁 粗砂～礫混シルト質細砂
- 2.5Y5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック含む
3. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂混シルト質細砂

0 (1:40) 2m

図36 第2面 32・33・37・38土坑 平・断面図

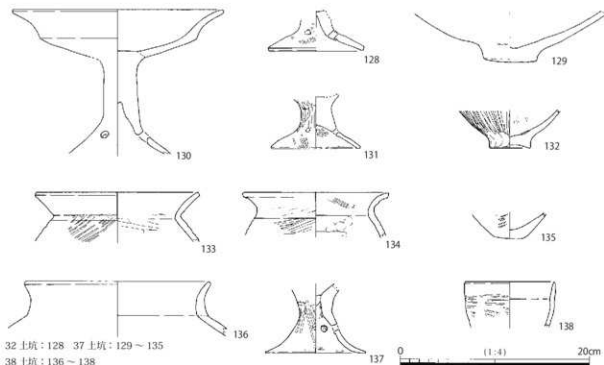


図37 第2面 32・37・38土坑 出土遺物実測図

133～135は甕である。133・134ともに口縁端部は面をもち、口縁部から体部に右上がりのタタキ整形を行う。体部内面は板ナデ調整である。煤が133は口縁部外面の一部、134は体部に付着する。135は底部である。平底であるが、丸味をおび形骸化している。外面は磨滅のため不明瞭であるがタタキ整形である。

時期は古墳時代初頭（庄内式併行期古段階）と考えられる。

38土坑（図10・36・37、図版16）

北西側、 $X=-136552 \cdot Y=-47935$ で検出し、竪穴建物2、81・204溝より後出する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.32mである。

埋土は3層に分けられ、第3層はオリーブ黒色粗砂混じりシルト質細砂、第2層は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂にオリーブ灰色粘土質シルトブロックを含む。第1層は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・鉢・甕が出土し、そのうち3点を図示し得た（図37）。

136は広口壺である。頸部から口縁部は直立し、端部付近でやや外反する。

137は高杯である。脚柱部は中空で、外面に縦方向のヘラミガキを施し、裾部はハケ後ナデ調整である。四方に円孔を穿つ。

138は小型鉢である。頸部が僅かにくびれ、口縁部はやや内弯する。口縁部から体部全体をタタキ整形するが、全体に雑なつくりである。

時期は弥生時代後期後半から末と考えられる。

42土坑（図10・38・39）

北西端、 $X=-136546 \cdot Y=-47937$ で検出し、調査区西側にひろがる。35溝より後出する。平面形は不整な方形または長方形である。検出した規模は東西1.95m、南北3.27m、深さ0.15mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は第1層の黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂ブロックを含む灰

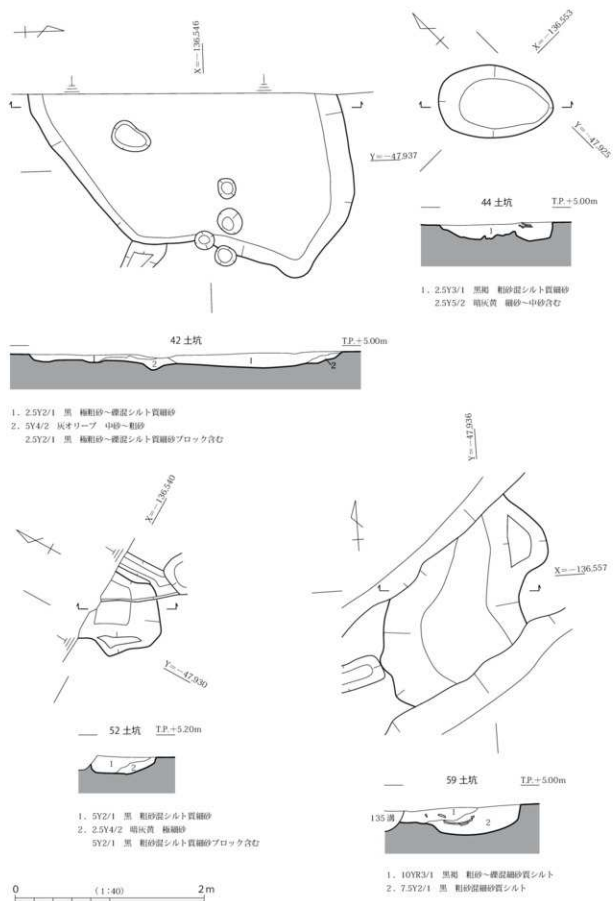


図38 第2面 42・44・52・59土坑 平・断面図

オリーブ色中砂から粗砂、第1層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・鉢・甕・器種不明片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図39)。

139は小型鉢である。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。底部は上げ底である。外面は右上がりのタタキと見られるが、磨滅のため不明瞭である。

時期は、出土遺物が僅少ではあるが、弥生時代末から古墳時代初頭と見られる。

44 土坑 (図10・38・39、図版33)

北側中央、X=-136553・Y=-47925で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸1.2m、短軸0.75m、深さ0.18mである。底面には凹凸が見られる。

埋土は暗灰黄色細砂から中砂が混じる黒褐色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、そのうち2点を図示し得た(図39)。

140は無頸壺である。口縁端部は肥厚し、口縁部の一部をケズリとる。体部外面は横方向に丁寧なヘラミガキを施し、屈曲部に沈線を巡らす。内面は口縁部から体部上半を横方向のヘラミガキ、体部下半はユビオサエ後ナデ調整である。

141は甕である。口縁部はく字に屈曲し、上端をつまみ上げ、端部は面をもつ。体部外面はハケ調整、内面は縦方向のハケ後、肩部は強いユビナデ、体部はナデである。

時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

52 土坑 (図10・38)

北端中央、X=-136540・Y=-47930で検出し、北側は調査区外に続く。竪穴建物1に先行する。平面形は方形または長方形である。検出した規模は東西0.9m、南北0.8m、深さ0.18mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色粗砂混じりシルト質細砂ブロックを含む暗灰黄色極粗砂である。第1層は黒色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は器種不明細片が出土したのみである。

59 土坑 (図10・38・39、図版17・33)

中央西側、X=-136557・Y=-47936で検出し、90・135溝に先行する。平面形は南北端を90・135溝に壊され不明である。検出した規模は南北1.45m、東西1.4m、深さ0.28mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色粗砂混じり細砂質シルト、第1層は炭ブロックが混じる黒褐

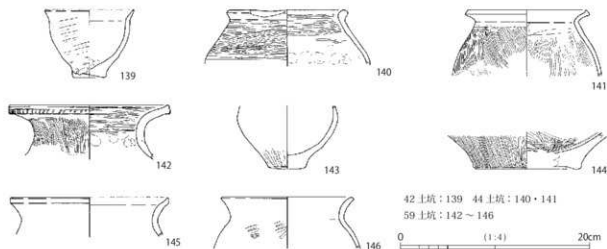
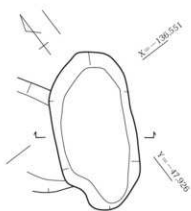


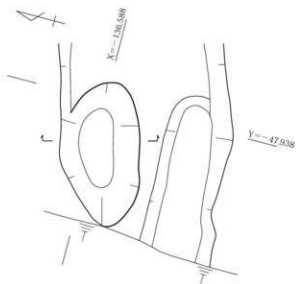
図39 第2面 42・44・59土坑 出土遺物実測図



60 土坑 T.P.+5.00m



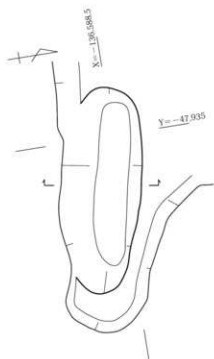
1. 5Y3/1 オリーブ黒
粗砂～細粒砂質シルト質礫砂



63 土坑 T.P.+4.80m



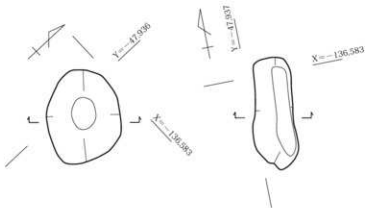
1. 10YR3/1 黒期 中砂～粗粒礫砂質シルト
2. 10YR2/1 黒 細粒砂質礫砂質シルト



64 土坑 T.P.+4.80m



1. 10YR3/1 黒期 細砂質シルト・細礫質粗粒砂



66 土坑 T.P.+4.80m



1. 10YR3/1 黒期 中砂質細砂質シルト



67 土坑 T.P.+4.80m



1. 10YR3/1 黒期
中砂質細砂質シルト



図40 第2面 60・63・64・66・67土坑 平・断面図

色粗砂から礫混じり細砂質シルトである。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、そのうち5点を図示し得た(図39)。

142・143は壺である。142は広口壺である。頸部は短く直立し、口縁上端部を肥厚させ、端面をもつ。口縁部端部下端にはキザミを巡らせ、頸部はハケ調整後縦方向のヘラミガキを施す。内面は口縁部から頸部に横方向のヘラミガキを施し、頸部下半はユビオサ工後ナデである。143は小型壺である。外面に縦方向のヘラミガキを施す。

144は鉢である。体部外面をタタキ整形後、内外面にヘラミガキを施す。底部は上げ底である。

145・146は甕である。145は口縁端部をつまみあげ、面をもつものである。146は右上がりのタタキ整形である。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

60 土坑 (図10・40、図版17)

北側中央、 $X = -136551$ ・ $Y = -47926$ で検出し、5溝より後出する。平面形は楕円形である。規模は長軸1.7m、短軸0.85m、深さ0.15mである。底面は凹凸が著しい。

埋土はオリブ黒色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は高杯・甕片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

63 土坑 (図10・40・41)

南西端、 $X = -136588$ ・ $Y = -47938$ の61溝内で検出した。63・64土坑のいずれも61溝の検出時には平面確認されず、溝の埋土を掘削除去し底面を検出した際に遺構を検出した。いずれの土坑も溝の肩と土坑の長軸辺が接しており、溝と共に掘削された可能性がある。後述する62溝は周溝墓の可能性があり、そうであるならば63・64土坑は周溝内墓塚と考えられる。

平面形は楕円形である。規模は長軸1.5m、短軸0.85m、深さ0.3mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色極細砂混じり細砂質シルト、第1層は黒褐色中砂から粗砂混じり細砂質シルトである。

遺物は高杯が出土した(図41)。147は高杯である。盤状の杯部をもつものである。

時期は出土遺物が僅少ではあるが、弥生時代中期末と見られる。

64 土坑 (図10・40、図版17)

南西側、 $X = -136589$ ・ $Y = -47935$ の61溝内で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸2.2m、短軸0.9m、深さ0.14mである。

埋土は黒褐色細砂質シルトや細礫が混じる極粗砂である。

遺物は出土しなかった。

66 土坑 (図10・40、図版18)

南西側、 $X = -136583$ ・ $Y = -47936$ で検出した。平面形は方形である。規模は長軸1.0m、短軸0.75m、深さ0.27mである。

埋土は黒褐色中砂混じり細砂質シルトである。層中には土器細片や炭化物粒が含まれた。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

67 土坑 (図10・40、図版18)

南西側、 $X = -136583$ ・ $Y = -47937$ で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸1.2m、

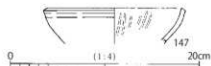


図41 第2面 63土坑 出土遺物実測図

短軸 0.4 m、深さ 0.3 m である。

埋土は炭化物粒を含む黒褐色中砂混じり細砂質シルトである。

遺物は壺・甕・器種不明細片が出土したが、図示し得なかった。

68 土坑 (図 10・42・43、図版 18・19)

南西側、 $X = -136581.5$ ・ $Y = -47935$ で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸 1.8 m、短軸 0.55 m、深さ 0.29 m である。

埋土は炭化物粒を含む黒褐色中砂混じり細砂質シルトである。

遺物は壺・高杯・水差形土器・甕・器種不明片が出土し、そのうち 3 点を図示し得た (図 43)。

149 は水差形土器である。口頸部に擾凹線を施す。

150・151 は高杯である。150 は水平口縁の高杯である。杯部外面は簾状文の下に櫛状工具による刺突文が施され、下半はヘラミガキである。内面はユビオサエ後板ナデ調整である。ユビオサエ時の爪痕が残る。胎土は生駒山西麓産である。151 は脚部である。五方に円孔を穿つ。

時期は弥生時代中期中葉である。

69 土坑 (図 10・42、図版 19)

南西側、 $X = -136580$ ・ $Y = -47934$ で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.8 m、

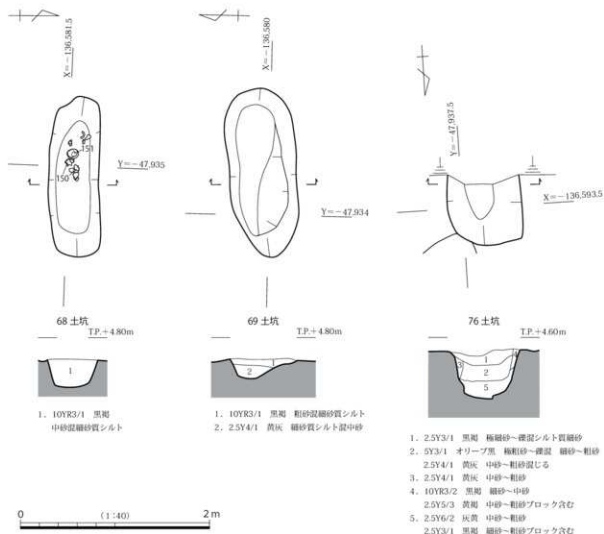


図 42 第 2 面 68・69・76 土坑 平・断面図

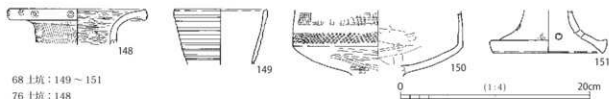


図43 第2面 68・76土坑 出土遺物実測図

短軸 0.7 m、深さ 0.2 m である。

埋土は2層に分けられ、2層は黄灰色細砂質シルト混じり中砂、1層は黒褐色粗砂が混じる細砂質シルトである。

遺物は壺・甕片が出土したが、図示し得るものはなかった。

76土坑 (図10・42・43、図版19・33)

南西隅、 $X = -136593.5$ ・ $Y = -47937.5$ で検出し、調査区外南側に続く。平面形は方形または長方形である。検出した規模は東西 0.8 m、南北 0.65 m、深さ 0.5 m である。

埋土は5層に分けることができ、第5層は黒褐色細砂から粗砂ブロックが混じる黄灰色中砂から粗砂、第4層は黄褐色中砂から粗砂ブロックが混じる黒褐色細砂から中砂、第3層は黄灰色中砂から粗砂、第2層は黄灰色中砂から粗砂が混じるオリブ黒色極粗砂から礫混じり細砂から粗砂、第1層は黒褐色極細砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図43)。

148は広口壺である。直立する頸部から口縁部へ屈曲し、端部は下方に肥大する。端面には竹管文を押捺されているが、口縁部の4分の3が残存しているが、そのうち4分の1のみに押捺されている。頸部はハケ調整である。内面はハケ調整後、口縁部はヨコナデ後横方向のヘラミガキである。

時期は出土した遺物が僅少ではあるが、弥生時代後期後半から末と考えられる。

80土坑 (図10・44)

北東側、 $X = -136546$ ・ $Y = -47923$ で検出し、16・17・29土坑・24溝に先行する。平面形は周囲の遺構に壊され不明である。検出した規模は長軸 1.25 m、短軸 1.2 m、深さ 0.11 m である。

埋土は2層に分けられ、第2層は暗灰黄色中砂から粗砂に1層の黒色粗砂混じりシルト質細砂がブロックで混じる。第1層は黒色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は甕・器種不明細片が出土したが、図示し得なかった。

86土坑 (図10・44・45、図版33・34)

中央、 $X = -136560$ ・ $Y = -47925$ で検出し、39・96溝より後出する。平面形は不整な長方形である。規模は長軸 2.65 m、短軸 2.0 m、深さ 0.24 m である。

埋土は2層に分けられ、第2層は基盤層である第7層の灰オリブ色中砂から粗砂に第1層の黒褐色極粗砂混じりシルト質細砂がブロックで混じる。第1層は黒褐色極粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、特に細片が多く出土した。そのうち3点を図示し得た(図45)。

152・153は広口壺である。共に口頸部は肩部から外反し、端面をもつものである。152は口縁端面に若干の肥厚が見られる。133は剝離により調整が不明瞭だが、端面に櫛描波状文を施す。頸部はヨコナデ後縦方向のヘラミガキを施す。頸部から肩部への屈曲部には突帯を貼り付け、突帯上にキザミを巡らす。内面は横方向のヘラミガキを施す。

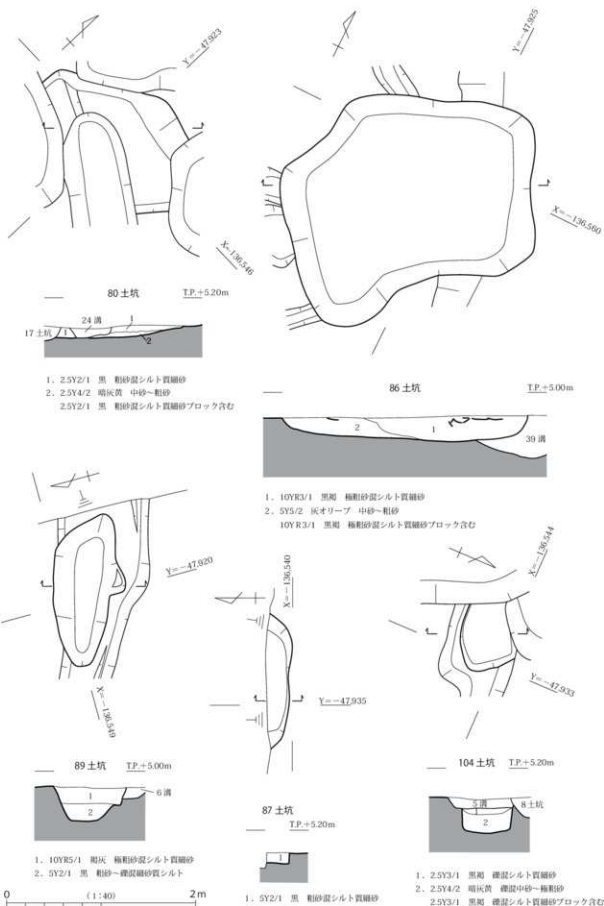


図44 第2面 80・86・87・89・104土坑 平・断面図

154 は高杯である。有稜高杯で杯部に対して体部高が高く、口縁部は短く外反する。全体に磨滅のため調整は不明瞭であるが、杯部外面はハケ、内面はナデ調整である。脚部は中空で、四方に円孔を穿つ。

時期は出土土器と 39 溝との重複関係から古墳時代初頭（庄内式併行期古段階）と考えられる。

87 土坑（図 10・44・45）

北西端、 $X = -136540 \cdot Y = -47935$ で検出し、調査区外北側に続く。平面形は方形または長方形と推定される。検出した規模は東西 1.4 m、南北 0.3 m、深さ 0.12 m である。

埋土は黒色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、そのうち 1 点を図示し得た（図 45）。

155 は甕である。口縁部はく字状に屈曲し、端部は面をもつ。

時期は出土した遺物が僅少であるが、弥生時代後期初頭と見られる。

89 土坑（図 10・44・45）

北東側、 $X = -136549 \cdot Y = -47920$ で検出し、6 溝より後出する。平面形は不整な楕円形である。検出した規模は長軸 1.62 m、短軸 0.75 m、深さ 0.35 m である。

埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は黒色粗砂から礫混じり細砂質シルト、第 1 層は褐灰色極粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・鉢・甕・器種不明片が出土し、そのうち 2 点を図示し得た（図 45）。

156 は直口壺である。157 は小型甕である。口縁部から頸部にかけてタタキ整形、体部はナデである。内面はナデ調整である。

時期は古墳時代初頭（庄内式併行期古段階）と考えられる。

104 土坑（図 10・44）

北西側、 $X = -136544 \cdot Y = -47933$ で検出し、8 土坑、5・9 溝に先行する。平面形は方形または長方形である。検出した規模は長軸 0.68 m、短軸 0.55 m、深さ 0.25 m である。

埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は暗灰黄色礫混じり中砂から極粗砂に第 1 層の黒褐色礫混じりシルト質細砂ブロックを含む。第 1 層は黒褐色礫混じりシルト質細砂である。

遺物は出土しなかった。

107 土坑（図 10・46、図版 20）

南西側、 $X = -136586 \cdot Y = -47939$ で検出し、調査区外西側に続く。2 段に掘りこまれ、上部

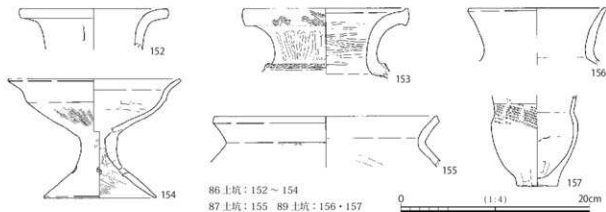


図 45 第 2 面 86・87・89 土坑 出土遺物実測図

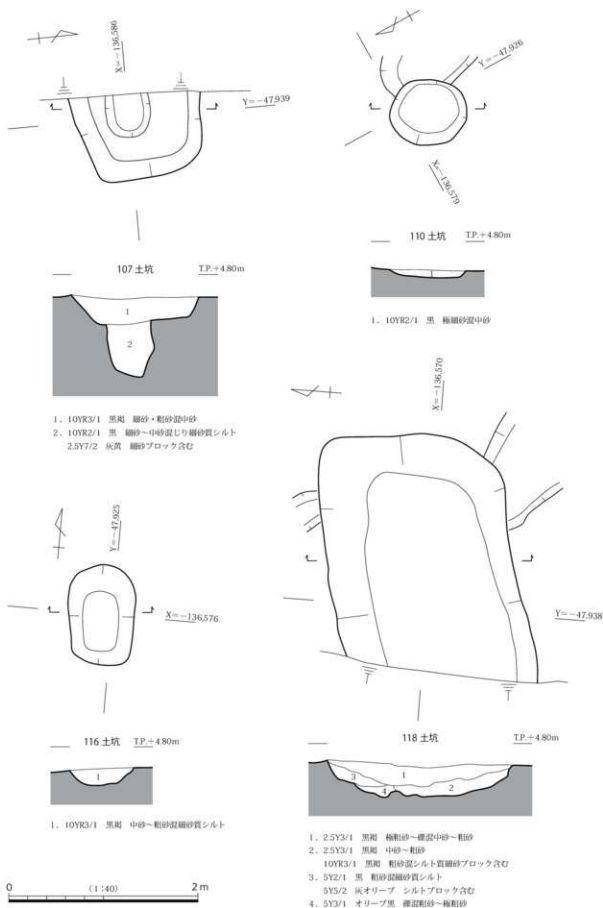


図46 第2面 107・110・116・118土坑 平・断面図

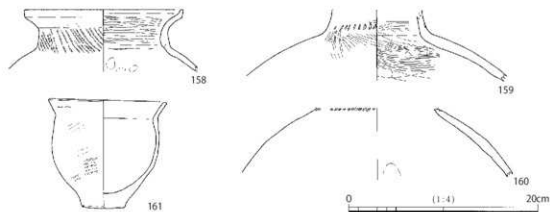


図47 第2面 118土坑 出土遺物実測図

が方形または長方形で、下部は円形である。検出した規模は東西0.9m、南北1.3m、深さ0.8mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色細砂から中砂混じり細砂質シルトに基盤層に由来する灰黄色細砂ブロックを含む。第1層は炭化物が混じる黒褐色細砂や粗砂混じり中砂である。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明細片が出土し、いずれも細片のため図示し得なかった。

110土坑 (図10・46、図版20)

南東側、X=-136579・Y=-47926で検出した。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.08mである。埋土は黒色極細砂混じり中砂である。

遺物は出土しなかった。

116土坑 (図10・46)

南東側、X=-136576・Y=-47925で検出した。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸1.05m、短軸0.7m、深さ0.18mである。

埋土は黒褐色中砂から粗砂混じり細砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

118土坑 (図10・46・47、図版20)

中央西端、X=-136570・Y=-47938で検出し、西側は調査区外に続く。73・137溝より後出する。平面形は長方形である。検出された規模は長軸2.5m、短軸1.95m、深さ0.28mである。

埋土は4層に分けられ、第4層は炭化物粒が混じるオリーブ黒色礫混じり粗砂から極粗砂、第3層は灰オリーブ色シルトブロックや炭化物粒が混じる黒色粗砂混じり細砂質シルトである。第2層は黒褐色中砂から粗砂に黒褐色粗砂混じり細砂質シルトブロックが混じる。第1層は黒褐色極粗砂から礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・甕・器種不明細片が出土し、そのうち4点を図示し得た(図47)。

158～160は広口壺である。158は口縁端部はつまみあげ、受け口状である。外面は口頸部をタタキ整形後、口縁部をヨコナデ調整する。内面は横方向のヘラミガキを施す。159・160は頸部と肩部の境にキザミを巡らす。159は体部外面にヘラミガキを施し、内面はヘラナデ後肩部と頸部はハケ調整である。161は小型甕である。

時期は弥生時代後期後半から末と考えられる。

130土坑 (図10・48・49)

中央、X=-136566・Y=-47932で検出し、南側を掘乱に壊される。134溝に先行する遺構である。平面形は不整な方形である。検出された規模は長軸3.25m、短軸3.15m、深さ0.3mである。

底面は凹凸が著しい。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色極細砂や粗砂が混じる中砂、第1層は黒褐色粗砂混じり細砂質シルトである。

遺物は壺・甕片が出土し、そのうち2点を図示し得た(図49)。

162・163は広口壺である。162は口縁端部を折り返し、端面に竹管文を施文する。胎土は生駒山西麓産である。163は口縁部は緩やかな受け口状である。外面はハケ調整である。

時期は弥生時代後期初頭と考えられる。

131土坑(図10・49・50、図版21・33・34)

中央、 $X = -136570 \cdot Y = -47927$ で検出し、第1面の12水溜・13井戸に東側と南端をそれぞれ壊されていた。平面形は楕円形と推定される。検出された規模は長軸2.2m、短軸1.85m、深さ0.4mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色中砂から粗砂混じり細砂質シルト、第1層は黒色細砂質シルトである。

遺物は壺・甕片が出土し、そのうち5点を図示し得た(図49)。

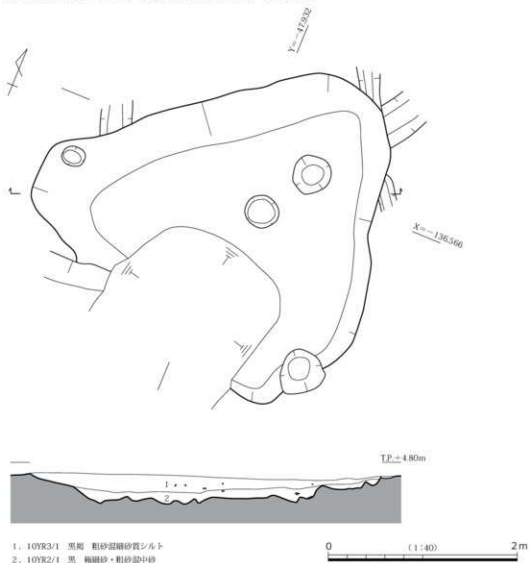


図48 第2面 130土坑 平・断面図

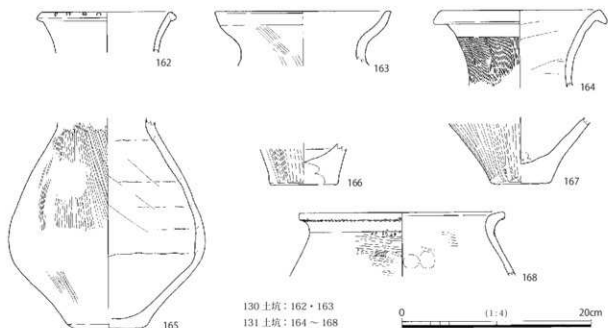


図49 第2面 130・131土坑 出土遺物実測図

164～167は壺である。164は広口壺である。口縁端部は下方に肥厚する。外面はハケ調整後、口縁部から頸部上端はヨコナデである。165は体部下半に最大径をもつものである。165～167は外面にヘラミガキを施す。

168は甕である。口縁部は短く屈曲し、口縁部下端と頸部にキザミを巡らす。体部にはタタキ整形後にヘラミガキを施す。外面に煤が付着する。

時期は弥生時代後期初頭と考えられる。

132土坑(図10・50)

中央、X=-136572・Y=-47928で検出し、東端を攪乱に壊されていた。平面形は楕円形と推定される。検出された規模は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.24mである。底面は凹凸が著しい。

埋土は3層に分けられ、第3層は黒色極細砂や中砂が混じる細砂である。第2層は灰白色シルトブロック、第1層は黒褐色中砂混じり細砂質シルトに土器細片や炭化物粒を多く含む。

遺物は壺・高杯・甕片が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

133土坑(図10・50、図版21)

中央、X=-136573・Y=-47932.5で検出し、140溝に先行する。平面形は長方形である。規模は長軸1.15m、短軸0.65m、深さ0.16mである。

埋土は黒褐色中砂から粗砂混じり細砂質シルトに炭化物粒や土器片を含む。

遺物は甕片・器種不明小片が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

146土坑(図10・50)

中央、X=-136565・Y=-47926で検出し、39・99溝に先行する。平面形は方形または長方形と推定される。検出した規模は一辺0.8m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒褐色礫混じり中砂から粗砂、第1層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕片が出土したが、図示し得なかった。

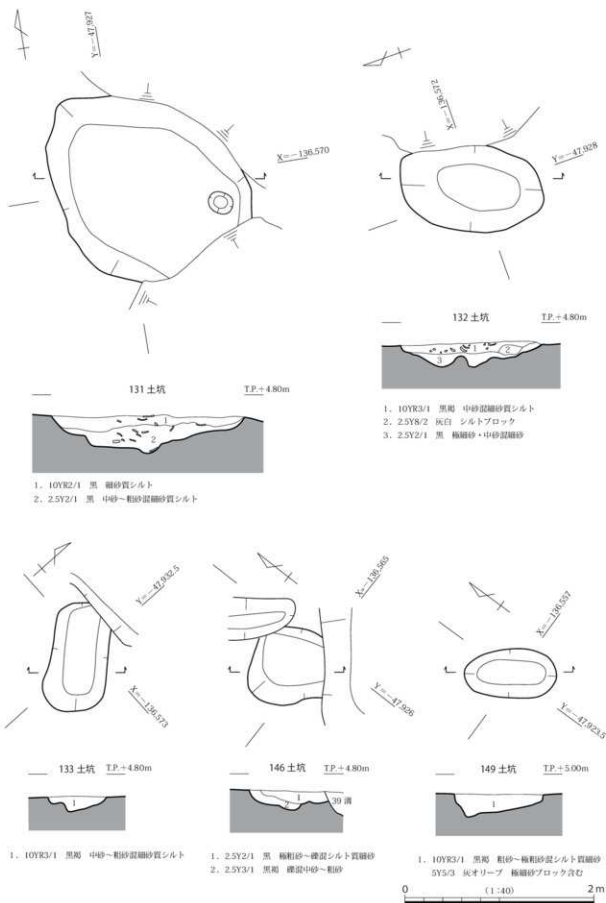


図50 第2面 131・132・133・146・149土坑 平・断面図

時期は遺物からは特定できないが、重複する遺構の新旧関係から古墳時代初頭の 39 溝に先行する。

149 土坑 (図 10・55)

北東側、 $X = -136557 \cdot Y = -47923$ で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸 0.95 m、短軸 0.5 m、深さ 0.25 m である。

埋土は黒褐色粗砂から極粗砂混じりシルト質細砂に灰オリーブ色極細砂ブロックを含む。

遺物は器種不明片が出土したのみである。

150 土坑 (図 10・51・52)

中央、 $X = -136569 \cdot Y = -47933$ で検出し、北東側を攪乱に壊される。重複関係は 134 溝に先

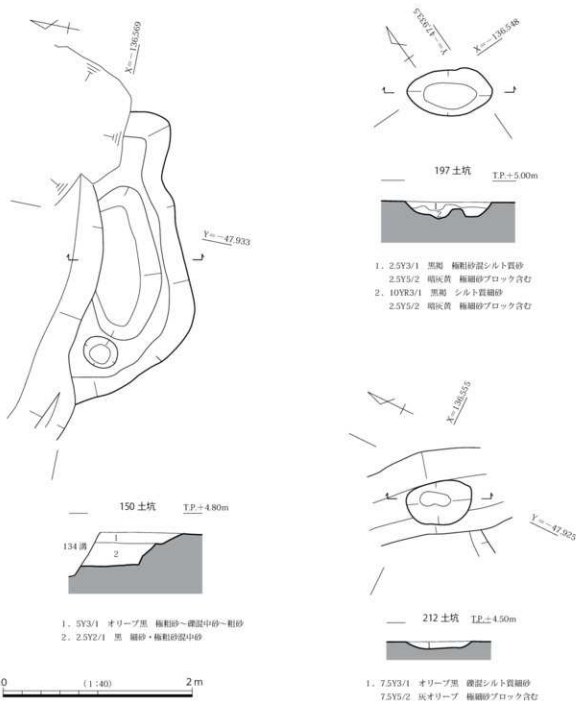


図 51 第 2 面 150・197・212 土坑 平・断面図

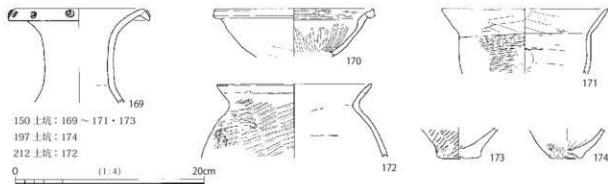


図52 第2面 150・197・212土坑 出土遺物実測図

行する。平面形は長方形と推定される。検出された規模は長軸3.0m、短軸0.85m、深さ0.35mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色細砂や極粗砂が混じる中砂、第1層はオリーブ黒色極粗砂から礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・鉢・甕片が出土し、そのうち4点を図示し得た(図52)。

169は長頸壺である。口縁端部は下方に肥厚し、口縁端面に竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。

170は鉢である。口縁部は外反し、浅いものである。口縁端部は折り曲げ、肥大させる。外面はナデ、内面はヘラミガキを施す。

171・173は甕である。171はタタキ整形後、口縁部は板ナデ調整である。173は底部中央が円形にくぼむ。

時期は弥生時代後期前半と考えられる。

197土坑(図10・51・52、図版21)

北東側、 $X=-136548$ ・ $Y=-47933$ で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸0.9m、短軸0.45m、深さ0.17mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は暗灰黄色極細砂ブロックを含む黒褐色シルト質細砂、第1層は暗灰黄色極細砂ブロックを含む黒褐色極粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は甕片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図52)。

174は甕である。体部外面はタタキ整形、内面は板ナデ調整である。底部は上げ底である。

212土坑(図10・51・52)

北東側、 $X=-136555$ ・ $Y=-47925$ 、39溝底面で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸0.7m、短軸0.45m、深さ0.15mである。

埋土は基盤層に由来する灰オリーブ色極細砂ブロックを含むオリーブ黒色礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図52)。

172は甕である。右上がりのタタキ整形後、部分的にハケを施す。

230ピット(図10・53、図版34)

中央、 $X=-136557$ ・ $Y=-47927$ で検出した。規模は直径0.3m、深さ0.12mである。

遺物は製塩土器、器種不明細片が出土し、そのうち2点を図

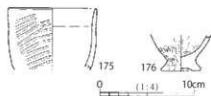


図53 第2面 230ピット 出土遺物実測図

示し得た(図53)。

175・176は製塩土器である。175は、外面はタタキ整形である。内面はナデ調整である。176は脚台付製塩土器である。内外面共にユビオサエ後に、体部外面はハケ調整である。

6溝(図10・54・55、図版22・23)

北側で検出し、南東から北西方向にのびる。重複する遺構との新旧関係は17・89土坑に先行し、5・7・22溝より後出である。規模は幅0.25～0.55m、深さ0.11～0.34mである。底面の高さはT.P.+4.62～4.9mで南東へ低くなる。

埋土は2～3層に分けられた。第3層は基盤層に由来する灰オリーブ色極細砂ブロックを含む黒褐色極粗砂混じりシルト質細砂や灰色細砂質シルトブロックを含む灰色中砂から粗砂である。第2層は灰色細砂質シルトブロックを含むオリーブ黒色シルト質細砂、第1層は灰色細砂質シルトブロックを含む黒褐色極粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・高杯・甕片が出土したが、図示し得なかった。

時期は重複する遺構の新旧関係から弥生時代末から古墳時代初頭の17・89土坑に先行する。

7溝(図10・54・55)

北側で検出し、南東から北西方向にのびる。重複する遺構との新旧関係は6溝に先行し、22溝より後出である。規模は幅0.45～0.5m、深さ0.1mである。

埋土は黒褐色礫混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・甕片が出土したが、図示し得なかった。

9溝(図10・54・55、図版22)

北西端で検出した。北西方向から南東方向にのび、東端は南に屈曲する。さらに調査区外西側に及んでいる。重複する遺構の新旧関係は10溝に先行し、8・104土坑、5溝より後出する。規模は幅0.85～1.05m、深さ0.13～0.25mである。

埋土は3層に分けられ、第3層は基盤層に由来する灰色中砂から粗砂を含むオリーブ黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。第3層堆積後に再掘削され第1・2層が堆積する。第2層はオリーブ黒色粗砂混じり細砂質シルトやオリーブ黒色シルト質細砂ブロックを含む灰色礫混じり中砂から粗砂である。第1層はオリーブ黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

10溝(図10・54・55、図版22)

北西端で検出した。南東から北西方向にのび、さらに調査区外西側に続く。重複する遺構の新旧関係は5・9溝より後出する。規模は幅0.3～0.45m、深さ0.08～0.16mである。

埋土は1～2層に分けられ、第2層はオリーブ黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂ブロックを含む暗灰黄色粗砂から極粗砂である。第1層はオリーブ黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕片が出土したが、図示し得なかった。

14溝(図10・54・55、図版22)

北西端で検出し、東西方向にのびる。22溝に先行する。規模は幅0.25～0.4m、深さ0.13～0.22mである。

埋土は黒褐色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は高杯・甕片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

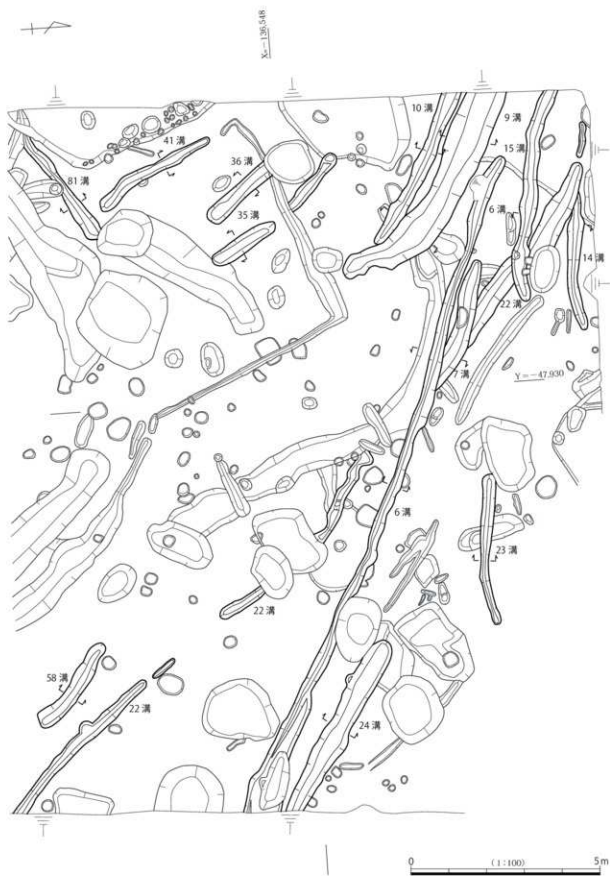


图54 第2面 6·7·9·10·14·15·22·23·24·35·36·41·58·81 坑 平面图

15 溝 (図 10・54～56、図版 22)

北西端で検出し、東西方向にのび、さらに調査区外西側へ続く。重複する遺構との新旧関係は 22 溝より後出する。規模は幅 0.3～0.45 m、深さ 0.1 m である。

埋土は 2 層に分けられ、第 2 層は暗灰黄色細砂から粗砂、第 1 層は黒褐色細砂から極粗砂である。

遺物は壺・甕・器種不明片が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 56)。

177 は壺である。肩部に大ききの異なる列点文を 2 段巡らす。

22 溝 (図 10・54・55、図版 22～24)

北側で検出した。南東から北西方向にのび、調査区外東側に続く。重複する遺構の新旧関係は、4・20・32 土坑、5・6・7・15 溝に先行する。規模は幅 0.25～0.6 m、深さ 0.05～0.3 m である。底面の高さは T.P.+4.66～4.84 m で南東方向へ低くなる。

埋土は 3 層に分けられ、第 3 層は黒褐色粗砂混じりシルト質細砂ブロックを含む黒褐色中砂から粗砂である。第 2 層は暗灰黄色中砂から粗砂、第 1 層は黒褐色粗砂混じりシルト質細砂である。

遺物は高杯・甕片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

時期は遺物からは特定できないが、弥生時代後期後半から末と考えられる 32 土坑に先行する。

23 溝 (図 10・54・55)

北側中央で検出し、東西方向にのびる。53 土坑より後出する。規模は幅 0.2～0.3 m、深さ 0.1 m である。

埋土はオリブ黒色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

24 溝 (図 10・54～56、図版 23・24)

北東側で検出した。6 溝と平行に南東から北西側にのび、さらに調査区外東側に続く。重複する遺構の新旧関係は 17 土坑に先行し、80 土坑より後出する。規模は幅 0.45～0.75 m、深さ 0.16～0.25 m である。

埋土は 4 層に分けられた。第 4 層は灰オリブ色中砂から粗砂ブロックを含む黒色極粗砂混じりシルト質細砂である。第 3 層は黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂、第 2 層はオリブ黒色シルト質細砂、第 1 層はオリブ黒色極粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は壺・器台・甕片が出土し、そのうち 2 点を図示し得た (図 56)。

178 は器台である。口縁端部を僅かに上下に拡張し、端面に竹管文を押し捺した円形浮文を貼り付ける。口縁部内面には半截竹管文を巡らす。頸部は内外面共に磨滅により調整が不明瞭だが、横方向のヘラミガキを施す。179 は甕である。

時期は弥生時代後期初頭と考えられる。

35 溝 (図 10・54・55)

北西側で検出し、36・41 溝と並行に南東から北西方向にのびる。重複する遺構の新旧関係は竪穴建物 2・42 土坑に先行し、204 溝より後出する。規模は幅 0.5～0.6 m、深さ 0.1 m である。

埋土は黒褐色礫やシルト質細砂が混じる中砂から粗砂である。

遺物は甕片・器種不明片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

36 溝 (図 10・54・55)

北西側で検出し、35・41 溝と並行に南東から北西方向にのびる。遺構の新旧関係は竪穴建物 2・33 土坑に先行する。規模は幅 0.4 m、深さ 0.05 m である。

7溝 6溝 T.P.+5.20m



6溝

1. 10YR3/1 黒期 極粗砂混シルト質細砂
2. 2.5Y3/1 黒期 極粗砂混シルト質細砂
- 5Y5/2 灰 オリーブ 極細砂ブロック含む

7溝

1. 10YR3/1 黒期 硬質シルト質細砂

6溝 T.P.+5.20m



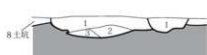
1. 10YR3/1 黒期 粗砂～極粗砂混シルト質細砂
- 5Y4/1 灰 細砂質シルトブロック含む
2. 5Y3/2 オリーブ黒 シルト質細砂
- 5Y4/1 灰 細砂質シルトブロック含む
3. 5Y4/1 灰 中砂～粗砂
- 5Y4/1 灰 細砂質シルトブロック含む

9溝 T.P.+5.20m



1. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂
2. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂混細砂質シルト
3. 10Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂
- 5Y4/1 灰 中砂～極粗砂含む

9溝 10溝 T.P.+5.20m



9溝

1. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂
2. 5Y4/1 灰 硬質中砂～粗砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 シルト質細砂ブロック含む
3. 10Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂
- 5Y5/1 灰 中砂～極粗砂含む

10溝

1. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂

10溝 T.P.+5.20m



1. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰質 粗砂～極粗砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂ブロック含む

14溝 22溝 15溝 T.P.+5.20m



14溝

1. 2.5Y3/1 黒期 粗砂混シルト質細砂

22溝

1. 2.5Y3/1 黒期 粗砂混シルト質細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰質 中砂～粗砂
3. 2.5Y3/2 黒期 中砂～粗砂
- 2.5Y3/1 黒期 粗砂混シルト質細砂ブロック含む

15溝

1. 7.5YR3/2 黒期 細砂～極粗砂
2. 2.5YR4/2 暗灰質 細砂～粗砂

23溝 T.P.+5.20m



1. 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～硬質シルト質細砂

35溝 T.P.+5.00m



1. 2.5Y3/1 黒期 泥・シルト質細砂混中砂～粗砂

36溝 T.P.+5.00m



1. 2.5Y3/1 黒期 硬質中砂～粗砂

41溝 T.P.+5.00m



1. 7.5Y3/2 オリーブ黒 中砂～粗砂
- 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂混シルト質細砂ブロック含む

24溝 T.P.+5.20m



1. 5Y3/2 オリーブ黒 極粗砂～硬質シルト質細砂
2. 5Y3/2 オリーブ黒 シルト質細砂
3. 2.5Y2/1 黒 極粗砂～硬質シルト質細砂
4. 2.5Y2/1 黒 極粗砂混シルト質細砂
- 5Y4/2 灰 オリーブ 中砂～粗砂ブロック含む

58溝 T.P.+5.20m



1. 10YR3/1 黒期 粗砂～硬質シルト質細砂

81溝 T.P.+5.00m



1. 7.5YR3/2 黒期 粗砂～硬質シルト質細砂

0 (1:40) 2m

図55 第2面 6・7・9・10・14・15・22・23・24・35・36・41・58・81溝 断面図

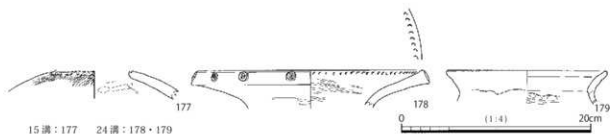


図56 第2面 15・24溝 出土遺物実測図

埋土は黒褐色礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

41 溝 (図10・54・55)

北西側で検出し、35・36溝と並行に南東から北西方向にのびる。規模は幅0.2～0.35m、深さ0.06～0.15mである。

埋土はオリブ黒色粗砂混じりシルト質細砂ブロックを含む中砂から粗砂である。

遺物は器種不明細片が出土したのみである。

58 溝 (図10・54・55、図版23)

北東側で検出し、22溝と並行に南東から北西方向にのびる。規模は幅0.35～0.45m、深さ0.18mである。埋土は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

81 溝 (図10・54・55、図版25)

北西側で検出し、南西から北東側にのびる。竪穴建物3・38土坑に先行する。規模は幅0.2～0.4m、深さ0.09～0.19mである。

埋土は黒褐色粗砂から礫混じりシルト質細砂である。

遺物は甕・壺片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

61・62 溝 (図10・57・58、図版23・24・34)

南西端で検出した。61溝は東西方向にのび、東端でやや細くなり途切れる。62溝は61溝から北東に2.7m程離れて北西から南東方向にのびる。それぞれ調査区外西側・南側に続く。61溝内には63・64土坑が掘られている。規模は61溝が幅0.85～1.8m、深さ0.09～0.18mである。62溝は幅1.0～1.45m、深さ0.16～0.32mである。

埋土は、61溝が黒褐色細砂質シルトや細礫が混じる極粗砂である。62溝は2層に分けられ、第2層は黒色細砂や粗砂・礫が混じる中砂、第1層が中砂・礫混じり細砂質シルトである。

2条の溝は南西端を囲むように掘られており方形周溝墓もしくは建物の外周溝の可能性が考えられる。そのため盛土が残存していないか南・西壁断面観察を行ったが、確認できなかった。溝内からは供献土器と見られるような土器は出土せず、破片のみであり方形周溝墓と断定するに至らなかった。また62溝内には前述した63・64土坑が掘りこまれており、方形周溝墓であるならば2基の土坑は周溝内墓塚の可能性が考えられる。

遺物は61溝から壺・高杯・鉢・甕片が出土し、そのうち3点を図示し得た(図58)。

180は高杯である。口縁部が垂下する高杯で内縁を巡る突帯は、上方に突出し、断面が矩形である。内面は横方向のヘラミガキを施す。

181 は底部である。内面はユビオサエ後ハケ調整である。182 は裏底部である。外面はヘラケズリ後にヘラミガキを施す。

62 溝からは壺・高杯・甕片が出土し、そのうち7点を図示し得た(図58)。

183・184 は広口壺である。183 は口縁端部に粘土帯を付加し下方に拡張し、端面に7条以上の櫛

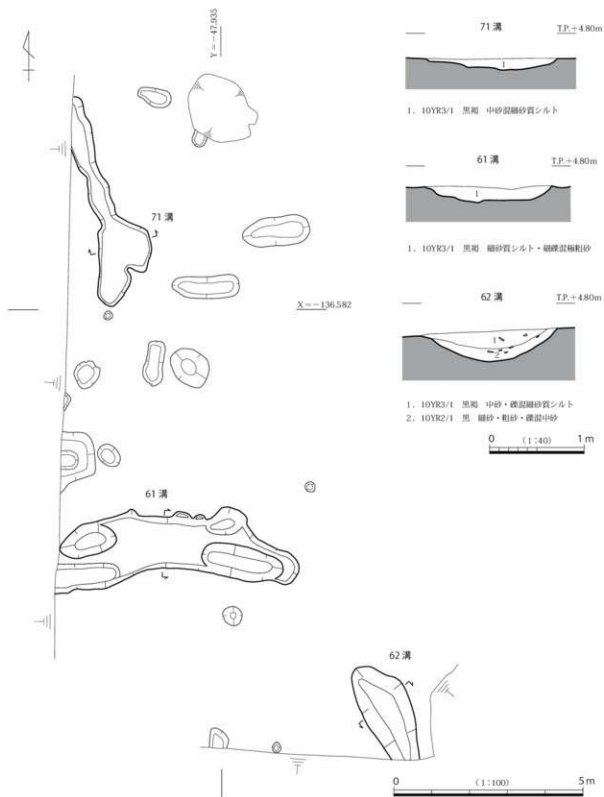


図57 第2面 61・62・71溝 平・断面図

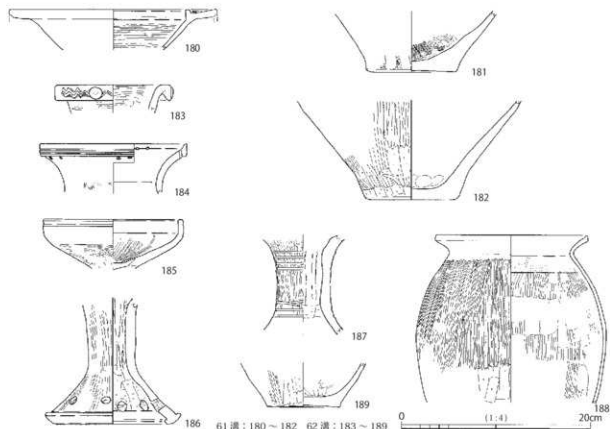


図58 第2面 61・62溝 出土遺物実測図

描波状文を巡らす。さらに竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。頸部は内外面共に横方向のヘラミガキを施す。184は口縁端部を上方につまみ上げ、端面に2条の凹線を巡らす。口縁端部直下には五方に2個一對の小円孔を穿つ。頸部はハケ後ヨコナデ調整である。

185～187は高杯である。185は直口の高杯である。杯部は深く、体部から口縁部は屈曲気味に立ち上がる。口縁端部に凹線文を巡らし、内外面共に体部はヘラミガキを施す。186・187は柱状の脚部である。186は八方に円孔を穿つ。187はヘラミガキ後に柱状部上部に4条、下部に3条のヘラ描沈線を巡らす。

188・189は甕である。188は口縁部がく字状に外反し、端部はつまみ上げる。体部外面はヘラケズリ後、上半にヘラミガキを施す。189は外面はヘラミガキである。

時期は弥生時代中期後葉から後期初頭と考えられる。

71溝 (図10・57)

南西端で検出し、南から北方向にのび、さらに調査外西側に続く。規模は幅0.4～1.45m、深さ0.16～0.12mである。埋土は黒褐色中砂混じり細砂質シルトである。

遺物は甕・器種不明小片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

72溝 (図10・59・60、図版25・34)

中央東側で検出し、東半を第1面1流路に破壊される。検出した規模は幅0.75～1.6m、深さ0.2～0.4mである。

埋土は4層に分けられた。第4層は黄灰色細砂混じり中砂、第3層は炭化物を含む黒色細砂質シルトである。第2層はオリブ黄色細砂質シルトブロックを多く含む黒色極細砂混じり細砂質シルトで

ある。第1層は黒褐色中砂から粗砂が混じる細砂質シルトである。この第1層から土器片が出土した。

遺物は壺・高杯・鉢・甕片が出土し、そのうち3点を図示し得た(図60)。

190は二重口縁壺である。口縁端部にキザミを巡らし、端面には竹管文を押捺した円形浮文と竹管文を交互に施文する。磨滅のため不明瞭であるが、頸部外面はハケ、内面はヘラミガキを施す。胎土に角閃石を含み生駒山西麓産である。

191はミニチュア高杯である。外面は口縁端部は横方向、杯部から脚部は縦方向のヘラミガキを施す。

192は甕底部である。底部外面にタタキ痕が残る

時期は弥生時代末から古墳時代初頭である。

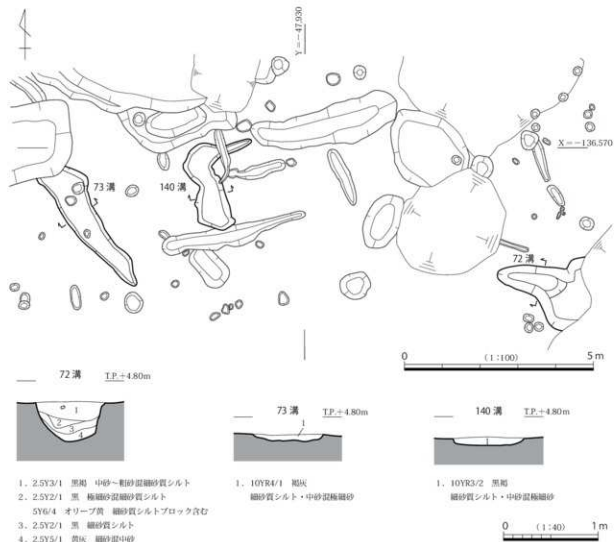


図59 第2面 72・73・140溝 平・断面図



図60 第2面 72溝 出土遺物実測図

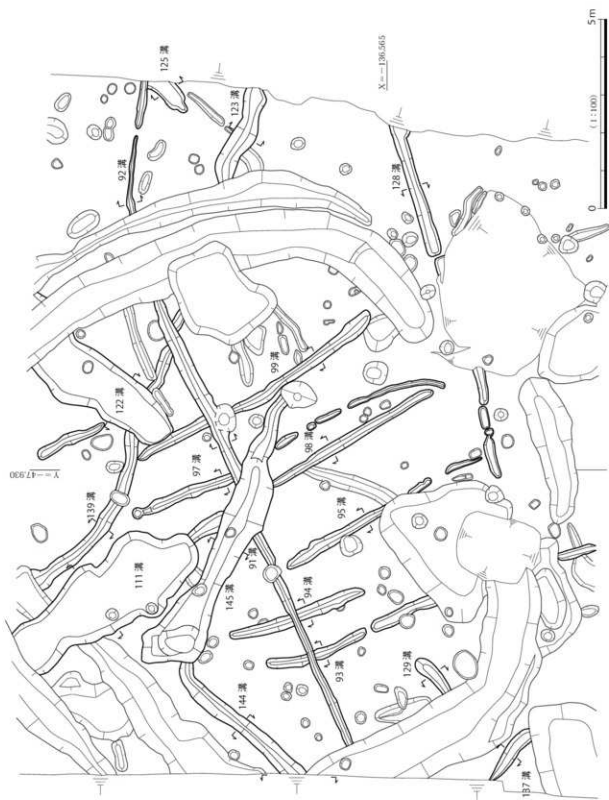


图61 第2面 91~95·97~99·111·122·123·125·128·129·137·139·144·145 满 平面图

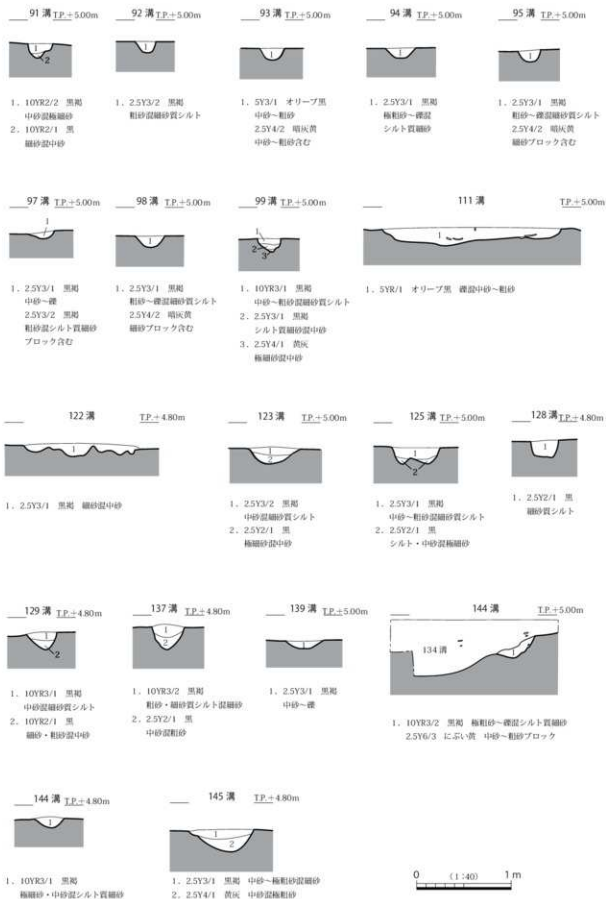


図 62 第 2 面 91～95・97～99・111・122・123・125・128・129・137・139・144・145 溝 断面図

73 溝 (図 10・59)

中央西端で検出し、南東から北西側にのびる。重複する遺構の新旧関係は 118 土坑に先行する。検出した規模は幅 0.5～0.95 m、深さ 0.07～0.11 m である。埋土は褐灰色細砂質シルトや中砂が混じる極細砂である。

遺物は器種不明細片が出土したのみである。

140 溝 (図 10・59、図版 25)

中央で検出し、南から北方向にのび、東へ L 字状に曲がる。新旧関係は 133 土坑より後出する。規模は幅 0.2～0.85 m、深さ 0.1 m である。

埋土は黒褐色細砂質シルトや中砂が混じる極細砂である。

遺物は壺・甕・器種不明片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

91・92 溝 (図 10・61・62、図版 24)

中央で検出し、北東から南西方向にのびる。92 溝は 39・40 溝間で検出されなかったが、規模や方向性から 91 溝と同一の溝と考えられる。重複する遺構の新旧関係は掘立柱建物 1、39・40・145 溝に先行し、93・94・97・99・125・139 溝より後出する。規模は幅 0.1～0.4 m、深さ 0.04～0.21 m である。

埋土は 91 溝は 2 層に分けられ、92 溝より砂質が強く、第 2 層は黒色細砂混じり中砂、第 1 層は黒褐色中砂混じり極細砂である。92 溝は黒褐色粗砂混じり細砂質シルトである。

遺物は壺・甕・器種不明細片が出土したが、図示し得なかった。

時期は古墳時代初頭と考えられる 39・40・145 溝に先行する。

93～95・97～99 溝 (図 10・61・62、図版 24)

中央で検出し、南東から北西方向に並行にのびる小溝群である。耕作に伴う溝状の遺構と考えられる。重複する遺構の新旧関係は掘立柱建物 1、130 土坑、91・122・145 溝に先行する。規模は幅 0.2～0.35 m、深さ 0.08～0.15 m である。各溝間隔は 0.6～1.05 m で一定でない。

埋土は砂を主体とする 93・97 溝、中砂から礫が混じる細砂質シルトが主体である 95・98・99 溝があり一様ではない。

遺物は壺・甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

111 溝 (図 10・61～63、図版 25)

中央西側で検出し、南東から北西方向にのびる。重複する遺構の新旧関係は 135 溝に先行し、90・98 溝より後出する。規模は幅 1.0～2.0 m、深さ 0.12～0.2 m である。

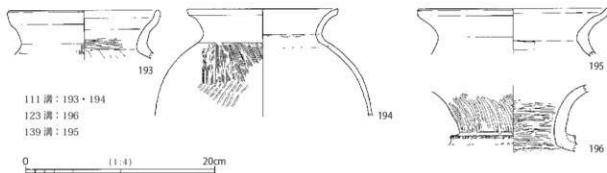


図 63 第 2 面 111・123・139 溝 出土遺物実測図

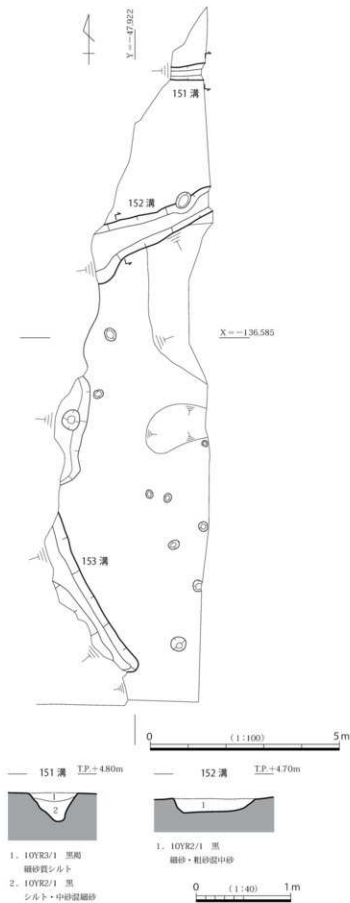


図64 第2面 151・152・153溝 平・断面図

埋土はオリーブ黒色礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明片が出土し、そのうち2点を図示し得た(図63)。

193は壺である。頸部は短く外反気味に立ち上がり、口縁部はやや受け口状である。外面はハケ調整、内面は口縁部にヘラミガキを施す。

194は甕である。口縁部は面をもち、外面は右上がりのタタキ整形後体部上半はハケ調整である。

時期は弥生時代末から古墳時代初頭である。

122溝(図10・61・62、図版25)

中央で検出し、南西から北東方向にのびる。重複する遺構の新旧関係は39・40溝に先行し、99・139溝より後出する。規模は幅1.25～1.40m、深さ0.19～0.22mである。底面は凹凸が著しい。

埋土は黒褐色細砂混じり中砂である。

遺物は高杯・甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

123・139溝(図10・61～63、図版25)

中央で検出し、南東から北西にのびる。調査区外東側に続く。39・40溝間で途切れているが、同一の溝と考えられる。重複する遺構の新旧関係は86土坑、39・90・122溝に先行する。規模は幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.15mである。

埋土は1～2層に分けられ、第2層が黒色極細砂が混じる中砂や中砂から礫、第1層が黒褐色中砂混じり細砂質シルトである。

遺物は123溝から壺・高杯・器種不明片が出土し、そのうち1点を図示し

得た(図63)。

196は壺である。外面は頸部に縦方向のヘラミガキを施す。肩部に断面形三角形の突帯を巡らし、突帯上部と突帯直下にキザミを入れる。内面は頸部に横方向のヘラミガキを施す。

139溝からは壺・甕・器種不明片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図63)。

195は広口壺である。頸部から口縁部へ短く外反し、口縁端部はつまみ上げる。

128溝(図10・61・62)

中央東側で検出し、東西方向にのびる。第1面12水溜・1流路に壊される。規模は幅0.35～0.4m、深さ0.05～0.17mである。

埋土は黒色細砂質シルトである。

遺物は壺・器種不明片が出土したが、細片のため図示し得なかった。

144溝(図10・61・62、図版25)

中央西側で検出し、南西から北東方向にのび、北端で東に屈曲する。遺構の新旧関係は134・145溝に先行する。規模は幅0.4～0.45m、深さ0.08～0.16mである。

埋土は黒褐色極細砂から礫が混じるシルト質細砂が主体である。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

145溝(図10・61・62、図版25)

中央で検出し、南東から北西側にのびる。掘立柱建物1に先行し、91・98・144溝より後出する。規模は幅0.35～1.25m、深さ0.08～0.19mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黄灰色中砂混じり極粗砂、第1層は黒褐色中砂から極粗砂混じり細砂である。

遺物は壺・高杯・甕・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

151溝(図10・64)

南東端で検出し、東西方向にのびる。西側は第1面1流路に壊され、調査区外東側に続く。規模は幅0.35m、深さ0.3mである。

埋土は2層に分けられ、第2層は黒色シルトや中砂混じり細砂、第1層は黒褐色細砂質シルトである。

遺物は出土しなかった。

152溝(図10・64、図版25)

南東端で検出し、南西から北東側にのび、西側は第1面1流路に破壊される。調査区外東側に続く。規模は幅0.6～1.0m、深さ0.12～0.2mである。埋土は黒色細砂や粗砂混じり中砂である。

遺物は壺・甕片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図65)。

197は二重口縁壺である。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部は斜め上方にひろがる。口縁下端にキザミを巡らす。

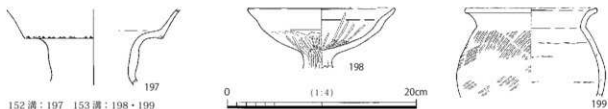


図65 第2面 152・153溝 出土遺物実測図

時期は弥生時代末から古墳時代初頭と考えられる。

153 溝 (図 10・64・65)

南東側で検出し、南東から北西側にのびる。第1面1流路に壊される。規模は幅0.55～0.7m、深さ0.3mである。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、2点を図示し得た(図65)。

198は高杯である。稜ははっきりせず、口縁部は内弯し、端部をまるくおさめる。内外面共に縦方向のヘラミガキ調整である。

199は甕である。体部外面を右上がりのタタキ整形後、部分的にナデ調整を行う。

204 溝 (図 10・66・67、図版 34)

北西側で検出し、南西から北東方向にのびる。重複する遺構の新旧関係は竪穴建物2・38土坑・35

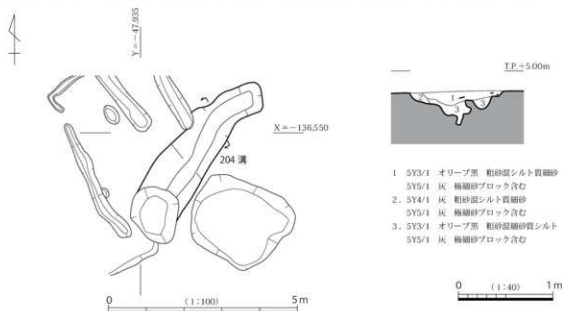


図66 第2面 204溝 平・断面図

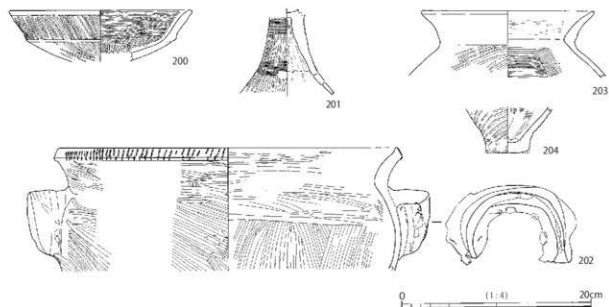


図67 第2面 204溝 出土遺物実測図

溝に先行する。規模は幅 0.85～1.3 m、深さ 0.2～0.3 m である。

埋土は 3 層に分けられ、第 3 層はオリーブ黒色粗砂混じり細砂質シルト、第 2 層は灰色粗砂混じりシルト質細砂、第 1 層はオリーブ黒色粗砂混じりシルト質細砂で、すべての層に基盤層に由来する灰色極細砂ブロックが混じる。

遺物は高杯・鉢・甕片が出土し、そのうち 5 点を図示し得た（図 67）。

200・201 は高杯である。200 は有稜高杯である。口縁部と杯体部間にははっきりした稜をもち、外寄せず、斜上方に開く。全体に器厚が厚いものである。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部が横方向、体部が縦方向のヘラミガキを施す。201 は脚部である。外面はハケ後縦方向のヘラミガキを施し、上部は 6 条の沈線、下部に 6 条の沈線を巡らす。柱状部にはシボリ痕が残る。

202 は大型の鉢である。口縁部は屈曲し、端部をややつまみ上げる。肩部に半円状の把手を一对付ける。内外面ともにヘラミガキ調整を施し、口縁部端面には 2 段のキザミ巡らす。

203・204 は甕である。共に外面はタタキ、内面はハケ調整である。

時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

第 6 層出土遺物（図 68、図版 34）

205・206 は壺である。205 は広口壺で、口縁端部は下方に拡張し、端部に棒状工具を押捺した円形浮文を貼り付ける。胎土は生駒山西麓産である。206 は二重口緑壺である。口縁端面に 11 条以上の櫛描波状文波状文を巡らし、竹管文を押捺した円形浮文を 2 段に貼り付ける。207 は小型壺である。体部外面は縦方向のヘラミガキを施すが、体部中位のみ横方向のヘラミガキを施す。211 は小型丸底壺である。

208～210 は高杯脚部である。208 は柱状部から裾部に屈曲し、大きく開く。外面はハケ後ナデ調整である。208・209 は四方に円孔を穿つ。210 は 2 個一対の円孔を穿つ。胎土は生駒山西麓産である。

212 は甕である。口縁部はく字状に外反し、端部は上方に肥厚する。内外面共にハケ調整である。体部外面に煤が付着する。

205・207 は弥生時代後期、206 は弥生時代末から古墳時代初頭、208・209・211 は古墳時代初頭、210 は弥生時代中期末から後期初頭、212 は弥生時代中期に相当する。

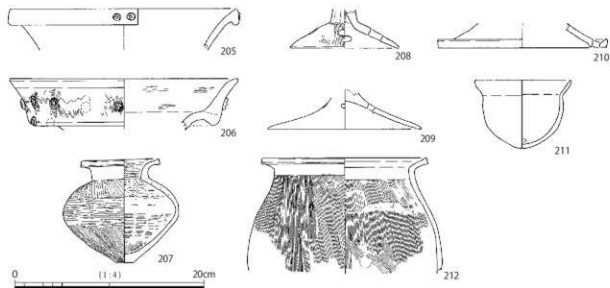


図 68 第 6 層 出土遺物実測図

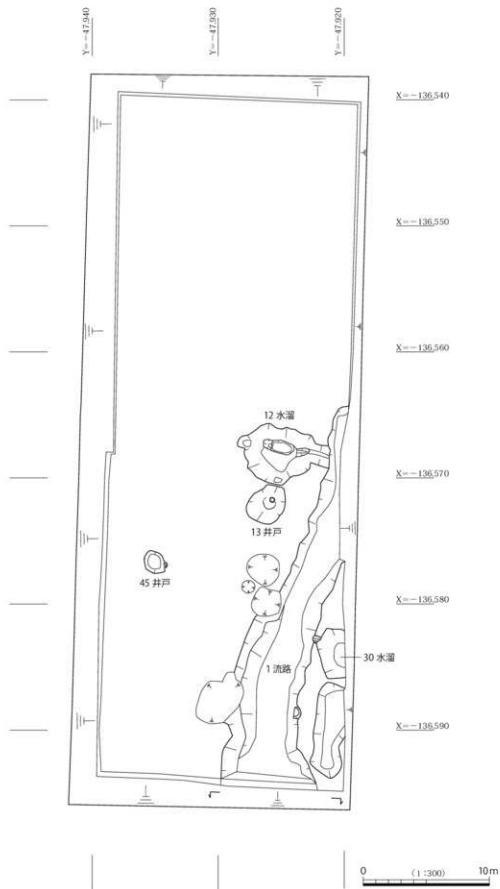


图 69 第 1 面 全体图

第3節 第1面（平安時代末～鎌倉時代）

第1面は第5層を掘削除去し検出した第6-1層上面を第1面として調査した。遺構は平安時代末から鎌倉時代の井戸・水溜・流路を検出した（図69）。

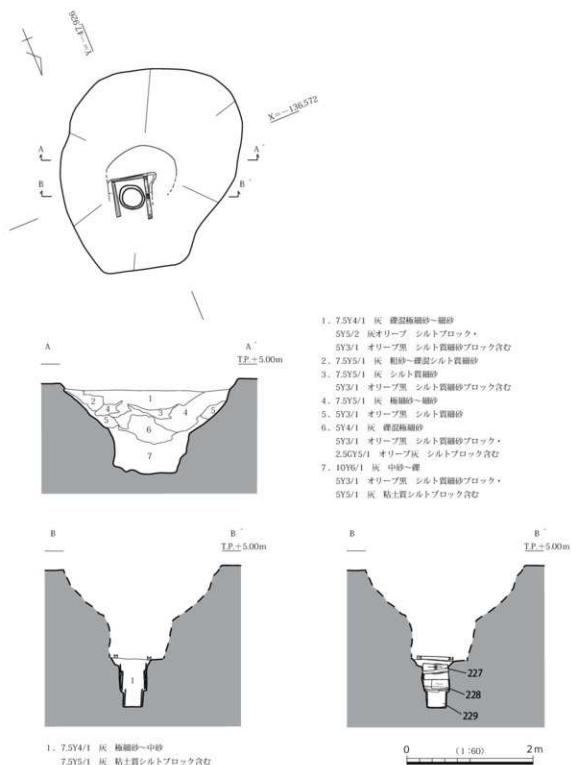


図70 第1面 13井戸 平・立・断面図

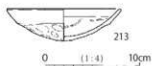
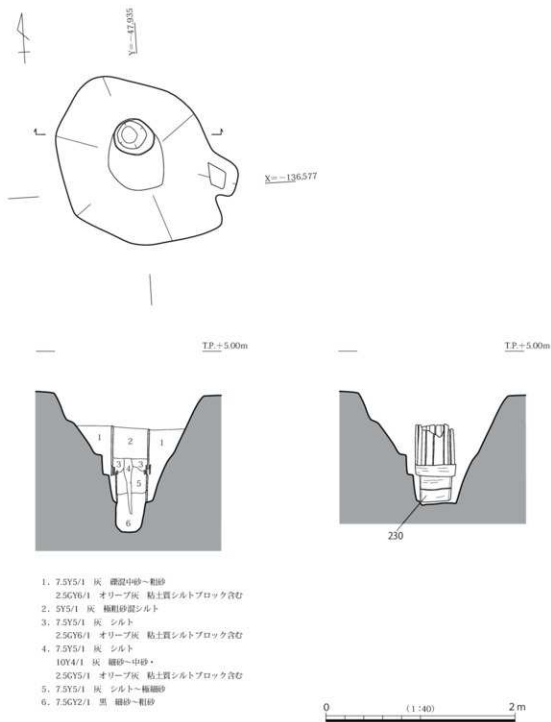


図71 第1面 13井戸
出土遺物実測図

13井戸 (図69～71、図版26・27・35)

中央、 $X = -136572 \cdot Y = -47926$ で検出した。掘方は2段になっており、上部は長軸3.15 m、短軸2.8 mの不整形な隅丸長方形である。下部は井戸枠である曲げ物に合わせて円形である。深さは2.25 mで、湧水層と見られる砂礫層まで掘りこまれる。

井戸枠の構造は方形木枠の下に曲げ物(写真図版35-227～229)を4段積み重ねる。方形木枠は一辺0.56 mに組まれる。曲げ物の大きさは1段目(227)が直径0.43 m、高さ0.13 mである。2・



1. 7.5Y5/1 灰 礫混中砂～粗砂
2. 5GY6/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック含む
2. 5Y5/1 灰 極粗砂混シルト
3. 7.5Y5/1 灰 シルト
- 2.5GY6/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック含む
4. 7.5Y5/1 灰 シルト
- 10Y4/1 灰 礫砂～中砂・
- 2.5GY5/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック含む
5. 7.5Y5/1 灰 シルト～極細砂
6. 7.5GY2/1 黒 細砂～粗砂

図72 第1面 45井戸 平・立・断面図

3段目はそれぞれ曲げ物を2重に入れ子状にしている。2段目の外側が直径0.46 m、高さ0.11 m、内側が直径0.41 m、高さ0.12 mである。3段目(228)の外側は直径0.44 m、高さ0.12 m、内側は直径0.4 m、高さ0.16 mである。最下段の4段目の曲げ物(229)は1段目から3段目より直径は小さく、深いものを使用しており、直径0.36 m、高さ0.26 mである。材質はいずれもヒノキである。

遺物は井戸枠内から陶器甕片・瓦器碗片・瓦質羽釜片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図71)。213は瓦器碗である。高台が付されず、皿状の形態である。外面はユビオサエ後に口縁部をヨコナデ調整のみである。内面にわずかにヘラミガキがされる。和泉型IV-1期を示す。

時期は14世紀前半と考えられる。

45 井戸 (図69・72、図版27・35)

南西側、 $X = -136577$ ・ $Y = -47935$ で検出した。掘り方は不整形な形で、規模は長軸1.8 m、短軸1.65 m、深さ1.15 mである。井戸枠は桶枠の下に曲げ物を2段積み重ねる。桶枠は長さ0.45 m、幅0.07 m程の板材を円形に18枚組む。材質はスギである。その下段の曲げ物は1段目が直径0.46 m、高さ0.11 m、2段目(写真図版35-230)は直径37 cm、高さ0.26 mである。材質はヒノキである。

井戸枠内埋土の第5・6層が井戸機能時に堆積した水成層で、その後第2・3層で埋め戻されている。遺物は出土しなかった。

12 水溜 (図69・73・75、図版36)

中央東側、 $X = -136568$ ・ $Y = -47925$ で検出した。掘り方は長軸5.6 m、短軸4.4 mの不整形

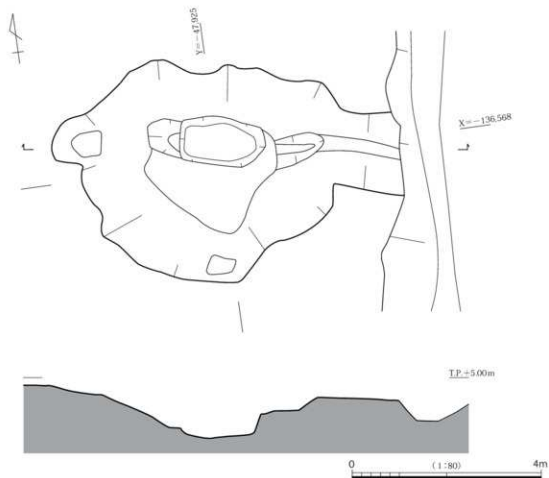


図73 第1面 12水溜 平・断面図

な楕円形で、中央が長軸 1.8 m、短軸 1.0 m 長方形に深く掘込まれる。深さは 1.1 m である。東側は溝状になり 1 流路と繋がっている。堆積状況は崩落により観察できなかったが、1 流路のオリーブ灰色極細砂から細砂により埋没していた。

遺物は常滑甕・土師器羽釜・瓦器羽釜・軒丸瓦が出土し、そのうち 4 点を図示し得た (図 75)。

214 は常滑甕である。頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は外反し、く字状である。口縁端部内面に浅い凹線が巡る。体部は押印文が帯状に連続的に施される。

215・216 は瓦器羽釜である。215 は口縁部は内傾し、段を持つ。体部は横方向のヘラケズリ調整である。外面下部には煤が付着する。216 は口縁部を曲線状に内傾し、端部は平坦面をもつ。内面はハケ調整である。217 は三巴文軒丸瓦である。

時期は出土遺物から 13 世紀と考えられる。

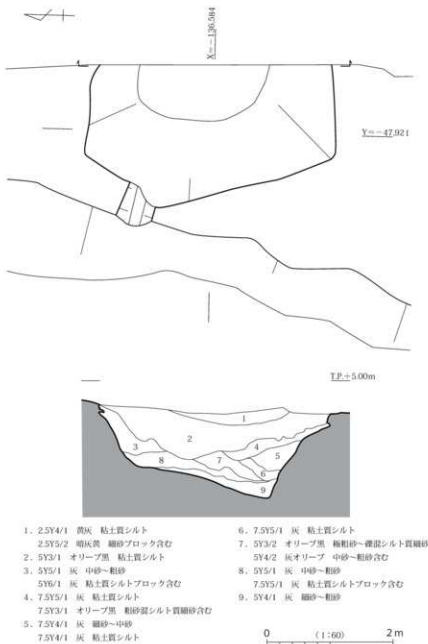


図 74 第 1 面 30 水溜 平・断面図

30水溜 (図69・74・75、図版36)

南東端、X=-136584・Y=-47921で検出した。調査区外東側に続く。掘り方は方形または長方形と推定され、西側は溝状になり1流路と繋がる。検出した規模は長軸3.9m、短軸2.2m、深さ1.4mである。

埋土は第9層から第5層までが機能時に堆積した水成層で、第1・2層の1流路からの粘土質シルトの氾濫堆積層で埋没している。

遺物は弥生土器高杯・甕片、陶器甕片、土師器皿が出土し、そのうち1点を図示し得た(図75)。

218は土師器皿である。口縁部内面に煤が付着し、灯明皿として使用されたと見られる。

時期は出土遺物から13世紀と考えられる。

1流路 (図7・8・69・76・77、図版28・36)

南東側で、北東から南西方向に流れる。検出した規模は、幅3.5~7m、深さ0.6~0.9mである。

遺物は瓦器椀・東播系須恵器捏鉢・常滑甕・土師器羽釜・瓦器羽釜・石製品・平瓦が出土し、そのうち8点を図示し得た(図77)。

219~221は和泉型瓦器椀である。219は内外面共にまばらなヘラミガキを施す。220・221は内

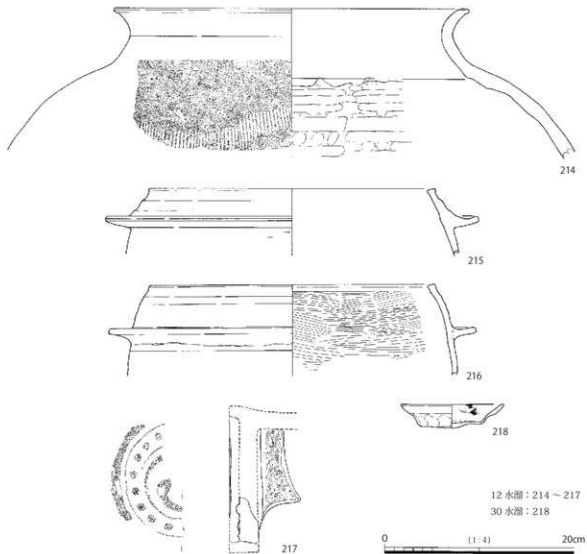


図75 第1面 12・30水溜 出土遺物実測図

面見込みに斜行子状の暗文が施される。

222 は東播系須恵器捏鉢である。223 は瓦器羽釜である。224 は土師器羽釜である。口縁部は曲線状に内傾し、端部を丸くおさめる。内面はハケ調整である。内面にコゲが付着する。

225 は滑石製石鍋である。口縁部直下に削り出された罅が巡る。罅の断面形は三角形である。口縁部はやや内湾する。

226 は平瓦である。凸面に縄タタキ、凹面は煤が厚く付着する。

出土した遺物は 12 世紀中頃に相当するが、堆積状況からこの流路は第 2 - 1 層段階までの長期間にわたる流路と見られる。

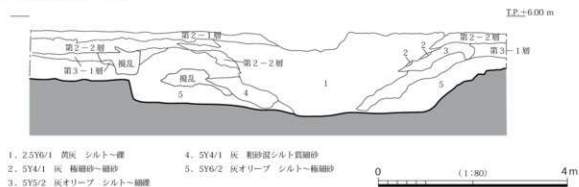


図 76 第 1 面 1 流路 断面図

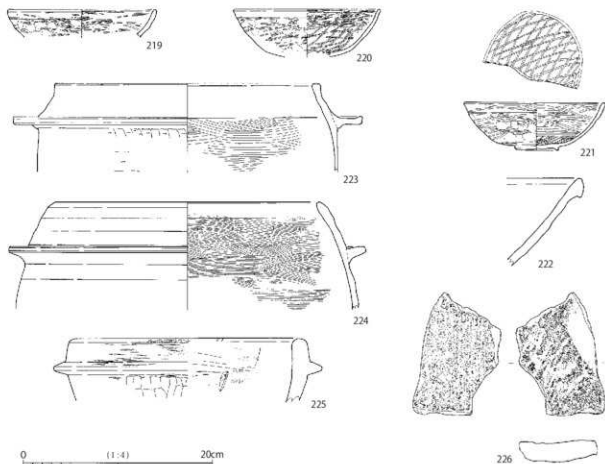


図 77 第 1 面 1 流路 出土遺物実測図

第5章 総括

今回の調査では弥生時代から中世までの2面の遺構面(図10・69)を検出した。第1面では平安時代末から鎌倉時代にかけての井戸2基、水溜2基、流路を検出した。調査区南東隅を北から南へ流れる1流路の兩岸には流路とつながる12・30水溜が掘られていた。第1次調査地点でも東西方向の流路を検出しており、幾つかの小河川が流れていたものと考えられる。

第2面は弥生時代中期中葉から古墳時代初頭の竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟、井戸2基、多数の土坑や溝を検出した。

第2面での調査地周辺の地形環境を見ていくと、今回の調査地点は北東端の標高5.0mから南東端の標高4.4mへ北から南方向に緩やかに下っている。その中で北半の標高4.6～5.0mに遺構が集中していた。周辺の既往調査を見ると、調査区から西へ約115mの第1次調査で弥生時代後期後半から末の遺構を検出した遺構面は標高4.2m前後である。そして調査区から南西へ約120mの第5次調査では、今回の調査の第2面とつながると考えられる弥生時代中期から古墳時代初頭の遺構を検出した灰黑色砂混じり粘土層下面の遺構面は標高3.8m前後である。今回の調査区で最も低い南東端と比べても第5次調査地は0.6m下がっており、東から西へやや低くなる地形であったと考えられる。

第2面で検出した弥生時代中期中葉から古墳時代初頭の遺構は概して弥生時代中期中葉から後期初頭、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の2時期に分けることができる。

弥生時代中期中葉から後期初頭 弥生時代中期中葉から後期初頭は調査区南半を中心に検出され、70井戸、44・63・68・87・130・131・150土坑、24・61・62溝がある。中期中葉の68土坑を除くと、中期後半から後期初頭のものである。そのなかでも61・62溝は、調査区南西端で検出されたため全体の形状が不明ではあるが、L字形に近い形状を成しており方形周溝墓の可能性が考えられる溝である。これまでの調査の中で第5次調査では弥生時代中期後半の竪穴建物や土坑・溝が検出されている。特に弥生時代中期末に中心があるとされており、今回の調査で検出した遺構の時期と合致し、同時期の集落と考えられる。服部遺跡の中でも南側に弥生時代中期後半から後期初頭の集落が密でないもの広がっていたと考えられる。またこの第5次調査でも周溝墓の可能性のある溝が検出されており、今後当該期の墓域も明らかになっていくのではないだろうか。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭 弥生時代後期前半に比定される遺構は204溝のみで遺構は減少するが、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては調査区北半を中心に急激に増加する。

弥生時代後期後半から末には竪穴建物2・3、4・29・32・38・59・76・118土坑が比定される。これらの遺構の中で竪穴建物2・3は近接して建てられており、同時期に2棟が建てられていたとは考えにくい。軸を同じくしていることから建て替えの可能性が考えられる。また竪穴建物2・3は第4次調査で検出された1・2号墓やSH-1・SB-4とほぼ同軸になり、地形に沿って造られたと見られる。今回の調査で検出された竪穴建物の特徴として、周囲に外周溝を巡らしていることがあげられる。このような外周溝をもつ竪穴建物は第4次調査や、調査地点から東方の小曾根遺跡第19次調査や南方の穂積遺跡7・18・24次調査でも検出されている。小曾根遺跡第19次調査では5m程の竪穴建物の周囲を幅2mの外周溝が巡るが、それらのいずれも建物周囲を全周しておらず、今回の調査で検出された竪穴建物と非常に似通っている。服部遺跡とその周囲の低地の遺跡で同時期に外周溝を持つ建物



圖 78 第 2 面 時期別全体圖

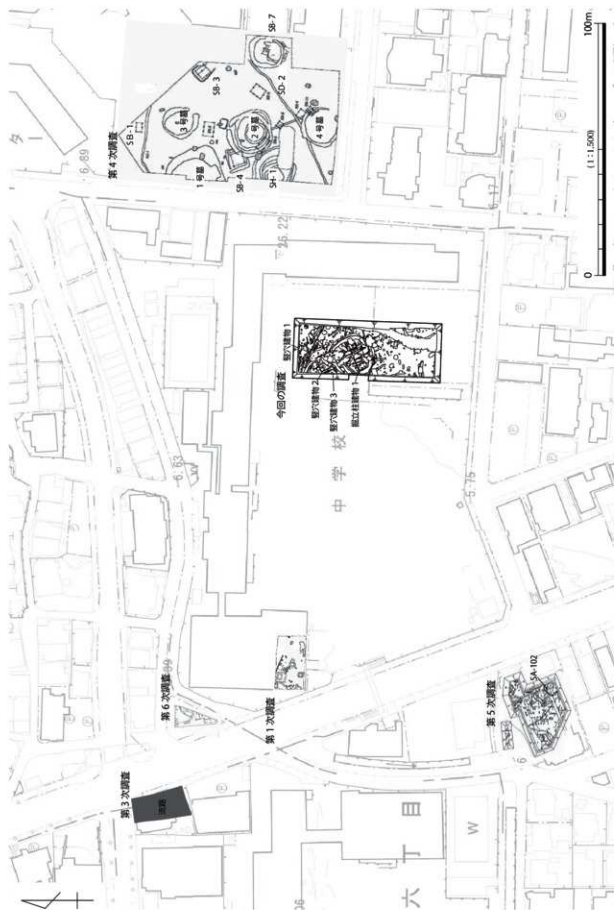


図79 今回の調査区と既往調査全体図

が見られることは環境に即した排水対策であったと見られる。

弥生時代末から古墳時代初頭に比定される遺構には掘立柱建物1、19井戸、16・17・18・37・42・86・89土坑・39・40・72・134～136・152・153溝がある。掘立柱建物1に対して39・40・134～136溝は中央から南側によるものの、建物をとりまくように掘られている。このような掘立柱建物の周囲に溝を巡らす例は、第4次調査のSB-3・4があるが、建物脇に溝が掘削されている。これに対して、掘立柱建物1の周囲を巡る溝は、建物に対して3.5倍余り広い範囲を囲っており、排水のためだけではなく建物と周囲を区画する意味合いがあったのではないだろうか。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落の範囲を既往調査と合わせると、第3次調査地点では弥生時代後期以降に形成され、庄内式併行期には埋没し低湿地化した南北方向の流路が検出されている。この地点から東方の第4次調査地点までは集落の広がりが確認されており、少なくとも東西300m、南北150m、面積45000㎡には広がっていたと見られる。

〈引用・参考文献〉

- 服部遺跡発掘調査団・豊中市教育委員会 1986 『服部遺跡発掘調査報告書』
- 豊中市教育委員会 1994 「第Ⅱ章 服部遺跡第2次調査」『豊中市文化財調査報告34集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1993(平成5)年度』
- 豊中市教育委員会 1995 『豊中市埋蔵文化財年報3』
- 1996 『豊中市埋蔵文化財年報4』
- 六甲山麓遺跡調査会 1996 『服部遺跡-第5次調査-』
- 豊中市教育委員会 2003 『小曾根遺跡-第7次発掘調査報告書』
- 豊中市史編さん委員会 2005 『新修 豊中市史』第4巻 考古
- 豊中市史編さん委員会 2009 『新修 豊中市史』第1巻 通史1
- 府営上津島住宅遺跡調査団・
- 府営上津島住宅(第2期)遺跡調査団 2012 『上津島南遺跡-難波津推定地・古代「河尻」域における集落域の発掘調査-』
- 豊中市教育委員会 2012 「服部遺跡第6次調査現地説明会資料」

写 真 图 版

図版1 調査地周辺航空写真



出典：国土地理院ウェブサイトより転載・加筆

図版2 第2面 全体図





1. 第2面 全景 (南から)



2. 第2面 北半全景 (南東から)

図版4 遺構



1. 第2面 南半全景（南から）



2. 第2面 竪穴建物1・21溝 全景（北東から）



1. 第2面 竪穴建物2・5溝 全景(南東から)



2. 第2面 竪穴建物2 全景(南東から)

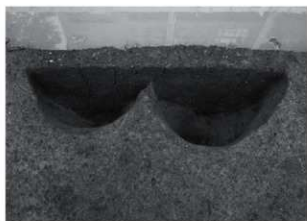
図版6 遺構



1. 第2面 竪穴建物1 28ピット 断面(南から)



5. 第2面 竪穴建物2 112柱穴 断面(北から)



2. 第2面 竪穴建物1 46・47ピット 断面(南から)



6. 第2面 竪穴建物2 114柱穴 断面(東から)



3. 第2面 竪穴建物1 21溝 断面(南東から)



7. 第2面 竪穴建物2 北側壁溝 断面(西から)



4. 第2面 竪穴建物2 埴 断面(南から)



8. 第2面 竪穴建物2 5溝 断面(南から)



1. 第2面 竪穴建物3 全景 (南西から)



2. 第2面 竪穴建物3 断面 (東から)



4. 第2面 竪穴建物3 55ピット 断面 (南から)



3. 第2面 竪穴建物3 51ピット 断面 (南東から)



5. 第2面 90溝 土器出土状況 (北東から)



1. 第2面 掘立柱建物1、39・40・134・135・136溝 全景（南東から）



2. 第2面 掘立柱建物1 全景（南から）



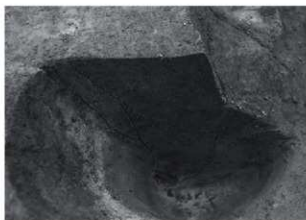
1. 第2面 掘立柱建物1 158柱穴 断面(東から)



5. 第2面 掘立柱建物1 165柱穴 断面(西から)



2. 第2面 掘立柱建物1 159柱穴 断面(東から)



6. 第2面 掘立柱建物1 175柱穴 断面(東から)



3. 第2面 掘立柱建物1 163柱穴 断面(西から)



7. 第2面 40溝 断面(南から)



4. 第2面 掘立柱建物1 164柱穴 断面(西から)



8. 第2面 136溝 断面(東から)



1. 第2面
39溝
断面(南から)



2. 第2面
134溝
断面(南東から)



3. 第2面
135溝
断面(南西から)

1. 第2面
39溝
土器出土状況
(南から)



2. 第2面
39溝
土器出土状況
(南東から)



3. 第2面
136溝
土器出土状況
(東から)





1. 第2面
19井戸
断面(西から)



2. 第2面
70井戸
全景(東から)



3. 第2面
70井戸
断面(南から)



1. 第2面
11 土坑
断面 (南から)



2. 第2面
16 土坑
土器出土状況
(南から)



3. 第2面
16 土坑
断面 (南から)



1. 第2面
17 土坑
土器出土状況
(南から)



2. 第2面
17 土坑
断面 (南から)



3. 第2面
18 土坑
断面 (南西から)



1. 第2面
29土坑
土器出土状況
(南東から)



2. 第2面
29土坑
断面(南東から)



3. 第2面
32土坑
断面(南から)



1. 第2面
37 土坑
土器出土状況
(南西から)



2. 第2面
37 土坑
断面 (南西から)



3. 第2面
38 土坑
断面 (南西から)



1. 第2面
59土坑
断面(南から)



2. 第2面
60土坑
断面(南西から)



3. 第2面
64土坑
断面(東から)



1. 第2面
66土坑
断面(南東から)



2. 第2面
67土坑
断面(南から)



3. 第2面
68土坑
土器出土状況
(南から)

1. 第2面
68土坑
断面(東から)



2. 第2面
69土坑
断面(西から)

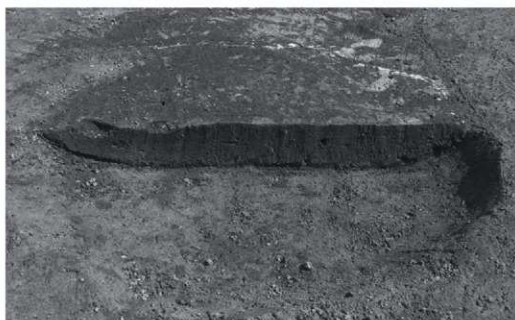


3. 第2面
76土坑
断面(北から)





1. 第2面
107 土坑
断面 (東から)



2. 第2面
110 土坑
断面 (西から)



3. 第2面
118 土坑
断面 (西から)



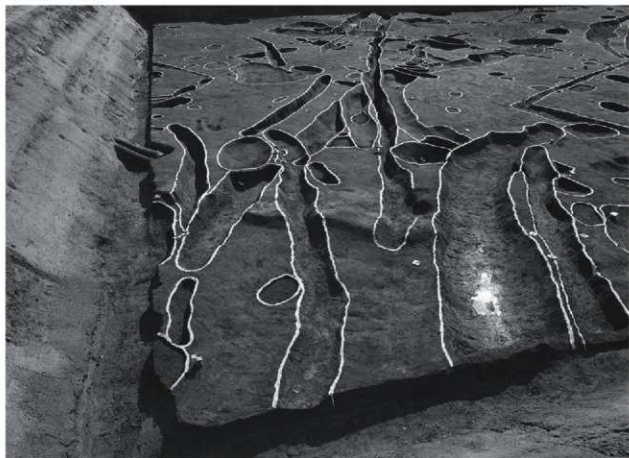
1. 第2面
131 土坑
断面 (南から)



2. 第2面
133 土坑
断面 (南東から)



3. 第2面
197 土坑
断面 (南西から)



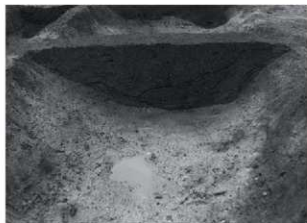
1. 第2面 6・9・10・14・15・22溝 全景（北西から）



2. 第2面 6溝 断面（東から）



4. 第2面 14溝 断面（西から）



3. 第2面 9溝 断面（南東から）



5. 第2面 15溝 断面（西から）

1. 第2面
6・24溝
全景(南東から)



2. 第2面
22溝
全景(南東から)



3. 第2面
61・62溝
全景(北東から)





1. 第2面 91・93～95・97・99溝 全景 (南東から)



2. 第2面 22溝 断面 (西から)



4. 第2面 61溝 土器出土状況 (東から)



3. 第2面 24溝 断面 (南東から)



5. 第2面 62溝 断面 (北西から)



1. 第2面 72溝 断面(東から)



5. 第2面 140溝 断面(南から)



2. 第2面 81溝 断面(北東から)



6. 第2面 144溝 断面(北東から)



3. 第2面 111溝 断面(南東から)



7. 第2面 145溝 断面(南東から)



4. 第2面 122溝 断面(北東から)



8. 第2面 152溝 断面(西から)



1. 第1面
13井戸
上層断面
(北から)



2. 第1面
13井戸
下層断面
(北から)



3. 第1面
13井戸
井戸枠検出状況
(北から)

1. 第1面
13井戸
井戸枠曲物
検出状況
(北から)



2. 第1面
45井戸
井戸枠
検出状況
(南から)



3. 第1面
45井戸
断面 (南から)





1. 第1面
1流路
全景（北東から）



2. 第1面
1流路
断面（1）
（北から）



3. 第1面
1流路
断面（2）
（南西から）



1. 北壁断面
(南から)



2. 東壁断面
(西から)



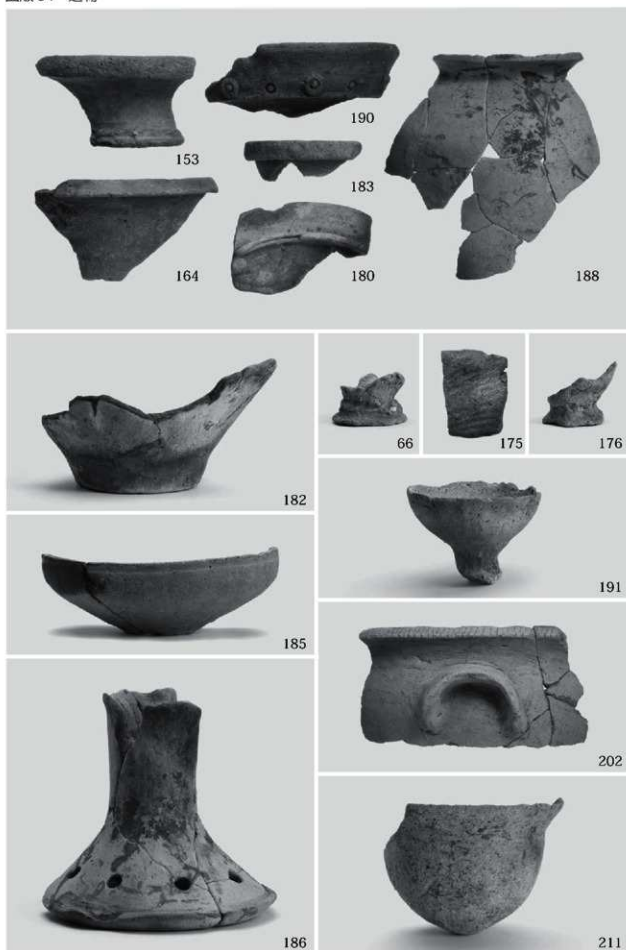
3. 東壁断面
(西から)













227



228

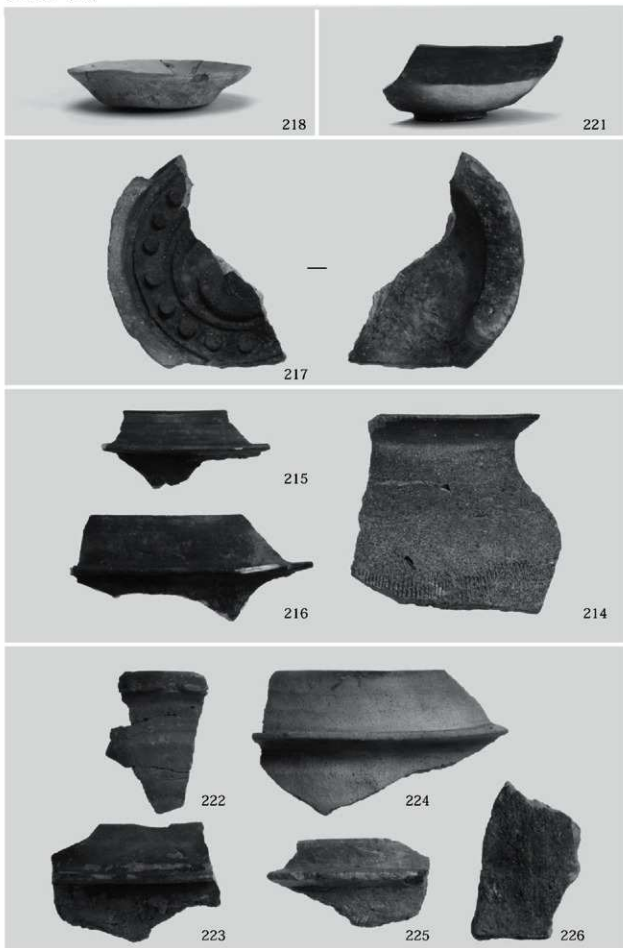


229



230





報 告 書 抄 録

ふりがな	はっとりいせき						
書 名	服部遺跡						
副 書 名	豊中市立第四中学校校舎建替工事に伴う発掘調査報告書						
巻 次 数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第266集						
編著者名	福佐美智子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所 在 地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel. 072-299-8791						
発行年月日	2016年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号			(㎡)	
はっとりいせき 服部遺跡	おおさかふもとなかし 大阪府豊中市 はっとりいせきまちようめ 服部本町4丁目44 ほか ひとつ 他21筆	27208	56	北緯 34° 45' 52" 東経 135° 28' 45"	2015.7.21 ～ 2015.11.19	1066㎡	豊中市立 第四中学校 校舎建替 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
服部遺跡	集落	古代～中世	井戸・水溜・流路		瓦器・瓦質土器・土師質土器・瓦・石製品		
		古墳	掘立柱建物・土坑・溝		土師器	古墳時代初頭の溝に囲まれた掘立柱建物	
		弥生	竪穴建物・土坑・溝		弥生土器	外周溝を伴う竪穴建物	
要 約	弥生時代中期後半から古墳時代初頭の集落から竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝を検出した。弥生時代中期後半から集落が形成され、周溝墓の可能性のある溝も検出した。弥生時代後期後半から古墳時代初頭には集落は最も盛期を向かえ、竪穴建物や掘立柱建物をはじめとして多くの遺構や遺物が検出された。						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第266集

服部遺跡

豊中市立第四中学校校舎建替工事に伴う
発掘調査報告書

発行年月日／2016年3月31日

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地